

# 五十瓊敷入彦命 宇度墓整備工事予定区域の事前調査

## はじめに

当墓の所在する大阪府泉南郡岬町は、大阪府の南西端に位置しており西と南を和歌山県に接している(第1図)。大阪府の海岸線は、大阪湾に面して北から南西方向へ緩やかな弧状を呈しつつ延びていくが、それが紀伊半島に向けて南に屈曲する場所にあたる。北側には大阪湾が広がり、西側には友ヶ島水道(紀淡海峡)を挟んで淡路島を臨むことができる(図版1)。また、天候に恵まれれば北に六甲山地や明石海峡を見ることができる(図版2-1)。東~南側は和泉山脈の西端付近となり、標高約350~420mを測る組石山、大福山、札立山、飯盛山などから派生した山塊が迫っており、そのため平野部は狭い(第2図、図版2-2)。

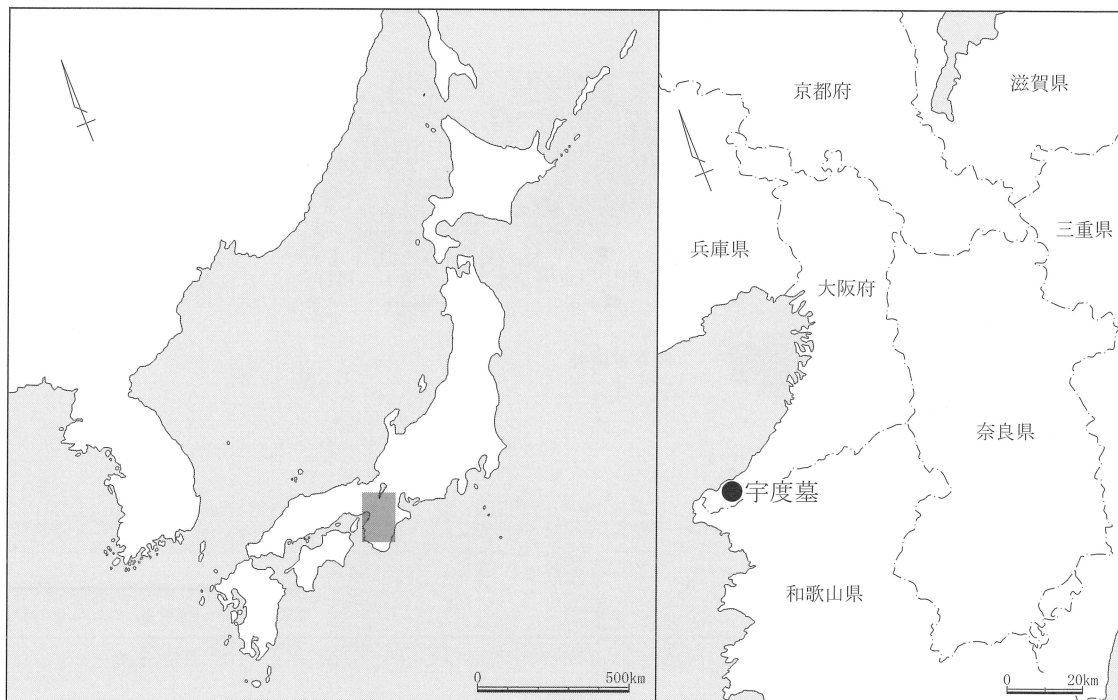
また、上記山塊の谷筋を源流とする番川が、当墓から西側約100m付近を南から北西方向に流れ、大阪湾に注いでいる。その東岸の平野部に移行していく段丘状の緩やかな斜面上に、当墓は立地している。後円部を東側にして、主軸をおおむね東西に向けている。また、当墓の北側が狭いながらもおおむね平野部となっており、当墓周辺から海岸線と番川東岸の範囲に現在の集落が形成されている。

なお、後述するとおり、主として番川から当墓で使用された葺石が採集されたと考えられる(図版21-2~4)。(清喜裕二)

### (1) 周辺の遺跡

上述したように宇度墓の周囲には平坦な部分が少ないため、それほど遺跡が分布しているわけではない。

当墓が築造された狭い平地部分には西陵古墳(前方後円墳：墳長約210m)や西小山古墳(造出付円墳：直径約50m)といった同時代の古墳が集中して築造されており、当墓も含めて淡輪古墳群と呼称されている。西陵古墳は規模も当墓に似た前方後円墳であり、当墓を東陵として対になる関係として認識されていたようである。また、西小山古墳は金銅装眉庇付冑や短甲などが出土したことで著名である。当墓、西陵古墳、西小山古墳のいずれにも淡輪系埴輪と呼ばれるような須恵器の技法がみられる特徴的な埴輪が供給されていることで古くから注目される地域でもある。



第1図 宇度墓 概略位置図 (1/25,000,000、1/2,000,000)

当墓の周辺に存在する古墳時代の集落遺跡としては山田遺跡、淡輪遺跡などをあげうるが、これらの集落がこれらの古墳の存立基盤といえるほどのものであったのかは不明である。古墳は平地だけでなく、丘陵上にも築造されていたようであり、鴻ノ巣山古墳群や久保谷古墳群といった古墳時代後期の群集墳も確認されている。

このような古墳時代の遺跡のほかには縄紋時代の遺跡が当墓の周囲に点在する。上述した淡輪遺跡は縄紋時代後期を主体とする和泉地域を代表する集落遺跡であり、岬公園内遺跡も縄紋時代を主体とする遺跡である。なお、過去の調査から淡輪遺跡は当墓の下層まで広がっている可能性のあることが指摘されており<sup>(1)</sup>、これを裏付けるように今回の調査では墳丘盛土中から縄紋土器が確認されている。

## (2) 来歴と既往の調査

宇度墓は明治13年(1880)12月28日に第11代垂仁天皇の皇子である五十瓊敷入彦命の墓として現在の場所に治定されている。宇度墓についてはこの以前である明治8年(1875)3月8日に「和泉国日根郡自然田村字玉田山」が治定されており、これが明治12年(1879)2月7日に取り消されるという経緯があった。この「和泉国日根郡自然田村字玉田山」は茅渟菟砥川上宮の伝承地として祀られているなど、江戸時代には宇度墓の所在地として『泉州誌』、『陵墓一隅抄』、『和泉名所図絵』などにおいて有力視されていた場所である。この伝承地付近には現在、後期古墳である玉田山1号墳(円墳：直径約12m)の存在することが確認されている。なお、現在の場所に治定された根拠としては、前方後円形であることなどが重視されたようである。

現在の場所に治定されて以降、当墓に関する多くの公文書が残されている。その多くは周濠・堤の修繕や濠水の使用に関するものであるが、後円部墳頂の陥没箇所を埋め立てたといった記録もみられる<sup>(2)</sup>。盗掘坑を埋めたものであろうか。

なお、当墓に関する主な調査歴としては、外堤南側の石積改修、見張所横外柵設置、飛地ろ号墳丘裾保護その他工事を実施するのに先立って昭和58年(1983)に事前調査がおこなわれており、外堤南側の石積改修箇所から埴輪などが出土している(本誌第36号にて報告)。そして、その事前調査時に当墓北造出周辺で採集された埴輪が土生田純之氏によって紹介されている(「宇度墓出土の埴輪」本誌第38号)。翌年の昭和59年(1984)には前方部北西隅の外堤外法の石垣を改修した際に立会調査がおこなわれ、埴輪などが少量出土している(本誌第36号にて報告)。また、同年には外堤北西隅にある樋管の修繕工事に伴う立会調査も実施されており、埴輪が数点出土している(本誌第39号にて報告)。近年では濠内の堆積土除去を中心とした工事



第2図 宇度墓 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

が実施され、立会調査がおこなわれたものの遺構・遺物は確認されなかった(本誌第65号〔陵墓篇〕にて報告)。なお、この調査の際に墳丘北側の汀で埴輪片が多数採集されており、それらの遺物は今回の報告に含まれている。

また、当墓の南側の隣接地では昭和56～57年(1981～82)にかけて大阪府教育委員会による発掘調査がおこなわれ、当墓が二重の周濠をもつことが確認され、中堤上の不明土坑からは当墓のものと考えられる埴輪片が多数出土した<sup>(3)</sup>。

(加藤一郎)

### (3) 墳丘の現況

宇度墓の現状について、新たに測量した地形図や周辺の地形などから述べる(第5図)。今回の事前調査で得られた所見から判明した事実や考察については、「4調査の所見」の「(1)墳丘の規模と構造について」で述べる。なお、本報告で使用する座標は、ITRF(国際地球基準座標系)に基づいた世界測地系の平面直角座標第Ⅵ系を用い、地図中で方位記号の指し示す方角は座標北である。また、高さの基準面には東京湾平均海面(T.P.)を用いた。ただし、大正15年(1926)測量の陵墓地形図(第3図)については上記と異なる。

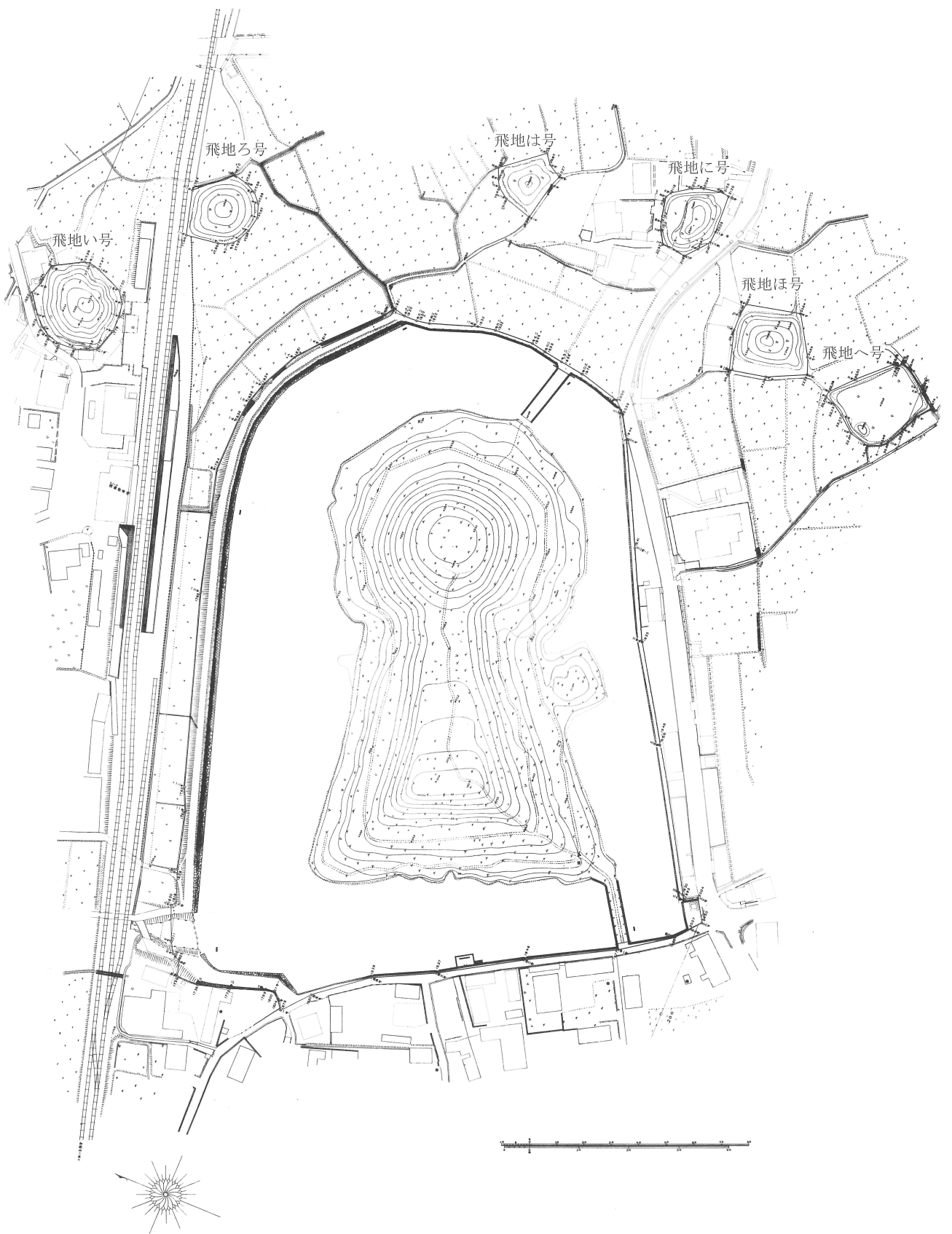
**周辺地形** 宇度墓は南の山塊より下る傾斜地が緩やかになる平坦部分に築かれている。現状では樹木のため見えないが、築造当初の墳丘頂部からは大阪湾を望むこともできたと考えられる。斜面が南から北へと下っていることから、平坦部分を確保し易いよう東西主軸で墳丘が築かれていることがわかる。墳丘の主軸は、座標北より約62度東に傾いている。墳丘は盾形の周濠で囲まれ、周濠外側には周堤の痕跡があり、その外側では浅い溝が見つかった。そのことから、築造当初は墳丘が周濠と周堤によって囲まれており、外堤の外側にも全周するかは不明だが、溝があったと考えられている<sup>(4)</sup>。周濠の水は、宇度墓南西隅付近にある入水口等より絶えず供給があり、宇度墓北西隅の樋門より出水しない限りは、通年豊かな水量を保っている。

**墳形** 前方後円形の墳丘である。墳丘は後円部・前方部・造出部が明瞭で、段築については後円部・前方部が3段築成になっている。後円部頂は円形の平坦面で、その北端付近にはいつ立てられたものか不明であるが、長径約20cm以上の石が距離を空けて3箇所のみられる。また、後円部頂には白色円礫のみられる。後円部と同じく前方部頂も狭い平坦面となっており、そこから後円部へと東に下っていく。前方部中程までは傾斜が急で、中程からくびれ部まではほぼ平坦になっている。後円部頂と同じく、前方部第3段目南端付近にも石が1箇所立っている。

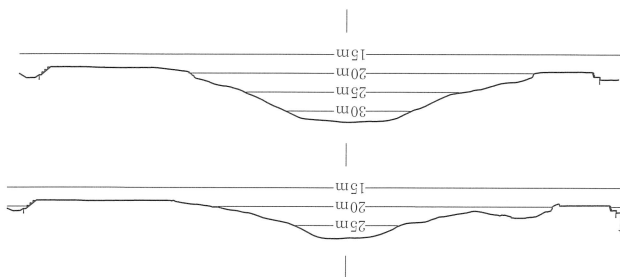
宇度墓墳端は周濠の波浪によって浸食が著しいものの、後円部・前方部の上部は良好な残存状態で、一部本来の葺石が露出している箇所もある。墳端の浸食状況については、墳丘北側と南側とで大きく異なり、南側の第1段目斜面は若干残っているものの、北側の第1段目斜面はほぼ残っていないと考えられる。北側では第1段目斜面だけでなく、第1段目テラスまで墳丘が崩れている箇所もあり、第1段目テラスの埴輪列が露出しないし周濠側へ崩落している箇所もある。北側が大きく浸食を受けた原因については、人為的な要因も考慮しなければならないが、主要因としては海からの風によって濠水に波浪が生じ、それが墳端を削ったものと考えられる。宇度墓が南から北への緩斜地にあることから、北側の濠が南に比べて深く、濠の水が干上がりにくいことも北側が大きく浸食を受けた原因の一つであろう。北造出と南造出を比較すると、波浪による浸食の影響は明らかで、北造出上部は現状ほとんど残っていない。

大正15年測量の陵墓地形図と平成26年測量の図を重ねてみると、重ねてみるまでは87年の間に墳丘が波浪等によって、より浸食を受けたのではないかと思っていたが、実際はほとんど削られていないことがわかった。これは、周濠北西隅の樋門によって周濠の水位が一定に調節され、残存している墳丘部分に波浪がほとんど当たらなかったためと考えられる。

**規模** 現状の地形図より読み取れる調査前の数値を記す。墳丘の主軸長は、後円部と前方部で崖面になっている傾斜変換点で測ると約173mである。墳丘の主軸と直交する後円部の南北最大幅は、崖面になっている傾斜変換点で測ると約93mである。墳丘の主軸と直交する前方部の南北最大幅は、崖面になっている傾斜変換点で測ると約111mである。北造出は上部がほとんど残っていないものの、東西長約20m、南北長約11mである。南造出は東西長約24m、南北長21mである。周濠は南側が一部埋め立てられているが、

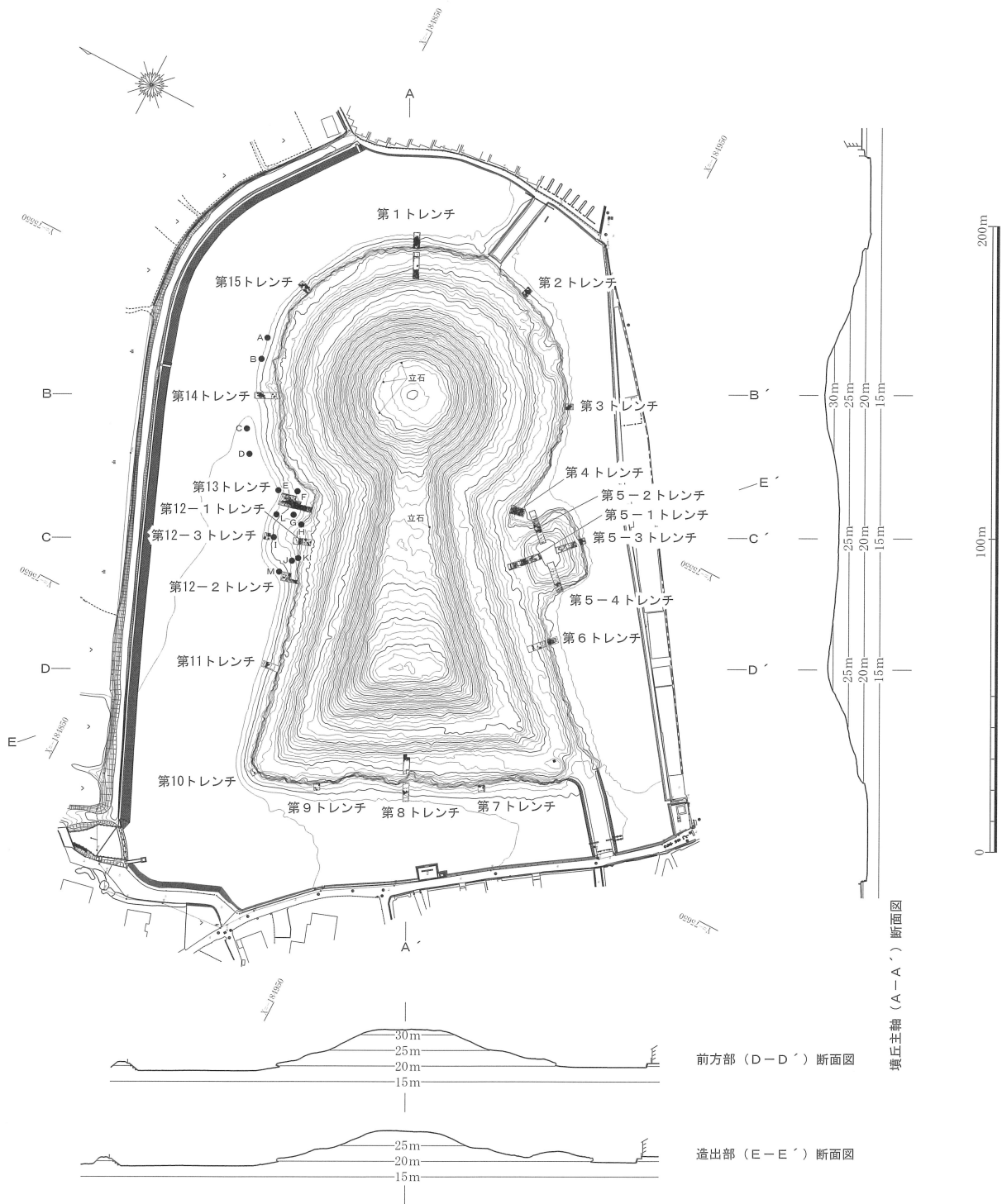


第3図 宇度墓 陵墓地形図 (1/2,000)



図里堀 (C-C) 掘り跡

図里堀 (B-B) 掘り跡



塚丘社軸 (A-A') 断面図

前方部 (D-D') 断面図

造出部 (E-E') 断面図

第4図 宇度墓 トレンチ配置図 (1/2,000)

現状は東西長約 235m、南北長約 175mである。

第 2 段目の主軸長は、等高線の粗密から読み取れた傾斜変化点で測ると約 157m である。墳丘の主軸と直交する後円部第 2 段目の南北最大幅は、等高線の粗密から読み取れた傾斜変化点で測ると約 81m である。墳丘の主軸と直交する前方部第 2 段目の南北最大幅は、等高線の粗密から読み取れた傾斜変換点で測ると約 89m である。

第 3 段目の主軸長は、等高線の粗密から読み取れた傾斜変化点で測ると約 131m である。墳丘の主軸と直交する後円部第 3 段目の南北最大幅は、等高線の粗密から読み取れた傾斜変化点で測ると約 56m である。墳丘の主軸と直交する前方部第 3 段目の南北最大幅は、等高線の粗密から読み取れた傾斜変化点で測ると約 56m である。

後円部主軸上の高さは墳頂で標高約 33m、第 2 段目テラスで約 24m、第 1 段目テラスで約 21.5m、後円部裾で約 19.5m となっており、後円部裾から墳頂までの比高差は約 13.5m を測る。前方部主軸上の高さは墳頂で標高約 31.75m、第 2 段目テラスで約 24.25m、第 1 段目テラスで約 22m、前方部裾で約 19.5m となっており、前方部裾から墳頂までの比高差は約 12.25m を測る。北造出の高さは頂部で標高約 19.5m、北造出裾から墳頂までの比高差は約 1 m を測る。南造出の高さは頂部で標高約 23m、南造出裾から墳頂までの比高差は約 3 m を測る。上記のことから後円部に比べ、前方部は規模が大きいものの、墳頂は 1 m 以上低いことがわかる。

墳丘各段の高さは場所によって異なるが、後円部主軸上では第 1 段目が約 2 m、第 2 段目が約 2.5m、第 3 段目が約 9 m で、前方部主軸上の第 1 段目が約 2.5m、第 2 段目が約 2.25m、第 3 段目が約 7.5m となっていることから、第 1、2 段目に比べて第 3 段目が著しく高いことがわかる。

各段斜面の傾斜角度については、第 1 段目は残存状況が悪く明らかなでないものの、第 2 段目は約 21 から 24 度、第 3 段目は約 29 から 32 度である。 (横田真吾)

#### (4) 調査に至る経緯と調査の経過

**調査に至る経緯** 先にも触れたとおり宇度墓の周囲には現在の畦畔の形状、主に後円部東側に点在する飛地との位置関係などから 2 重周濠であった可能性が高いが、現状は墳丘の周囲にのみ周濠が廻っている。

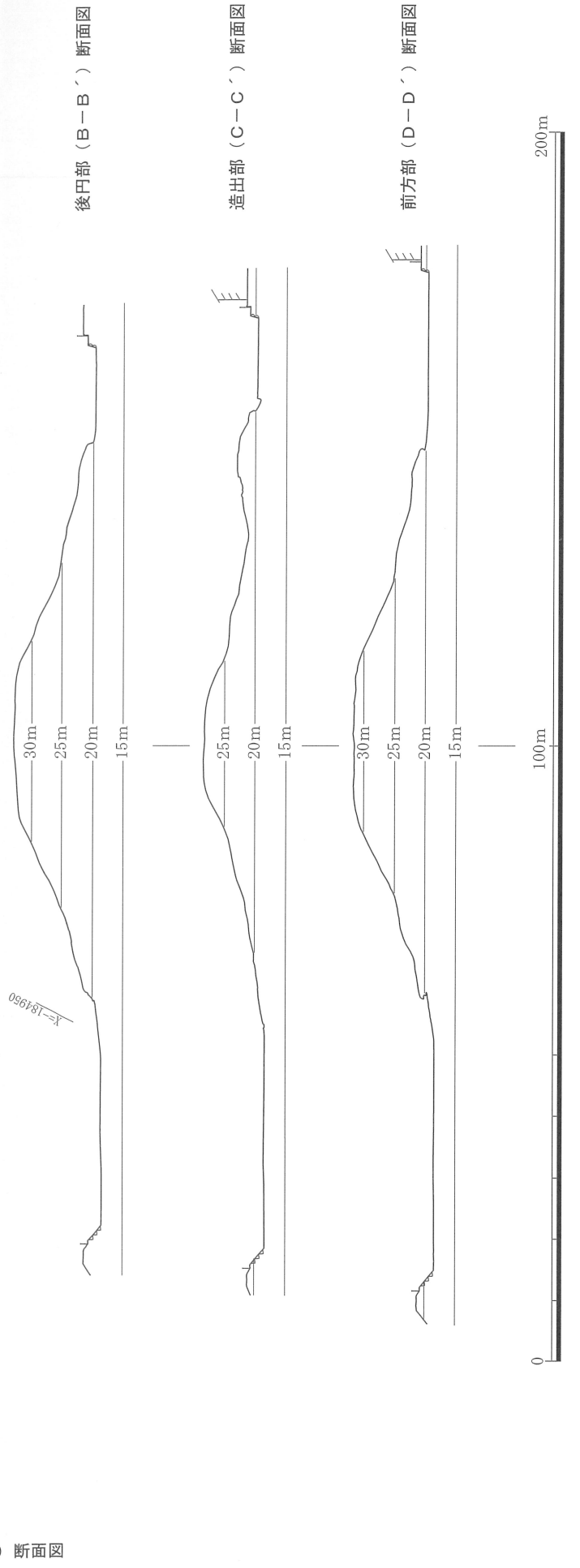
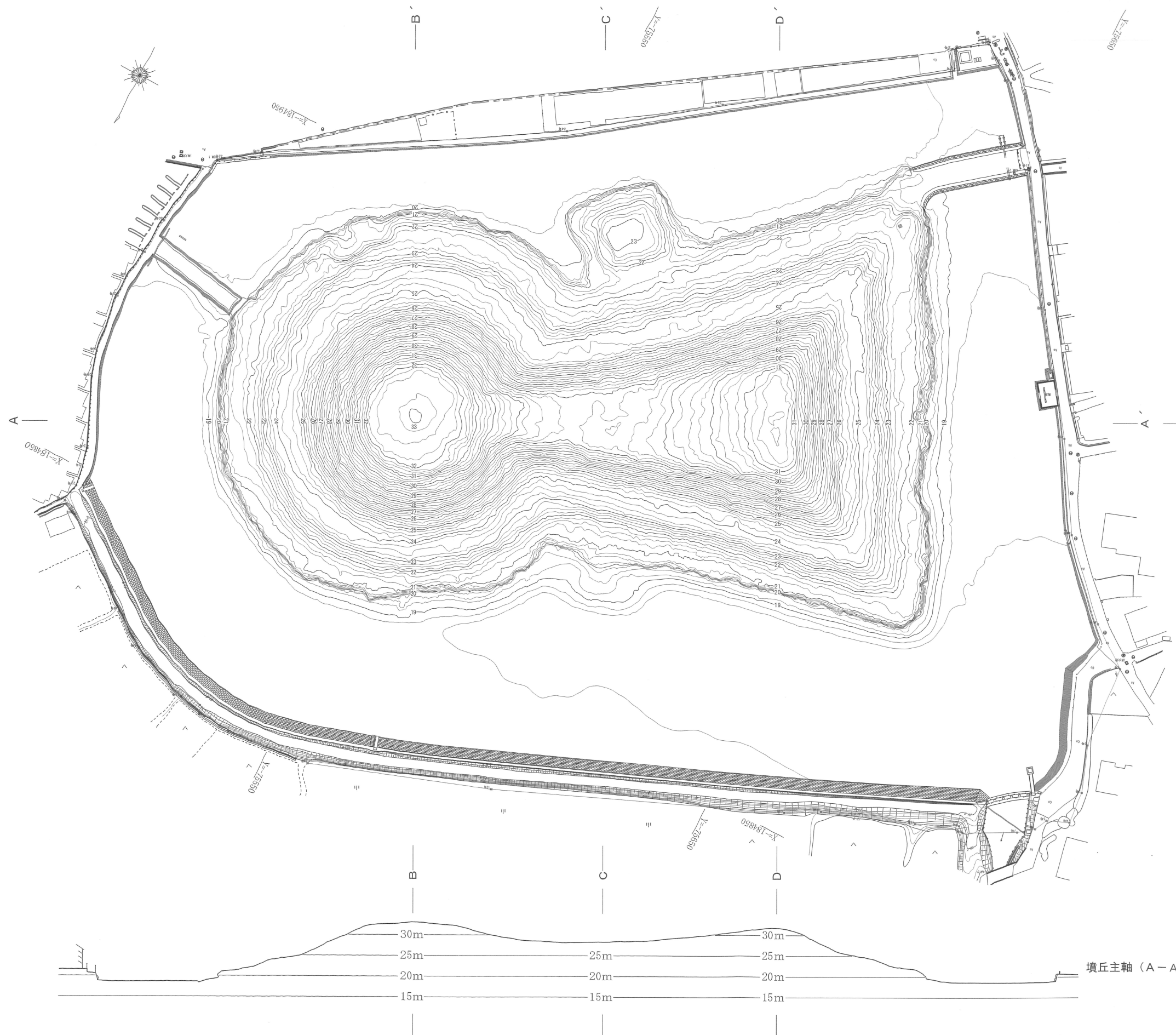
この周濠には普段から水が満々と湛えられており、主に西からの風により波浪が発生する状況が続いていた。この影響により墳丘の北面と西面を中心に、墳丘裾や外堤の傷みが顕著となってきていたことから、墳丘裾や外堤裾を保護する工事の重要性が高まってきた。そこで、まず平成 24(2012)年に外堤の東～北側の内法裾の護岸工事を実施して、工事期間中には陵墓調査室と古市陵墓監区事務所により立会調査を実施した(本誌第 65 号)。さらに、平成 28・29 年度には墳丘裾と外堤西側内法裾についても護岸工事を実施する計画が立てられたことから、工法の検討に資するデータを得る目的で、事前に施行予定区域の埋蔵文化財調査をおこなうこととなった。

**調査の経過** 調査は、平成 26 年 10 月 27 日に現地作業を開始した。掘り下げは第 1 トレンチからおこない、順次トレンチ番号に沿っておこなった。全体的な掘り下げが進み各トレンチ内の状況を把握した後に、遺構が確認されるなど、さらなる精査が必要なトレンチの調査を進めつつ、各トレンチの状況に応じて完掘に至った。

また、調査と並行して測量業者への委託事業として、世界測地系に基づいた地上レーザー計測による現況測量図の作成を併せておこなった。その中には完掘したトレンチのレーザー計測と写真測量による平面図の作成を含んでいる(第 4・5 図)。現地での測量作業は、事前調査期間中に随時おこなった。

平成 26 年 12 月 24 日にトレンチの埋め戻しや仮設物の撤去など、すべての現地作業を完了して、調査は終了した。開始から終了までの期間は 59 日間である。調査期間中、12 月 4 日には陵墓管理委員会の現地視察をいただき、ご指導を賜った。また、12 月 5 日には、マスコミ各社、16 学協会への現地公開をおこなった。

なお、土層や遺構についてその時点での可能性を含めた所見について述べる機会があったが、それらについてはすべて本報告の所見が優先されることを明記しておきたい。 (清喜)



第5図 宇度墓 墳丘平面図・断面図 (1/1,000)

# 1 トレンチの設定と基本的な層序

## (1) トレンチの設定

第1トレンチから第15トレンチまで、小規模の下部トレンチも含め、墳丘各所に計25箇所設定した(第4図)。

陵墓地形図上でおこなった当初のトレンチ設定予定では、まず陵墓地形図から読み取った後円部と前方部の墳丘第3段中心を結んで主軸とし、主軸に沿う第1トレンチと第8トレンチを設定した。後円部では、第1トレンチのほかに、主軸に対して直交する位置に第3トレンチと第14トレンチを、主軸に対して45度傾く位置に第2トレンチと第15トレンチを設定した。

前方部では、第8トレンチと平行して南に第7トレンチ、北に第9トレンチを、北西角に第10トレンチ、前方部南側面に第6トレンチ、北側面に第11トレンチを設定した。後円部と前方部の境となるくびれ部には、南に第4トレンチ、北に第13トレンチを設定した。くびれ部西方の造出部には、南造出に第5トレンチ、北造出に第12トレンチを設定した。第5トレンチは南造出全体の状況を把握するべく、第5-1トレンチから第5-4トレンチまで分けて設定した。第12トレンチも北造出全体の状況を把握するべく、第12-1トレンチから第12-4トレンチまで分けて設定した。

周濠では、西端の擁壁沿いに第16トレンチから第20トレンチまで設定した。

トレンチは、基本的に墳丘裾へ設定したが、墳丘主軸に沿う第1トレンチと第8トレンチ、前方部南側の第6トレンチ、南造出の第5-1、5-2、5-3、5-4トレンチは遺構の残存状況確認のため、裾部より上にもトレンチを設定した。

実際に現地でもトレンチを設定した際には、地形や樹木の関係で当初予定地外に設定せざるを得ないトレンチや危険のため設定できなかったトレンチのほか、短縮、延長、変形したトレンチもあった。その内容について以下に記す。

**第1トレンチ** 上部トレンチの長さを10mから8.5mに短縮した。

**第2トレンチ** 長さ5mから3mに短縮した。

**第3トレンチ** 長さ5mから2.5mに短縮した。

**第4トレンチ** 予定地より西の位置に設定し、長さ5mから4.5mに、幅5mから2.5mに縮小した。

**第5-1トレンチ** 長さ10mから11mに延長した。

**第5-2トレンチ** 予定地より東に50cmの位置に設定し、長さ10mから11mに延長した。

**第5-3トレンチ** 当初の予定通りの位置に設定した。

**第5-4トレンチ** 当初の予定通りの位置に設定した。

**第6トレンチ** 予定地より東の位置に設定した。

**第7トレンチ** 当初の予定通りの位置に設定した。

**第8トレンチ** 予定地より南に2mの位置に設定した。上部トレンチの長さ5mから6.5mに延長し、幅2mから一部1mに短縮した。下部トレンチの長さ10mから6mに短縮した。

**第9トレンチ** 予定地より西の位置に設定した。

**第10トレンチ** 予定地より西の位置に設定した。

**第11トレンチ** 長さ10mから5.5mに短縮した。

**第12-1トレンチ** 長さ5mから6mに延長した。

**第12-2トレンチ** 予定地より西の位置に設定し、長さ5mから6mに、幅2mから3mに拡張したが、一部幅1mの箇所もある。

**第12-3トレンチ** 予定地より西の位置に設定し、長さ10mから2mに短縮した。

**第12-4トレンチ(欠番)** 第13トレンチと近接するため、設定しなかった。

第 13 トレンチ 予定地より西の位置に設定した。長さ 5 m から 11 m に延長し、幅 5 m から 4 m に短縮したが、一部幅 2.8 m、2 m の箇所もある。

第 14 トレンチ 長さ 10 m から 8 m に短縮した。

第 15 トレンチ 長さ 10 m から 4 m に短縮した。

第 16 ～ 20 トレンチ(欠番) 濠内堆積土が乾燥せず、掘削には危険が伴うため設定できなかった。

## (2) 基本的な層序

第 1 トレンチから第 15 トレンチにおける基本層序は、表土(I)、流土(II)、墳丘盛土(III)、濠内堆積土(IV)、地山(V)の順である。ただし、調査範囲が広範であるため、各層の詳細については各トレンチの記述を参照されたい。

I 層 表土。現地表面の土である。色調は暗灰色から黒褐色で、細粒砂から成る。埴輪などの宇度墓に関係する遺物のほか、近世陶磁器や近世瓦などの遺物、近現代の廃棄物も含む。

II 層 流土。雨水などの影響によって墳丘盛土より流出した土や、その流出した土の堆積後にさらに雨水などで流れて自然に堆積した土である。色調は明黄褐色から灰黄褐色で、極細粒砂、細粒砂から成る。埴輪や須恵器といった宇度墓に直接関係する遺物のほか、石器や縄文土器などの宇度墓築造以前の遺物なども含む。

III 層 墳丘盛土。宇度墓を築造する際に盛られた土である。色調は黄褐色から灰黄褐色で、極細粒砂、細粒砂から成る。第 5 - 1 トレンチ南端、南造出頂部の墳丘盛土内からは埴輪が出土している。これが本来の墳丘盛土か攪乱を受けて再堆積した土かについては、調査範囲が狭小であったため不明であるが、ここでは墳丘盛土に含めておく。また、宇度墓築造以前の遺物も含むことから、地山に近い箇所は一部遺物包含層の可能性もあるが、ここでは一括して墳丘盛土としておく。

IV 層 濠内堆積土。周濠内に堆積した土である。色調は青灰色から暗褐色で、粘土、シルト、極細粒砂、細粒砂、中粒砂、粗砂から成る。埴輪などの宇度墓に直接関係する遺物のほか、近世陶磁器も含む。

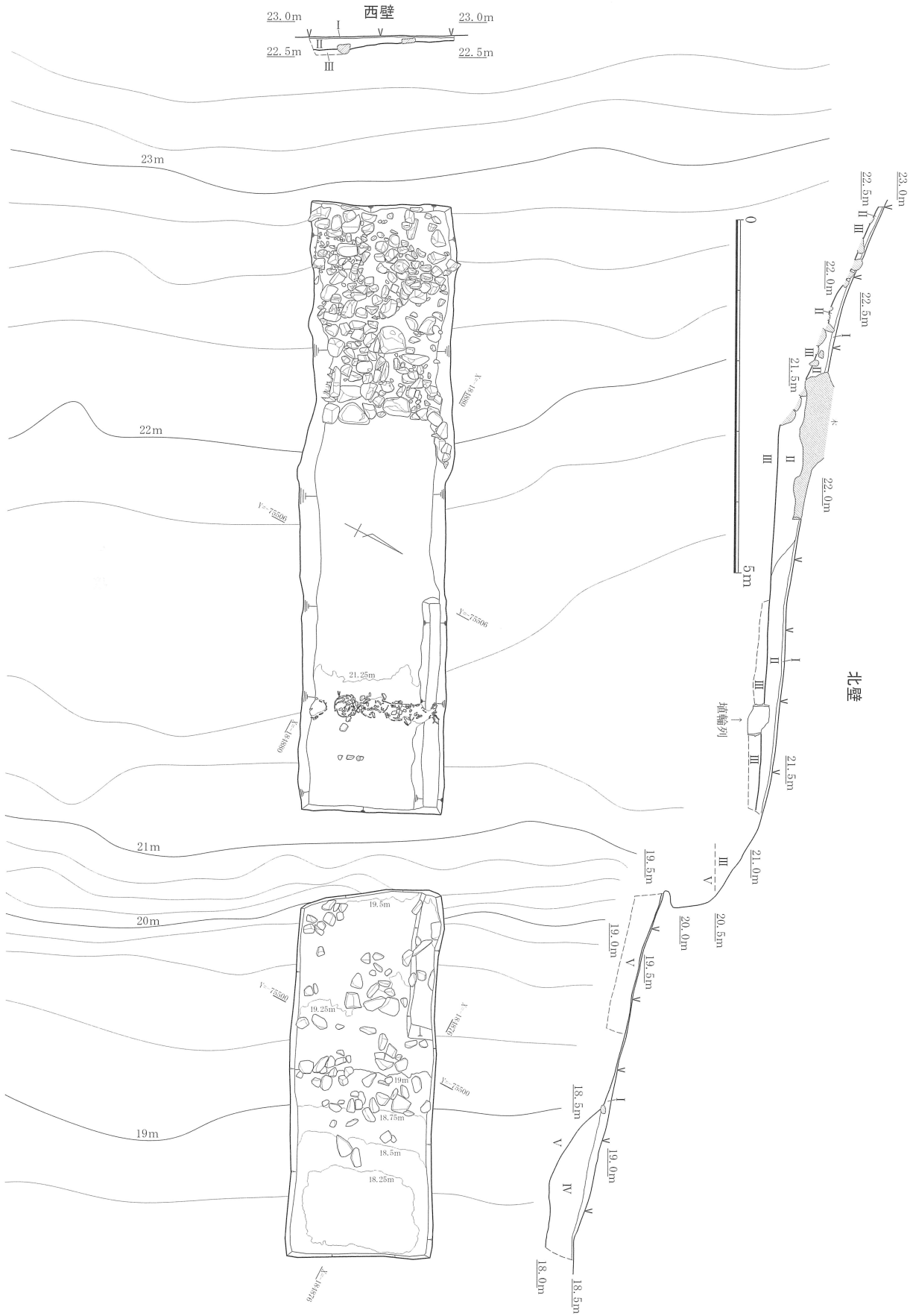
V 層 地山。遺構の基盤となる層で、宇度墓の墳丘下部は地山を整形して造られている。色調は青灰色から褐色で、粘土、シルト、極細粒砂、細粒砂、中粒砂、粗砂から成る。径約 1 から 50 mm 程の礫を多く含むが、遺物は含まない。

(横田)

## 2 各トレンチの状況

### (1) 後円部(第 1 ～ 3・14・15 トレンチ)

第 1 トレンチ(第 6 ～ 8 図、図版 3・24) 後円部の墳丘主軸上に設けたトレンチである。墳丘第 2 段斜面および葺石と墳丘第 1 段テラスおよび埴輪列の状況を確認するために設けた上部(約 2 m × 9 m)と墳丘第 1 段斜面および墳裾を確認するために設けた下部(約 2 m × 5 m)に大きくわかれる。上部で確認された土層は、上から表土(I)、流土(II)、墳丘盛土(III)である。他の周濠をもつ陵墓によくみられるような浚渫土はみられなかった。墳丘第 2 段斜面では、表土(I)の直下あるいはわずかに流土(II)をはさんで葺石の石材を確認することができた。ただし、精査する過程でかなりの量の石が転落したものと判断されたため、除去した。こうした当初の位置をとどめない石材は墳丘第 2 段斜面基底石付近から第 1 段テラスにかけてかなり厚く堆積しており、筆者の少ない経験ではあるが他の葺石をもつ古墳と比べると著しく多いといえる。あまり丁寧に石を葺かなかつたために、多くの葺石が転落してしまったのかもしれない。基底石には長径 40 cm 前後のかなり大振りな石材をもちいており、平らな面が濠側を向くように意図的に据えている箇所が多い。場所によって基底石が一行ではなく二列となつているところもある。基底石以外の第 2 段斜面では基底石に近い大きさから拳大のものまで多様な大きさの石材を使用している。葺石は墳丘盛土の上に直接置かれており、長軸方向を墳丘に向かって差し込むような造作もみられないし、明瞭な目地も確認できない。また、裏込めについても確認できない。基底石を据えたあとはそれよりも上に石材を適当に置いていったかのような印象を受ける。墳丘第 2 段斜面の傾斜は 25 度前後のようである。墳丘第 1 段テラスの幅は現況で約 5.5 m で



第6図 宇度墓 第1トレンチ平面図・断面図 (1/80)



第7図 宇度墓 第1トレンチ葺石平面図・立面図 (1/20)

あるが、後述するように第1段斜面の基底や傾斜角を確定できないことから、築造当初の幅を復元することは困難である。埴輪列は第2段斜面の裾から約4.3mに位置する。なお、墳丘盛土と地山との境界は掘削範囲では確認されていないものの、崖状となっている部分の観察によれば標高20.5m付近で観察できる。

(加藤)

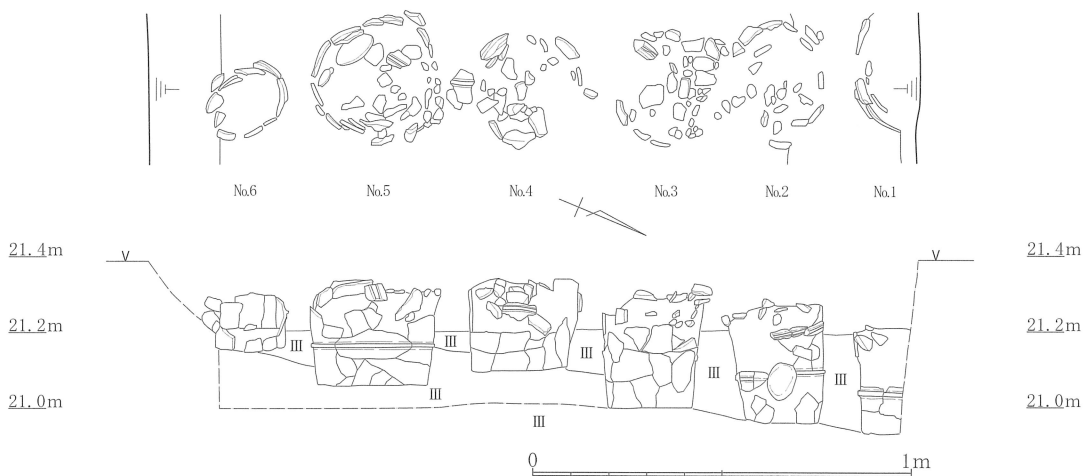
埴輪列は、第1トレンチの上部において、葺石の基底部から4m濠側の第1段テラス上で検出された(第8図)。幅2mのトレンチ内に6本を確認している(第30図17、第32図36～38、第33図42・46)。各埴輪は約5センチの間隔で密に設置されている。掘方は検出されず、埴輪の設置と墳丘盛土が並行してなされたと考えられる。埴輪の接地面でもっとも低いのはNo.1で、標高20.9mである。一方、もっとも高いのはNo.6で、標高21.15mである。先述の地山上面の高さ(20.5m付近)と比較すると、本トレンチ付近では地山面から約0.4mの盛土で埴輪の設置を開始していると考えられる。このように、接地面の低い個体で第2段突帯付近までが埋設されたと考えられ、高いものは第1段突帯付近までが埋設されたと考えられる。接地面が低いほど深く埋設されている。また、断面を精査したところでは、接地面付近の盛土は、埴輪の側面を埋める盛土よりも硬化しているようであり、埴輪の設置にあたって多少の地固めが行われていた可能性を想定できよう。埴輪列付近のテラス面は標高約21.2mを測り、葺石の基底の高さ(21.4m)より少し低くなっているようである。

なお、本トレンチの埴輪列は、他のトレンチの埴輪との比較検討ができる最低限の部分のみを取り上げ、埴輪内部の状況は未調査のため、不明である。

(清喜)

下部で確認された土層は上から表土(I)、濠内堆積土(IV)、地山(V)である。周濠内の掘削は湧水が多く困難を極めたが、調査時はおおよそトレンチの東側の上端から1.2m墳丘側にある地山の屈曲箇所が墳裾であると判断した。なお、トレンチ内で確認できた墳丘第1段斜面には葺石はみられなかった。また、周濠内にも転落したような石材はほとんど確認されなかった。その一方で、地山には礫が比較的多く含まれていた。地山を削り出して墳丘第1段を造成する際に、地山に礫が多く含まれていることから葺石をしなくてもよしと判断したのかもしれない。造出周辺では第1段斜面にも葺石がみられることから、このトレンチの状況は葺石を含む第1段斜面が削平された状況を示している可能性も考えられるが、そのような状況は濠の浚渫ぐらいしか想定できず、浚渫土が第1段テラス上にみられないことからみても、削平は受けていないものと調査時には判断した。ただし、第11トレンチの状況などを考慮すると、この斜面は墳丘第1段斜面本来のものではない可能性も考える。現状での墳丘第1段斜面の傾斜は30度前後のようであり、やや勾配が急な点も気になるが、第8トレンチの状況などを考えると本来の面ではないにしてもそれをある程度は反映している可能性はあると考える。

第2トレンチ(第9図、図版25) 後円部の中心を基準として主軸から45度南に振った線上に設けたトレ

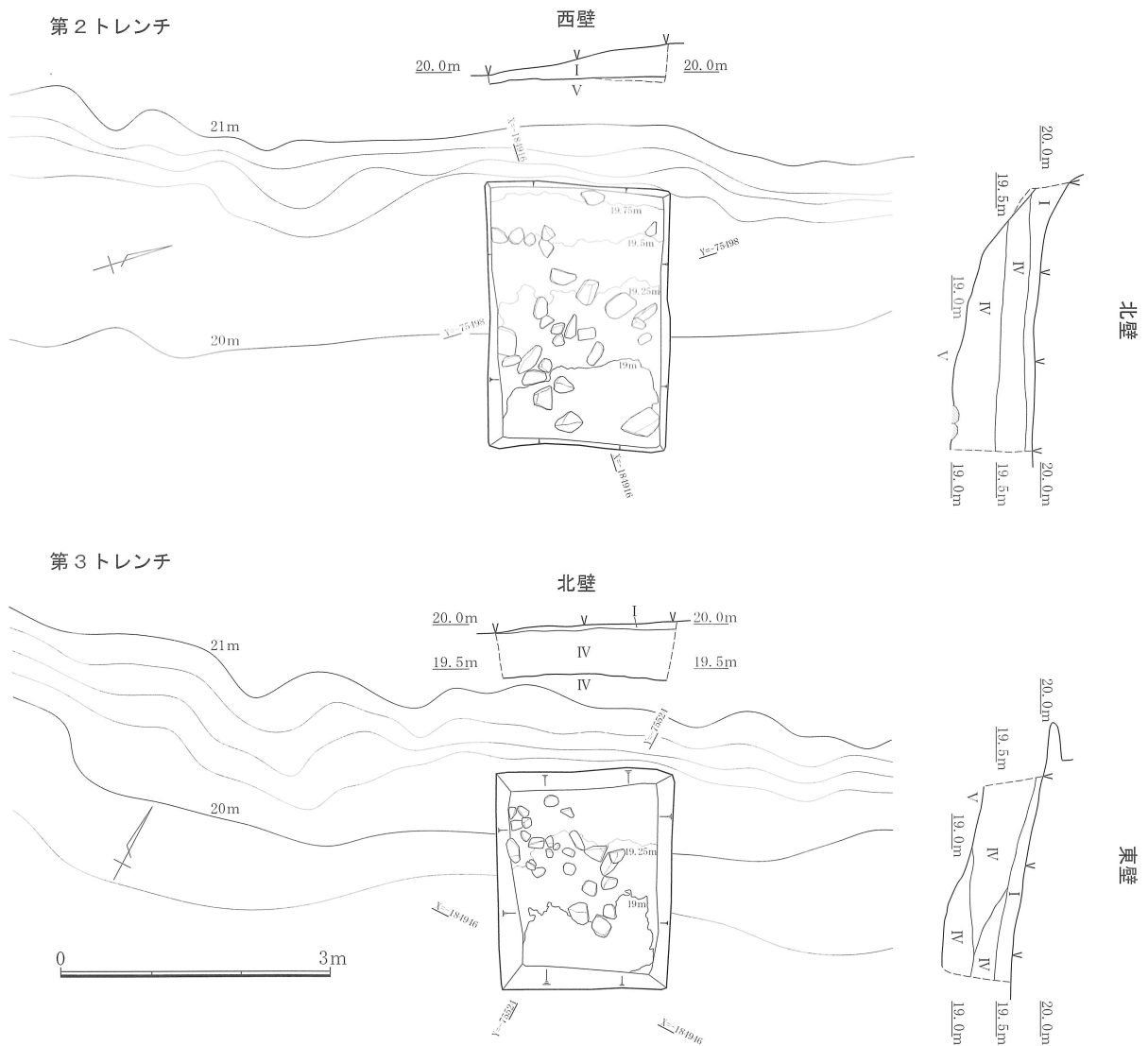


第8図 宇度墓 第1トレンチ埴輪列平面図・立面図 (1/20)

ンチである。墳丘第1段斜面の状況を確認するために設定した。トレンチの大きさは2m×3mである。確認された土層は上から表土(I)、濠内堆積土(IV)、地山(V)であった。濠内堆積土(IV)は比較的時期の新しいもの(近現代)と考えられ、このあたりの墳丘第1段斜面は大きく削平されているものと判断された。したがって、トレンチ内で確認されている地山は築造当初の状態を保ったものではない。湧水が多く、これ以上の拡幅は困難であったことから、墳裾を追及することはできなかった。なお、床面にみえている石材は地山に含まれているものである。

**第3トレンチ**(第9図、図版25) 後円部の中心を通り墳丘主軸に直交する線上に設けたトレンチである。第2トレンチと同様に墳丘第1段斜面の状況を確認するために設定した。トレンチの大きさは2m×2mである。確認された土層は上から表土(I)、濠内堆積土(IV)、地山(V)であった。調査の所見も第2トレンチと同様であり、このあたりの墳丘第1段斜面は大きく削平されているものと判断された。したがって、トレンチ内で確認されている地山は築造当初の状態を保ったものではない。湧水が多く、これ以上の拡幅は困難であったことから、墳裾を追及することはできなかった。なお、床面にみえている石材は地山に含まれているものである。(加藤)

**第14トレンチ**(第10図、図版26) 墳丘主軸と直交するよう後円部北側に設定したトレンチである。長



第9図 宇度墓 第2・3トレンチ平面図・断面図 (1/80)



さ10m、幅2mの予定であったが、周濠内の軟弱な堆積土掘削は危険であるため、長さ8mに縮小した。

土層の状況は、上から表土(I)、濠内堆積土(IV)、地山(V)の順に堆積している。薄い表土の下にはすぐ地山という状況であった。葺石や埴輪列といった遺構は検出されなかった。

14 トレンチの位置は、後円部で比較的築造当初の形状を留めている墳丘第2・3段目の位置から考えて、墳丘第1段目斜面および第1段目テラスの範囲に収まるものと考えられるが、濠水の波浪などによる浸食で、墳丘本来の姿は全く残っていない。遺物は表土(I)より埴輪片、陶器片、磁器片が出土した。

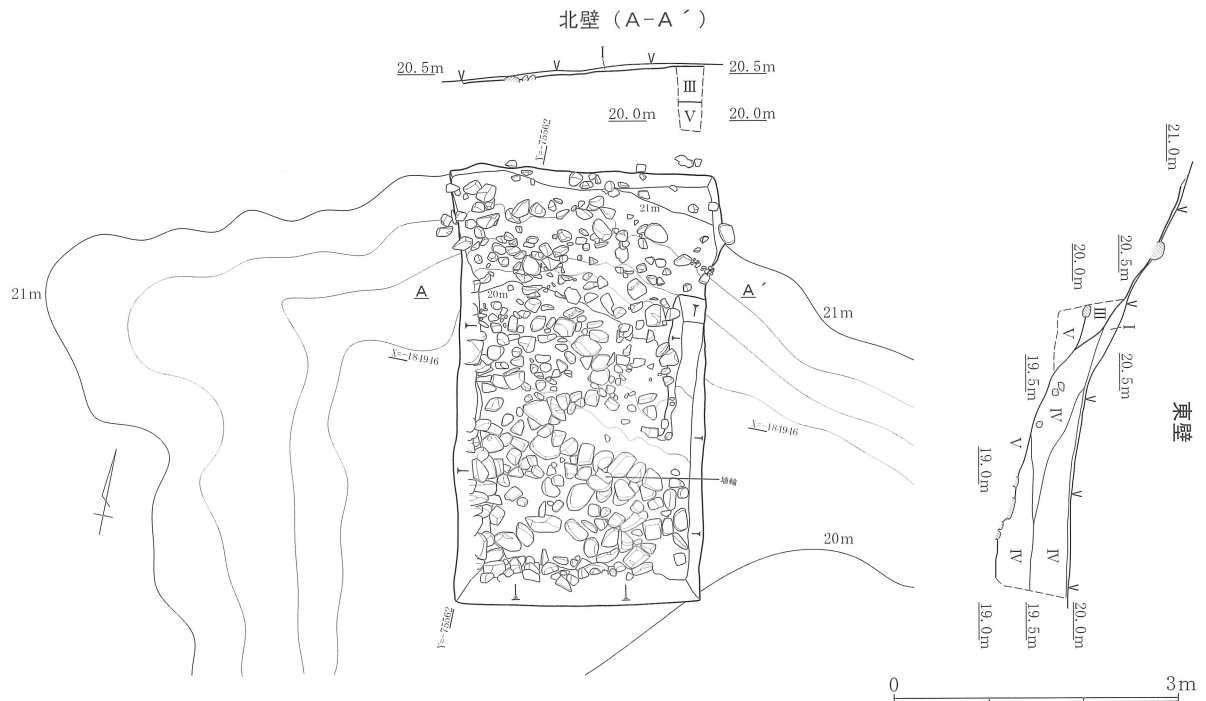
**第15 トレンチ**(第10図、図版26) 墳丘主軸より45度傾けて後円部北東側に設定したトレンチである。長さ10m、幅2mの予定であったが、周濠内の軟弱な堆積土掘削は危険であるため、長さ4mに縮小した。

土層の状況は、上から表土(I)、濠内堆積土(IV)、地山(V)の順に堆積している。薄い表土の下にはすぐ地山という状況であった。葺石や埴輪列といった遺構は検出されなかった。

15 トレンチの位置は、後円部で比較的築造当初の形状を留めている墳丘第2・3段目の位置から考えて、墳丘第1段目斜面の範囲に収まるものと考えられるが、濠水の波浪などによる浸食で、墳丘本来の姿は全く残っていない。ただし、トレンチ北端では濠側へ地山が急に下がっており、これを墳丘第1段目斜面に関係するものとも考えることも可能である。遺物は表土(I)より埴輪片が出土した。(横田)

## (2) くびれ部 (第4・13 トレンチ)

**第4 トレンチ**(第11図、図版4) 南側のくびれ部に設けたトレンチである。第1段斜面における後円部と前方部との屈曲部分を確認するために設定した。トレンチの大きさは25m×45mである。確認された土層は表土(I)、墳丘盛土(III)、濠内堆積土(IV)、地山(V)であった。濠水に浸かっていない上部はごく薄い表土層(I)の直下が墳丘盛土層(III)となっているが、ほとんど露出しているに等しい状況であるため、葺石も含めて遺存状態が悪い。また、下部は湧水と粘着質な土質のために調査が著しく困難であったが、葺石を確認することができた。特に、第11図に図示した埴輪出土位置のわずかに墳丘側では後円部の弧をえがく目地がみられ、前方部への屈曲部分には大きめの石材がもちいられているようにもみえる。斜面の傾斜からみればトレンチ内で墳裾が検出されてもよいように思われたが、上述したような困難な条件下だったこともあって石材の生き死にの判断が難しく、墳裾を明瞭に認識することはできなかった。なお、墳丘第1段斜面



第11図 宇度墓 第4トレンチ平面図・断面図 (1/80)

の傾斜は20～30度である。

(加藤)

第13トレンチ(第12・13図、図版27・28) 北側くびれ部に設定した。当初の規模は、長さ5m×幅4mである。その後、墳丘裾側に長さ6m×幅2mで拡張をおこなった。また、最終的には、囲形埴輪周辺を長さ2m×幅1mで再度拡張をおこなった。これにより、トレンチの最大長11m×最大幅4mのトレンチとなった。調査の結果、後円部第1段斜面の葺石と北造出東側斜面の葺石を検出した。

土層は、表土(I)の下のトレンチ西側を中心に濠内堆積土(IV)が確認される。IV層は濠水の影響で細分されるが、いずれの層も古いものではない。IV層の下に流土(II)が検出されたが、転落した葺石と大量の埴輪片を含む層(IIa)と残存する葺石を直接覆う比較的古い層(IIb)に分けられる。IIa、IIb層ともに含まれる埴輪片は大きなものや摩滅の少ないものが多い。II層の下にはくびれ部の形態に沿って削り出された地山面



第12図 宇度墓 第13トレンチ平面図・断面図 (1/80)

(V)が検出される。

遺構は、後円部第1段斜面の葺石と北造出東側斜面の葺石である。葺石は、裾付近を中心に残存しており、高さとしては0.5mほどの範囲までである。後円部裾は、範囲は狭いものの基底石が比較的明確であった。長径30cmほどの石を用いて、その上にも同様の石材を用いる傾向が認められた。また、北造出との接続部付近では、墳丘側へ少しずつ高さを増しながら、やや扁平な石を濠底面に敷き詰めているような状況が観察された。北造出側の裾は後円部側と比較して残存状態は悪いが、比較的大きめ石を基底石に使用している点は共通する。基底石の上方には長径10cmほどの石を丁寧に積んでいる状況が観察された。

また、葺石に絡んだ状態で第13図の★印の位置で円形埴輪が出土した(第41図107A面)。立った状態で検出されたため、原位置、あるいは原位置を反映した出土状況かと考えた。第12・13図の図面は、その検出時点で作成したものである。しかし、慎重に精査した結果、崩落した葺石とともに上方から転落したものが偶然立った状態で埋没したものと判断した。結果的にその破片(A面)の下からも同一個体の破片が出土して、最終的に各面の破片が揃うことが、整理の結果判明した。この円形埴輪は、後円部側の斜面に堆積した転落石に絡んでおり、本来は後円部側のどこかに設置されていたと考えられる。

遺物は、埴輪片と須恵器片の出土がみられた。後世の遺物は出土していない。(清喜)

### (3) 造出部 (第5・12トレンチ)

**第5トレンチ**(第14～19図、図版5～10) 南造出に設定した第5-1から第5-4までのトレンチである。現状の南造出は、墳丘第1段目テラスより緩やかに下った後、造出頂部まで高く上がる。後述する通り、ここは築造当初、墳丘第1段目の斜面と南造出の境で谷のようになっていたが、地震など何らかの原因で造出斜面上部の葺石が崩落し、谷部分が埋まったものと考えられる。谷部分が埋まった時期は、崩落して堆積した葺石内より円筒埴輪列が検出され、その中で一部が欠損しただけの朝顔形埴輪が出土したことから、墳丘築造より後、それほど時間が経っていない時期のことであろう。(横田)

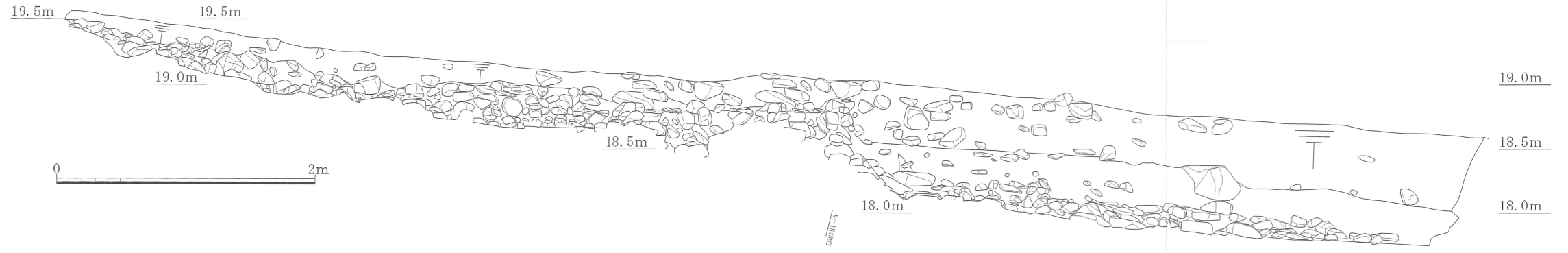
**第5-1トレンチ**(第16～19図、図版5～7) 南造出が前方部側面にとりつく箇所において前方部側面ラインに直行するように設けたトレンチである。墳丘第1段テラスやテラス上の埴輪列といった墳丘本体における前方部側面の状況を追求するとともに、前方部側面に南造出がとりつく状況や南造出の状況を確認するために設定した。トレンチの大きさは2m×11mである。確認された土層は表土(I)、流土(II)、墳丘盛土(III)、地山(V)であった。墳丘第1段テラス上の埴輪列は、第1段斜面の上端から90cmほど第2段斜面寄りの位置で確認されたが、現在の巡回路上にあたることもあって遺存状況は悪い。

第1段テラス上埴輪列では5個体の円筒埴輪を確認した。これらを設置する際には掘方を伴わず、墳丘盛土をおこなう過程の中で埴輪列も設置されたことが断ち割りによって確認できた。なお、この断ち割りをおこなった際に墳丘盛土内から縄紋土器と思われる土器片が出土した。(加藤)

第1段テラス上埴輪列を取り上げる際に、埴輪列の内部埋土を確認したところ、No.2、3、4の内側底部、標高約21.6mより埴輪片が出土した。No.1でも内側底部より約10cm上の箇所でも埴輪片が出土した。そのことから、埴輪列を設置した際、埴輪列内側に土は充填されなかったと考えられる。(横田)

第1段テラスと南造出との間に谷状の窪みがわずかに存在することが調査前より確認できた。したがって、第1段テラス面から南造出にかけては墳丘本体の第1段斜面が存在し、その途中から南造出の斜面が立ち上がることが推測されたが、今回の調査によりその状況を確認することができた。具体的には、墳丘第1段斜面は第1段テラスから25度前後の傾斜で南造出へ向かって下がっている。その距離は約2mである。その墳丘第1段斜面の途中から南造出の斜面が立ち上がるが、その傾斜は25～30度であり、本トレンチにおける南造出の斜面の長さは約4.5mである。この谷部は南造出斜面から転落した大量の石材で埋没していて土はほとんど存在しないことから、掘削するというよりも転落した石材を除去すると表現したほうが的確な状況であった。そのような状況で石材を除去していくなか、とある石をもちあげた下に空洞が広がっていることを確認した。はじめは動物の巣穴などかと思ったが、ライトで内部を確認したところ、この空洞が立ったまま割れずに残った朝顔形埴輪(谷部埴輪列No.3、第31図29)の頸部から下の内部であることがわかった

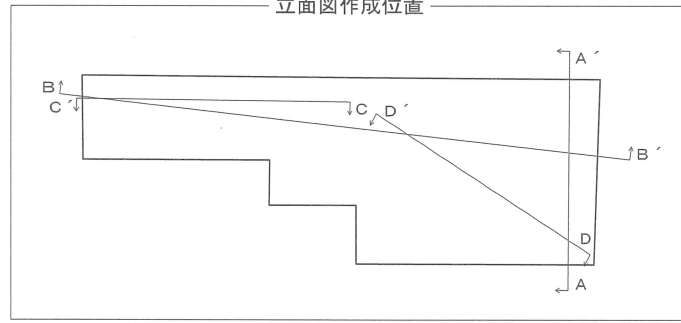
B-B' 間立面図



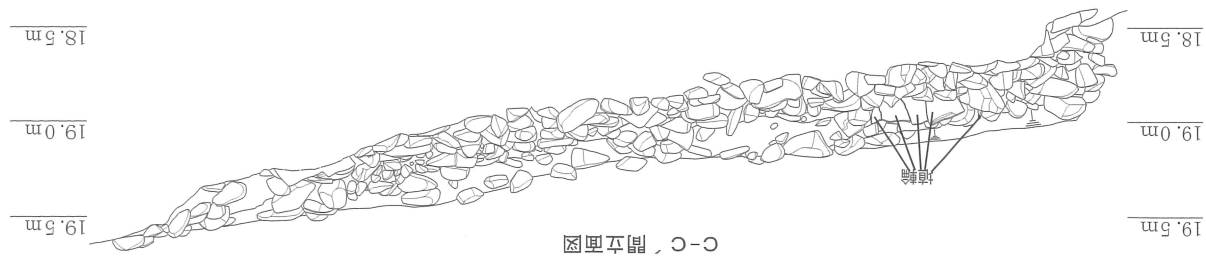
A-A' 間立面図



立面図作成位置



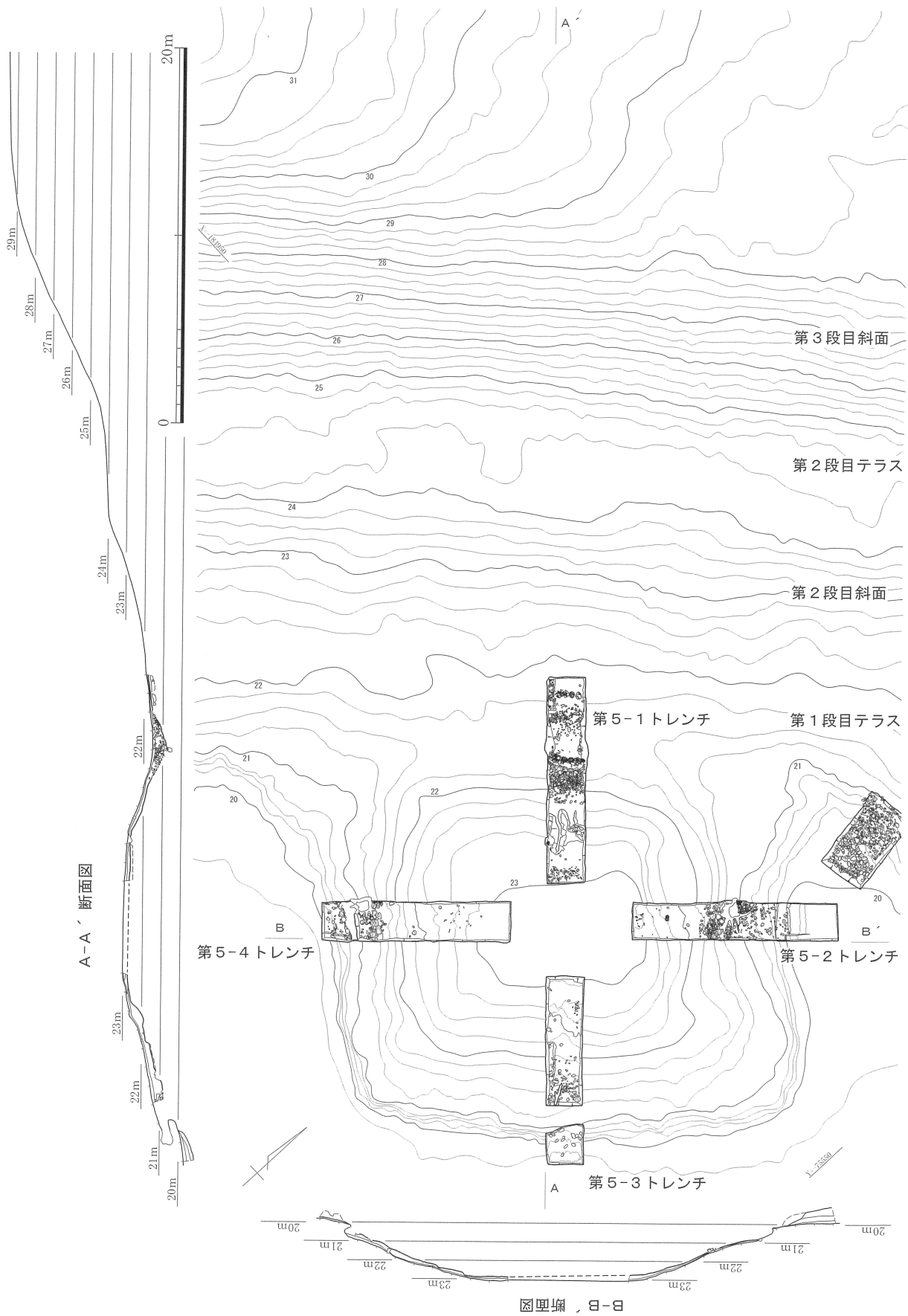
C-C' 間立面図



D-D' 間立面図

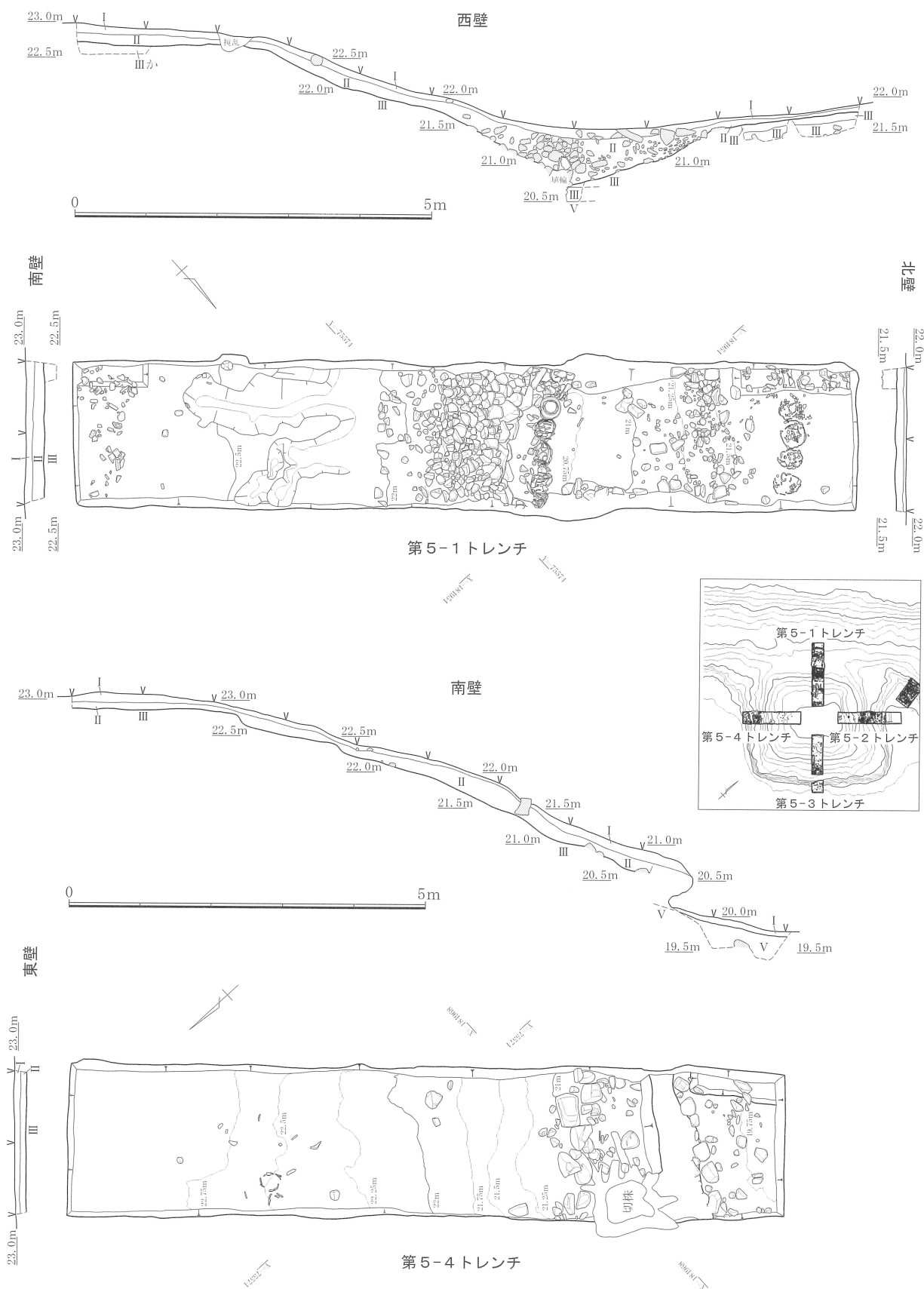


第13図 宇度墓 第13トレンチ平面図・立面図 (1/40)



第14図 宇度墓 第5トレンチ平面図・断面図 (1/300)





第16図 宇度墓 第5-1・5-4トレンチ平面図・断面図 (1/80)

(図版 12 - 1)。さらに石材の除去を進めていったところ、この谷状となっている最深部において埴輪列が存在することが確認できた。なお、谷部の埴輪列のNo.3(第 31 図 29)とNo.6(第 32 図 32)が朝顔形埴輪であることが調査後の整理作業において確認されており、第 1 段テラスの埴輪列よりも朝顔形埴輪の出現頻度が高くなっていることがうかがえる。実際に、造出周辺は墳丘の他の箇所と比べて朝顔形埴輪の破片の数が多  
い印象を整理作業中に感じた。(加藤)

第 1 段目と南造出との境、谷部分の円筒埴輪列では、7 個体の埴輪が確認された。崩落した葺石によって割れた埴輪も多かったが、墳丘築造後早い段階で埋まったためか、埴輪列の残存状況は比較的良好であった。埴輪が置かれた基底の高さはほぼ一定で約 20.5m である。基底直下の土層については、礫を多量に含んでおり、地山の可能性がある。埴輪列では、掘方が検出されなかったことから、墳丘盛土の構築時に地山上に埴輪が据えられたと考えられる。境界の円筒埴輪は 2 段目まで埋められており、その高さは約 20.8m で、これが墳丘第 1 段目と南造出との境部の高さである。

谷部埴輪列を取り上げる際、埴輪列の内部埋土を確認したところ、No.3、4、5、6 の内側底部、標高約 20.5m より埴輪片が出土した。そのことから、埴輪列を設置した際、埴輪列内側に土は充填されなかったと考えられる。谷部埴輪列で壁面に近いNo.1、2、7については、壁面崩落のおそれがあるため、取り上げなかった。(横田)

南造出頂部では原位置をとどめるものはなかったものの、家形埴輪・盾形埴輪・靱形埴輪などの形象埴輪片が多数確認された。第 1 段テラス面よりも南造出頂部の高いことが調査前から認識されており、これが築造当初のものであるのか、それとも浚渫などによる後世の盛土であるのかを解明することが課題の一つであったが、南造出の現況が築造時の状況を反映したものであることが判明した。第 1 段テラス面の標高は 21.7m 前後である一方で、南造出頂部の標高は 22.6m となっており、南造出頂部のほうが第 1 段テラス面よりも 1 m 近く高くなっている。(加藤)

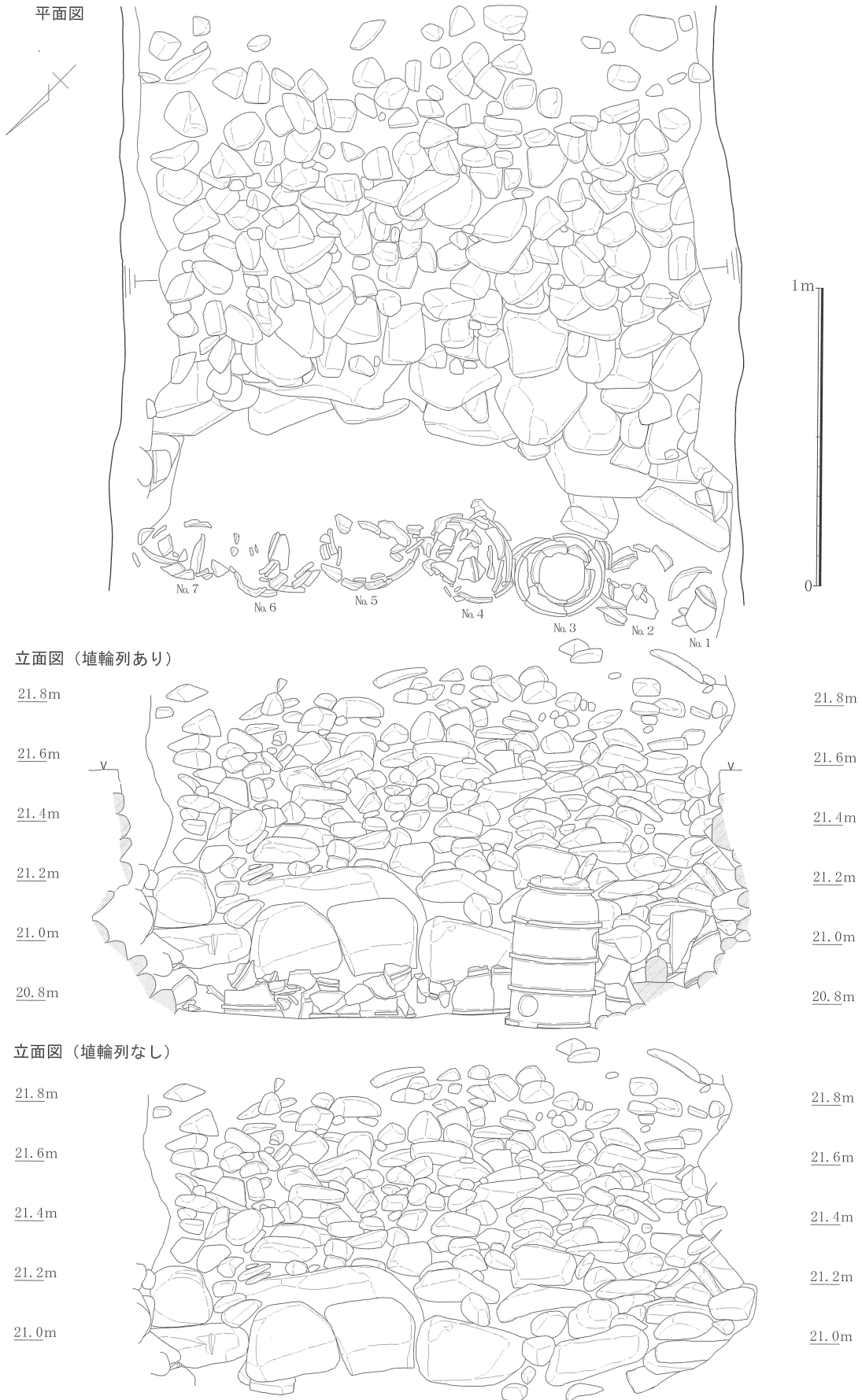
また、トレンチ南西隅の造出頂部では、攪乱状況の確認のため、トレンチの西端に沿って長さ 1 m、幅 30cm の範囲で墳丘盛土の断ち割りをおこなった。その結果、墳丘盛土内より円筒埴輪片、形象埴輪片が出土した。そのことから、造出頂部の墳丘盛土については、盗掘などの人為的な要因ないし樹木などによる自然の作用で攪乱を受けた可能性のあることが判明した。造出頂部が攪乱を受けていた場合、現状の墳丘盛土上で検出された形象埴輪片についても、本来の位置より大きく動いた物の可能性がある。(横田)

なお、本トレンチでは、墳丘本体の第 1 段斜面には葺石が確認できない一方で、南造出の斜面には葺石が確認できた。南造出斜面の葺石は墳丘本体の第 2 段斜面ほどの大きな基底石は使用しておらず、長径 30cm 前後の石材を二つほぼ垂直に積上げたのちに斜面への葺石をほどこしているようである。斜面における葺石の石材は基底石に比べると小振りなものが使用されており、斜面に対して石材の長軸方向を突き刺すように置いた意図が感じられるものの、明瞭な目地は確認できない。これらの葺石に裏込めは存在せず、南造出を形成する墳丘盛土の上に直接置かれている。そのためか上にいくほど葺石は転落しており残存状況が悪くなっている。(加藤)

墳丘第 1 段目と南造出の先後関係については、谷部で墳丘盛土の断割を実施して、盛土の状況を確認しない限り、厳密には明らかにできないが、谷部壁面のほとんどは崩落した葺石で、壁面崩壊の危険もあり、また葺石が良好に残っていたこともあって、断割を入れることはできなかった。ただし、後で調査の所見でも述べる通り、南造出の南端付近でも、地山は第 4 トレンチで検出された葺石下端より約 1 m 高い地点まで残っていることから、南造出の下部については、後から付け加えられたものでないことは明らかである。

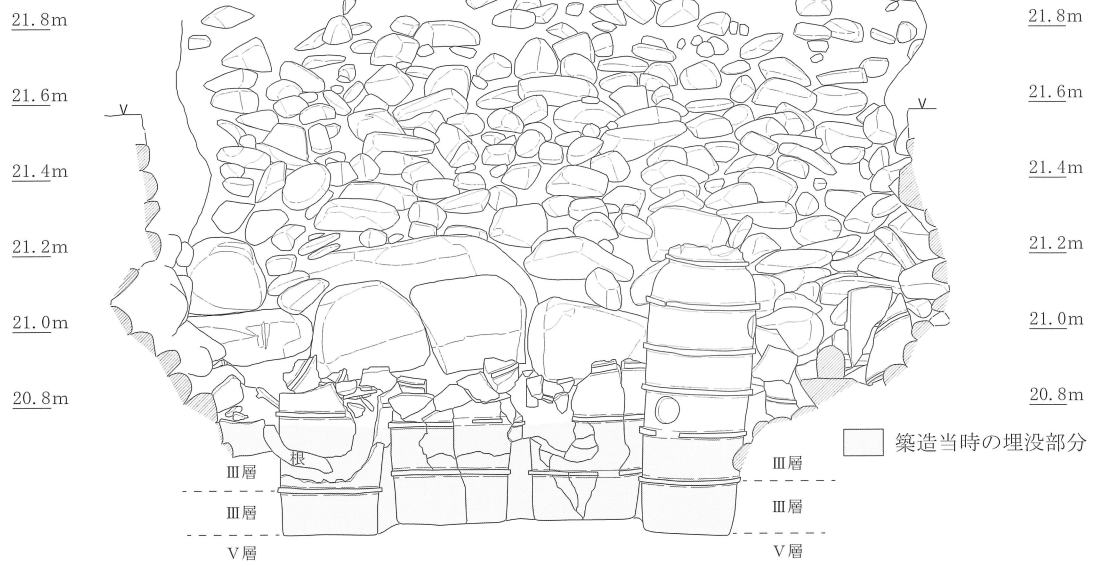
遺物としては、円筒埴輪列の円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、表土(I)と流土(II)より円筒埴輪片、形象埴輪片が出土した。形象埴輪の多くは造出頂部で集中して出土したもので、甲冑、盾、靱、家、蓋が確認された。また、宇度墓に関係する遺物ではないが、表土(I)よりサヌカイト製の石器、流土(II)と墳丘盛土(III)より縄文時代晩期から弥生時代初頭の土器が出土した。(横田)

第 5 - 2 トレンチ(第 15・19 図、図版 8) 南造出の東部に設定したトレンチである。長さ 10m、幅 2 m

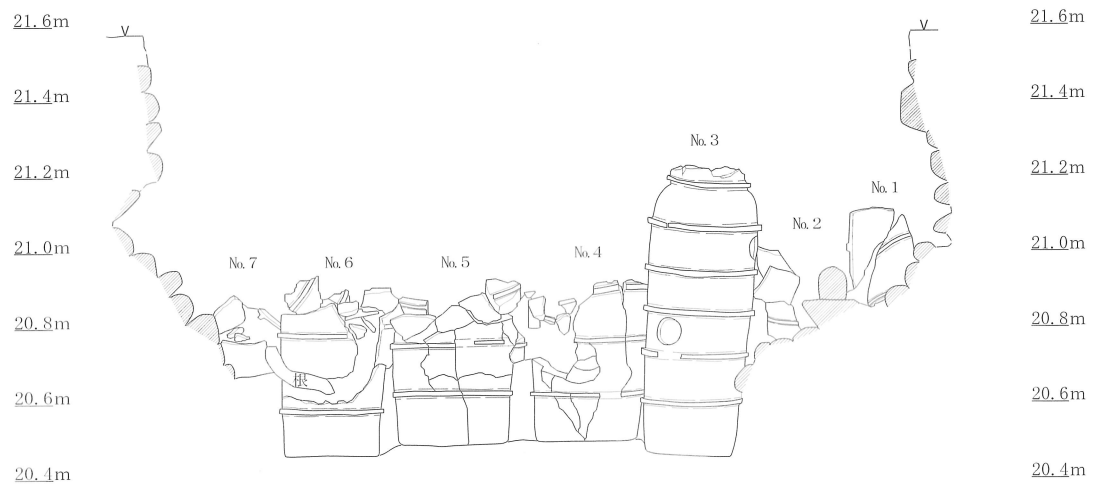


第17図 宇度墓 第5-1トレンチ埴輪列・葺石平面図・立面図（1）（1/20）

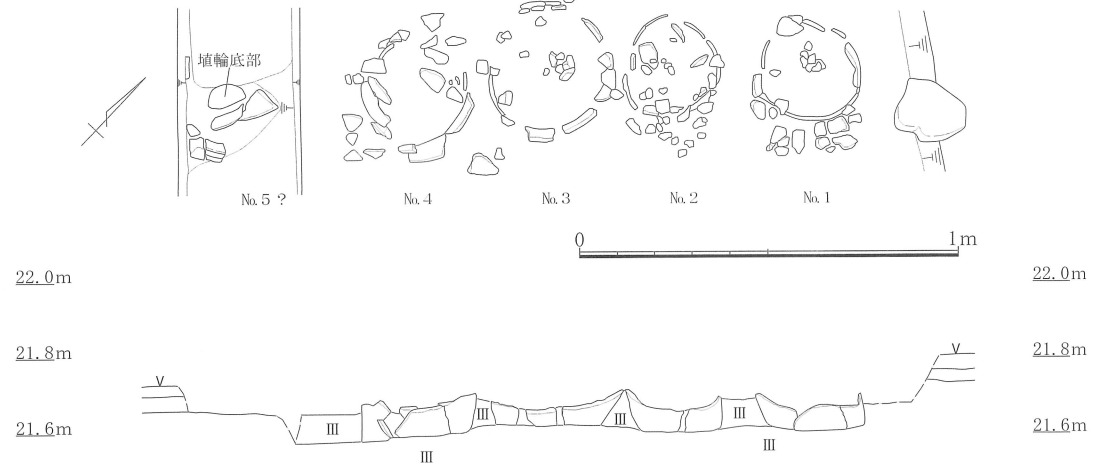
谷部埴輪列・南造出葺石立面図



谷部埴輪列立面図



第1段テラス埴輪列平面図・立面図



第18図 宇度墓 第5-1トレンチ埴輪列・葺石平面図・立面図(2) (1/20)



の予定であったが、南造出の遺構残存状況を確認するため、長さ11mに拡張した。

土層の状況は、上から表土(I)、流土(II)、墳丘盛土(III)、濠内堆積土(IV)、地山(V)の順に堆積している。

遺構としては、南造出頂部の円筒埴輪列を検出した。トレンチ中央で検出された多くの石は、一見葺石のようにも見えるが、元々葺石としてあったものが、盛土の崩壊や樹木の成長によって本来の位置から動いたものと考えられる。

南造出頂部の円筒埴輪は2本確認されたが、この2本はそのすぐ西側の樹木の根に絡まるように残っていたもので、本来は2本の横にも円筒埴輪が並んでいた可能性がある。埴輪列の残存状況は悪く、基底部のみであった。現状で埴輪が置かれた基底の高さと造出頂部の高さは、同じ約22.7mである。残存状況が良くないため確実なことは言えないが、埴輪列では掘方が検出されなかったことから、墳丘盛土の構築時に埴輪が据えられたものと考えられる。

トレンチの高さ約20.8から20.9mに狭い平坦な面が見られるが、これは第5-1、5-3、5-4トレンチで検出した基底石底部の高さとほぼ一致する。第5-3トレンチにも一部平坦な面が見られ、第5-4トレンチも元々平坦面があったと考えられるが、濠水の浸食によって現状斜めにずり落ちるような形になっている。南造出の平坦面は南、東、西にほぼ同じ高さで認められ、そこが段築のテラス部分と考えられること、葺石の基底石がテラスに残ることから、南造出は2段築成と考えられる。

南造出の東端について明瞭な根拠はないものの、トレンチ東端付近で緩やかだった地山の傾斜が高さ約19.3mで急になる箇所は、造出部築造時に地山を整形した痕跡の可能性はある。地山と墳丘盛土との境は、高さ約20.2mの地点である。

遺物としては、円筒埴輪列のほか、表土(I)より円筒埴輪片、形象埴輪片、流土(II)より円筒埴輪片、須恵器片が出土した。須恵器は2片出土し、ともに器台である。それらは造出頂部より出土したもので、第5-1トレンチで出土した形象埴輪群の存在から、造出頂部には、形象埴輪と須恵器が配置されていたことがわかる。

**第5-3トレンチ**(第15図、図版9) 南造出の南部に設定したトレンチである。造出の崖面を境に上部と下部に分かれ、合わせて長さ10m、幅2mである。

土層の状況は、上から表土(I)、流土(II)、墳丘盛土(III)、濠内堆積土(IV)、地山(V)の順に堆積している。

遺構としては、上部トレンチで南造出の葺石を検出した。葺石は基底石のみであったが、第5-1トレンチの基底石と同様、立てることを意識して長径約30cmの2石が並んでいる。トレンチ南東端で検出された大きな石は、元々葺石の基底石としてあったものが、盛土の崩壊や樹木の成長によって本来の位置から南側へと動いたものと考えられる。基底石底部の高さは約20.9mである。第5-2トレンチは切株のため明らかでないが、第5-1、5-4トレンチでは第5-3トレンチの基底石とほぼ同じ高さで基底石を検出した。

トレンチの高さ約20.8から20.9mに狭い平坦な面が見られるが、これは第5-1、5-4トレンチで検出した基底石底部の高さとほぼ一致する。第5-2トレンチにも平坦な面が見られ、第5-4トレンチも元々平坦面があったと考えられるが、濠水の浸食によって墳丘盛土が現状斜めにずり落ちるような形になっている。南造出の平坦面は南、東、西にほぼ同じ高さで認められ、そこが段築のテラス部分と考えられること、葺石の基底石がテラスに残ることから、南造出は2段築成と考えられる。

第5-2、5-4トレンチで造出頂部を方形に囲んだと考えられる円筒埴輪列が検出されたことから、築造当初は第5-3トレンチの範囲にも円筒埴輪列があったと考えられるが、造出上部が崩落した際に上部葺石とともに失われたものと考えられる。造出頂部の高さは現状で約22.7mである。

南造出の南端については下部トレンチの調査で手がかりは得られなかった。地山と墳丘盛土との境は、高さ約20.2mの地点である。

遺物としては、表土(I)、流土(II)、濠内堆積土(IV)より円筒埴輪片、形象埴輪片が出土した。また流土

(Ⅱ)からは埴輪のほか、須恵器の器台片が1片と不明鉄製品が1片出土した。第5-2トレンチの造出頂部でも流土(Ⅱ)から須恵器の器台片が出土していることから、第5-3トレンチで出土した器台も元々は造出頂部に置かれていたものが、墳丘盛土の崩落などに伴って落ちてきたものの可能性がある。

**第5-4トレンチ**(第16・19図、図版10) 南造出の西部に設定したトレンチである。造出の崖面を境に上部と下部に分かれ、合わせて長さ10m、幅2mである。

土層の状況は、上から表土(Ⅰ)、流土(Ⅱ)、墳丘盛土(Ⅲ)、地山(Ⅴ)の順に堆積している。

遺構としては、上部トレンチで南造出頂部の円筒埴輪列と南造出の葦石を検出した。

南造出頂部の円筒埴輪は3本確認されたが、埴輪列の残存状況は悪く、基底部のみである。北側の2本と南側の1本との間には隙間があるが、そこには本来2本の円筒埴輪があったものの、墳丘盛土の崩落や樹木の成長などによって失われた可能性がある。埴輪No.1とNo.2、3では基底部の比高差が20cm程もあり、埴輪基底部が斜めになってしまっていることから、本来は埴輪列全体がより上方にあったが、盛土の崩落などにより、下方にずり落ちてきたと考えられる。現状で埴輪が置かれた基底の高さは約22.4から22.6mである。埴輪列本来の位置と異なる上、残存状況が良くないため、埴輪列の掘方の有無は不明である。造出頂部の高さは現状で約22.8mである。

葦石は基底石のみであったが、第5-1、5-3トレンチの基底石と同様、長径約30から40cmの石が3個並んでいる。基底石周辺で検出された石は、元々葦石だったものが、盛土の崩壊や樹木の成長によって本来の位置から西側へと動いたものと考えられる。基底石も若干本来の位置より動いている可能性もあるが、現状の基底石底部の高さは約20.8mである。第5-2トレンチは切株のため明らかでないが、第5-1、5-3トレンチでは第5-4トレンチの基底石とほぼ同じ高さで基底石を検出した。

遺構かどうかは不明であるが、下部トレンチの東端で約10から30cmの石が列状に検出された。その位置から原位置の葦石とは考え難いが、上方からずり落ちてきたものの可能性もある。

第5-2、5-3トレンチでは、高さ約20.8から20.9mに狭い平坦な面が見られるが、これは第5-1、5-3、5-4トレンチで検出した基底石底部の高さとほぼ一致する。第5-4トレンチは、現状平坦面が見られないものの、墳丘盛土が濠水の浸食によって斜めにずり落ちるような形になっていること、葦石基底石が存在することから、元々は基底石底部の高さ約20.8mに平坦面があったと考えられる。南造出の平坦面は南、東、西にほぼ同じ高さで認められ、そこが段築のテラス部分と考えられること、葦石の基底石がテラスに残ることから、南造出は2段築成と考えられる。

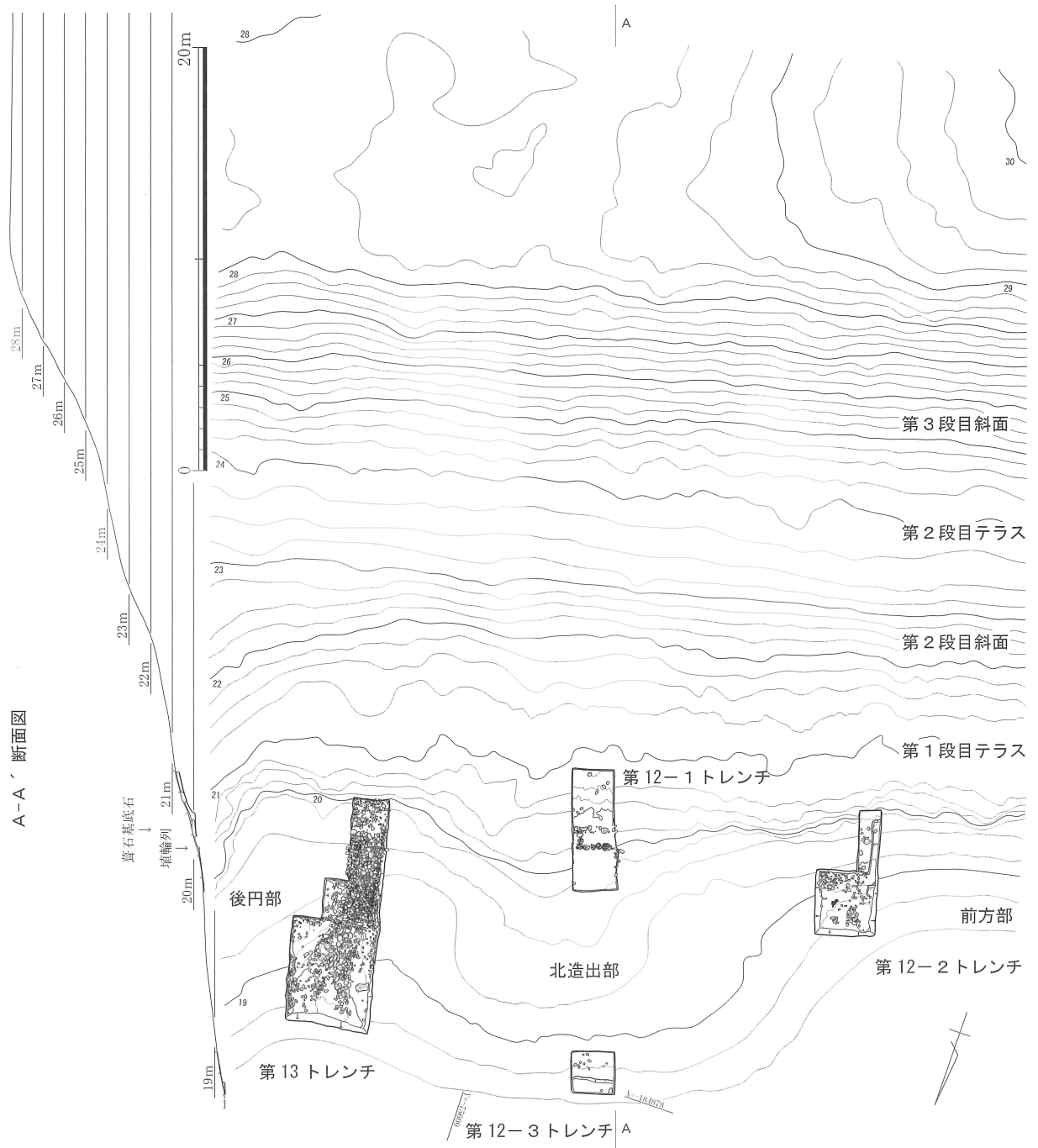
南造出の西端については下部トレンチの調査で手がかりは得られなかった。地山と墳丘盛土との境は、高さ約20.1mの地点である。

遺物としては、表土(Ⅰ)、流土(Ⅱ)より円筒埴輪片、形象埴輪片が出土した。また流土(Ⅱ)からは埴輪のほか、白色の石器片が1片出土した。(横田)

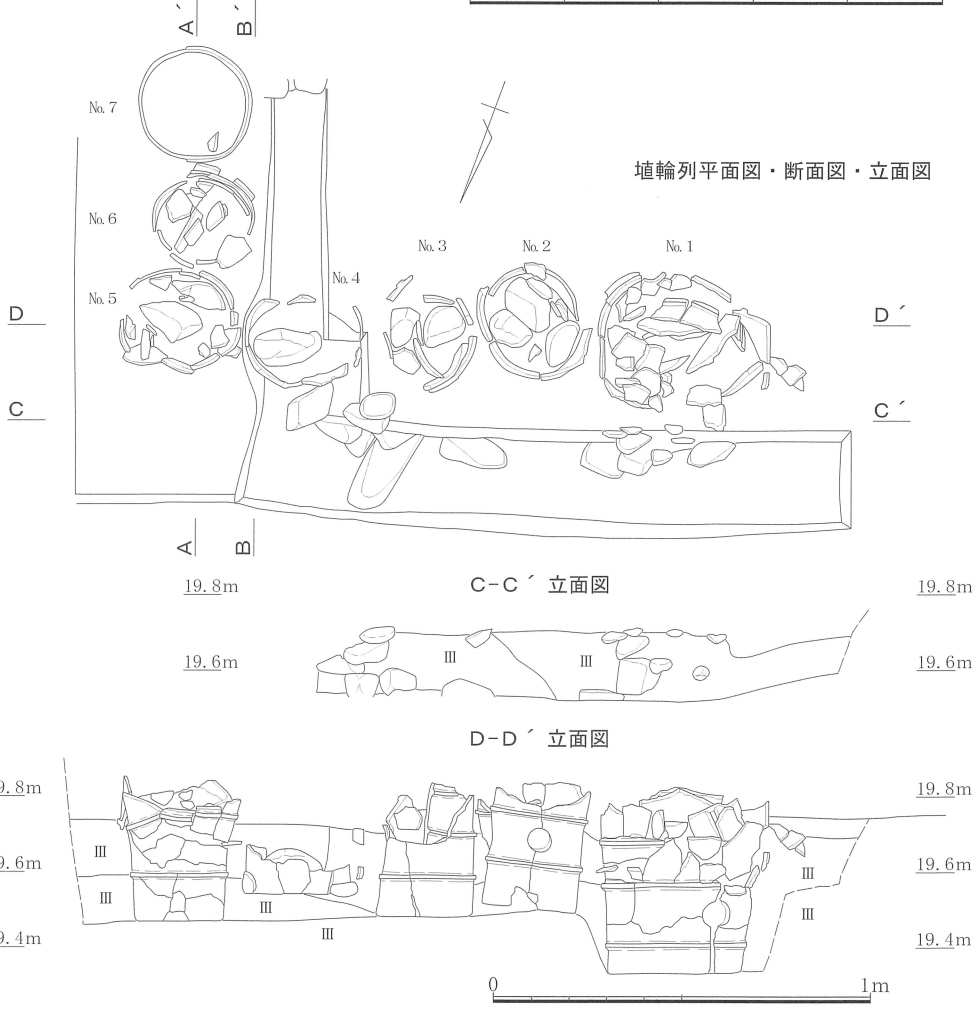
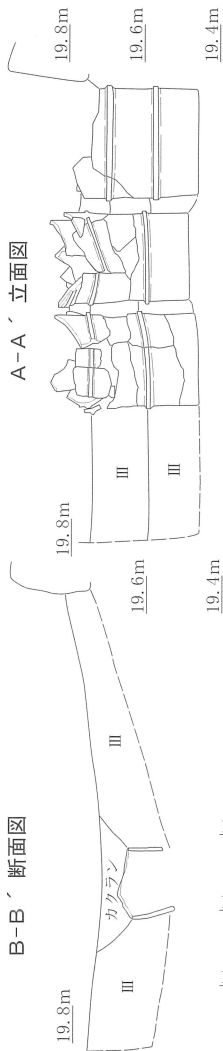
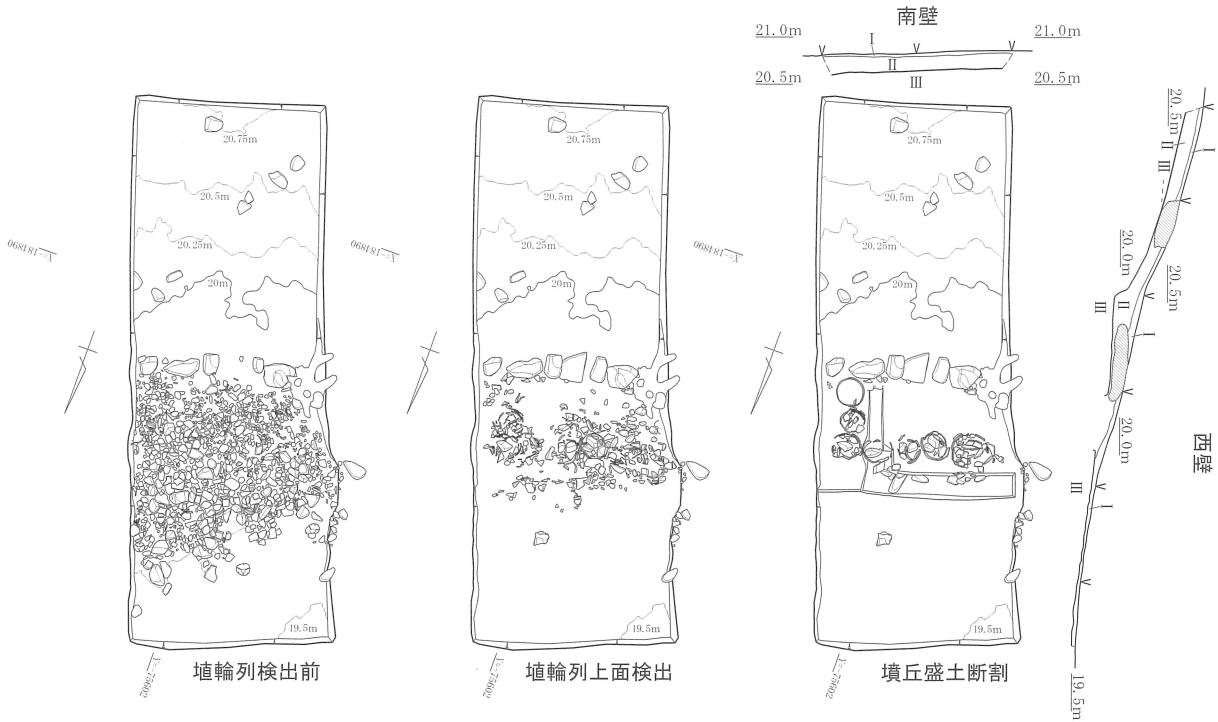
**第12-1トレンチ**(第21図、図版29・30) 濠水の満水時における水際にあたり、かつ地表で観察される北造出の幅の中央付近に、当初長さ5m×幅2mの規模で設定した。精査の過程で、埴輪片と転落した葦石が面的に検出されたため、濠側に長さ0.8m×2mを拡張した。最終的に長さ5.8m×幅2mの規模となった。調査の結果、北造出上面と墳丘第1段斜面の接続箇所を設置された葦石の基底石列と、その石列に並行ならびに直交する埴輪列が確認された。

土層は、墳丘第1段斜面においては、表土(Ⅰ)の下に厚さ20cm弱の流土(Ⅱ)が堆積しており、その下に墳丘盛土面(Ⅲ)が検出された。Ⅱ層は葦石の基底石列を境に途切れている。この基底石列より濠側では表土の直下で家形埴輪を含む(第43図119～128)多量の埴輪と転落したと考えられる葦石が面的に検出され、それを取り上げるとすぐに造出上面の墳丘盛土層(Ⅲ)に至る。濠水に絶えず浸かる環境にあるため、本来は存在したであろうⅡ層が濠内に吸い出されて、遺物と石だけがその場に留まった結果と考えられよう。遺構は、北造出上面から墳丘第1段斜面に立ち上がる葦石の基底石列と、北造出上面に配置された埴輪区画列の南辺の一部と考えられる埴輪列を検出した。基底石列は長径30～40cmを測る。基底石列の残存状況に比較して

その上部の葺石が残っていないことは、多少不可解な状況ではあるが、その要因については不明と言わざるを得ない。埴輪列は、上面を覆っていた埴輪片と転落したと考えられる葺石を取り上げた後に、標高19.8m付近で確認された。一部に後世の攪乱が及んでいたために、検出面は一様ではなかった。平面的な配列を見ると、基本的に前方部側面と並行する東西方向に5個体が並び、No.5から南にNo.6・7が直交して列を成して基底石列と接する配置となっている。次に設置方法であるが、掘方は確認されず、No.2～7までが標高19.5m付近を基底面として厚さ約30cmの2層からなる盛土により、第2段突帯付近までを埋めることで設置されている。これらの盛土内には、長径5～20cmの石が多数含まれていた。しかし、No.1については、後述するように高さ、直径ともに他の埴輪より大形であるため、設置の基底面をさらに15cmほど低くしている。



第20図 宇度墓 第12・13トレンチ平面図・断面図 (1/300)



第21図 宇度墓 第12-1 トレンチ平面図・断面図・立面図 (1/80、1/20)

また、埴輪の内部に落ち込んだ埴輪片の高さを確認したところでは、No.3・7については基底面近くで検出されており、充填された土の量はわずかと考えられる。他は15～20cm程度は土を充填していたと考えられる。充填された土には小礫が含まれており、No.5では顕著であった。埴輪の設置にあたり、多少の土を充填していたと考えられるが、隣あった個体であっても厳密な規則性は認められなかった。ひとつの可能性としては、盛土が2段階に分かれていることから、第1段階の盛土にあたって、作業工程の一環として埴輪を安定させる目的で多少の土を充填した可能性があるかもしれない。

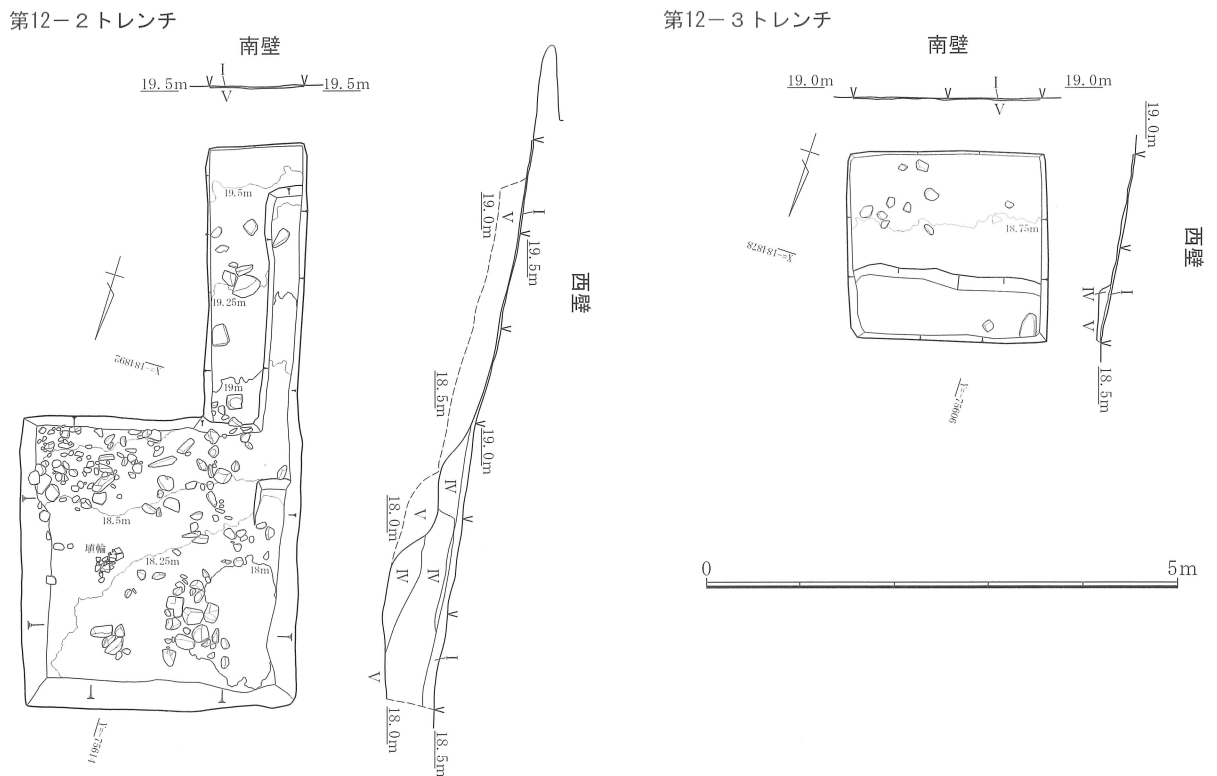
なお、造出上面の埴輪列周辺で確認されたⅢ層は地山の特徴に類似していた。第12-1・3、第13トレンチでの地山検出面からすると、北造出付近は地山整形を基本に造成されている可能性が高いが、埴輪列の掘方が検出されていない。このため、厳密な地山整形が行われたわけではなく、埴輪列周辺は接地面まで粗く削り込んだ後に、最終的に盛土で整えた可能性を考えることができよう。

遺物は、埴輪片が中心であり、後世の遺物は出土していない。

**第12-2トレンチ**(第22図、図版31) 前方部北側面のうち、北造出西辺の形態に沿って等高線が屈曲する位置に、当初長さ3m×3mの規模で設定した。最終的に、墳丘との関係を確認するために長さ2.8m×幅1mの範囲で拡張をおこなった。これにより、最終的な規模は長さ5.8mで最大幅は3mとなった。調査の結果、前方部と北造出が接続する屈曲部の葦石を確認した。

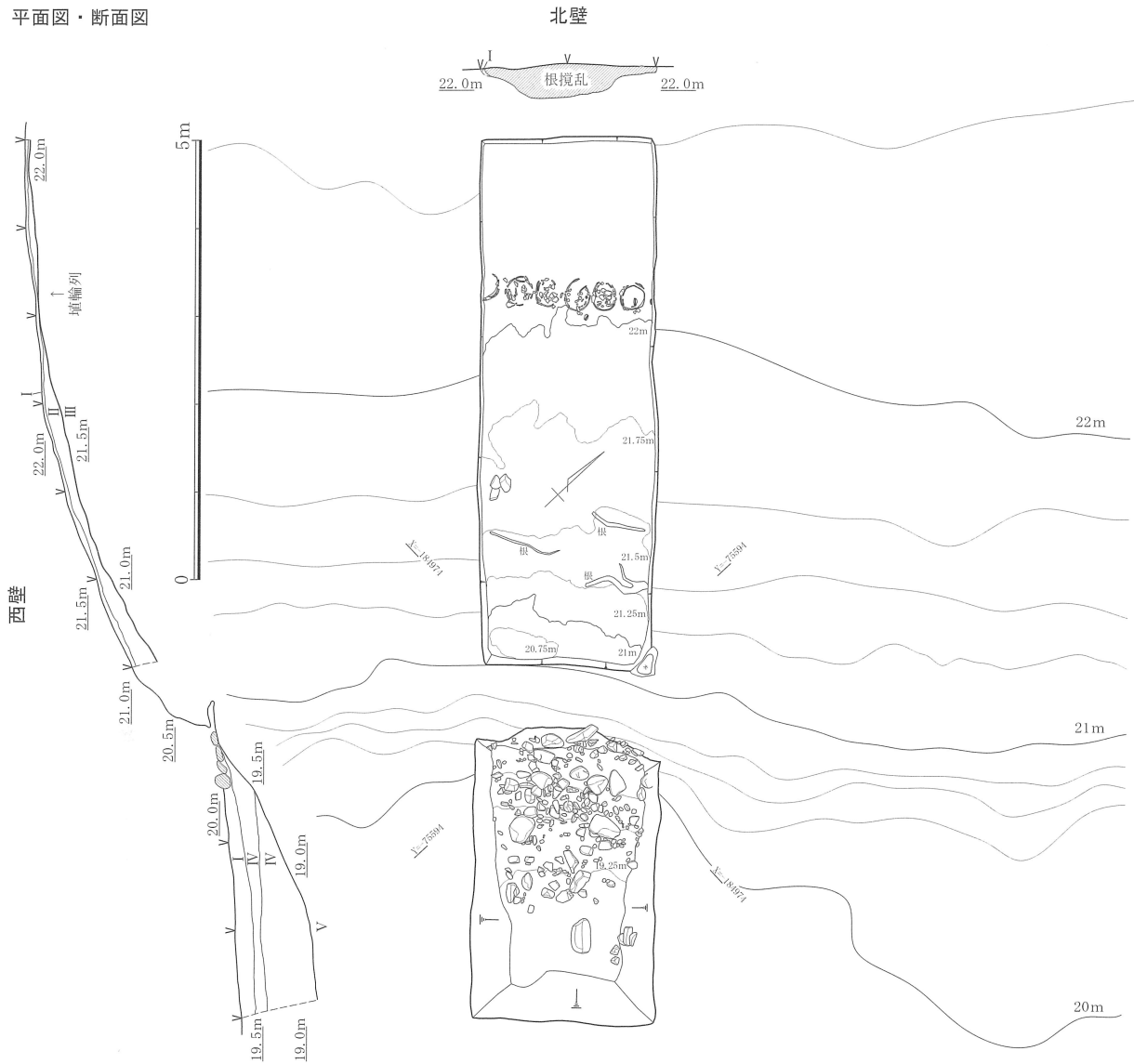
土層は、表土(I)の下に、濠内堆積土(Ⅳ)が認められる。Ⅳ層の下に地山(V)が検出された。トレンチの北西隅がもっとも低く、地山面は前方部側と造出側に立ち上がっていくため、造出の地形を反映するものと判断された。地山直上のⅣ層中からは比較的まとまった状態で朝顔形埴輪の破片が出土している。

遺構は、トレンチ北西隅のもっとも深い地山直上で葦石を確認した。後世の改変の影響が著しく、残存状態が良いとは言えない。明確な基底石列が認められる訳ではないが、一定の関係性をもって石が積み上げられている状況が観察された。石の大きさは長径20cmほどである。この葦石の検出面は標高18mであり、第13トレンチで確認した裾の高さと一致する。墳丘北側における墳丘裾と濠底の接続箇所の高さを示すとい

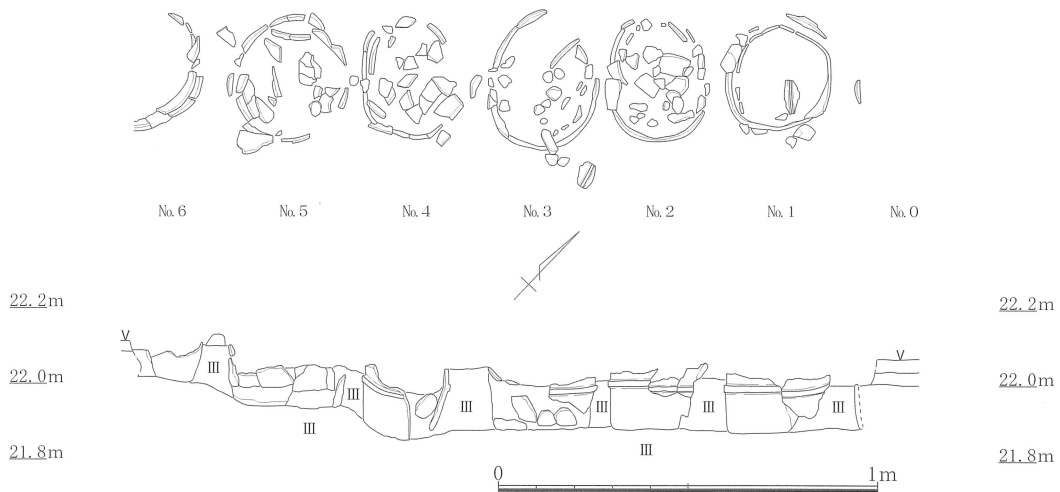


第22図 宇度墓 第12-2・12-3トレンチ平面図・断面図 (1/80)

平面図・断面図



埴輪列平面図・立面図



第23図 宇度墓 第6トレンチ平面図・断面図・立面図 (1/80、1/40)

えよう。

遺物は、IV層から瓦片が出土した以外は、すべて埴輪片である。

**第12-3 トレンチ**(第22図、図版31) 北造出の北辺中央付近に位置しており、長さ2m×幅2mの規模で設定した。調査の結果、既に本来の盛土は濠水の波浪の影響で流失したことが考えられた。

土層は、薄く表土(I)が認められる。表土の下は地山(V)である。地山上面には、トレンチ内のやや北寄りの位置で、深さ0.1mほどが削り込まれた痕跡が認められ、そこには濠内堆積土(IV)が認められる。地山は下降していく状況が認められないことから、本来の造出はさらに北に延びていたと考えられる。

遺構は確認されていない。

遺物は、I層から銅銭(寛永通宝)が出土したほか、IV層からは埴輪片が出土している。(清喜)

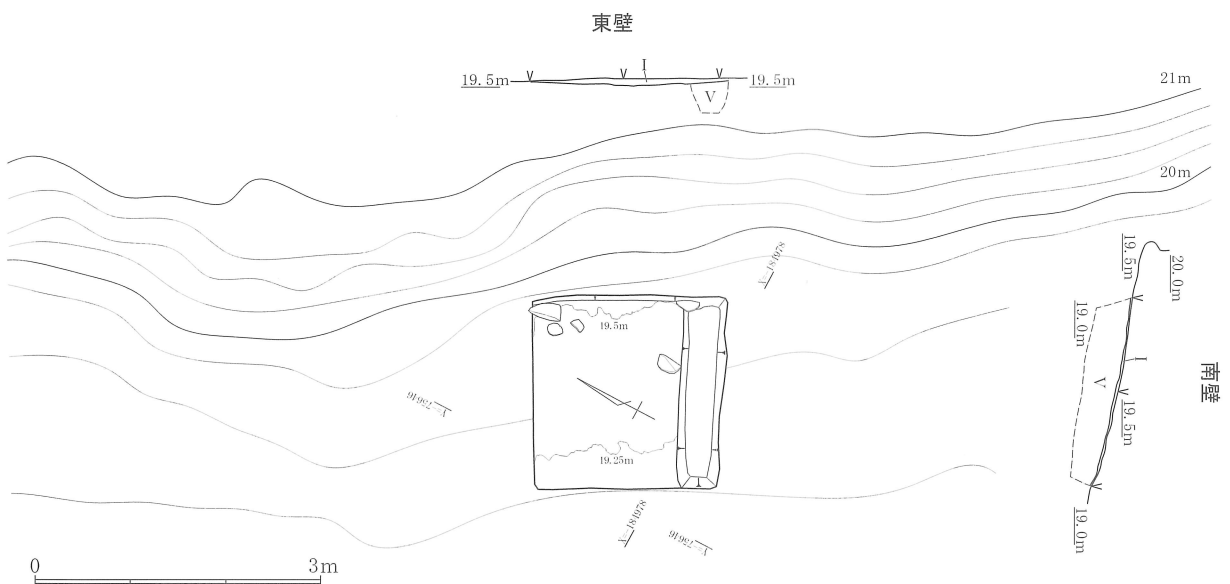
#### (4) 前方部(第6~11 トレンチ)

**第6 トレンチ**(第23図、図版32・33) 前方部南側面の造出に近い位置に、長さ10m×幅2mの規模で設定した。現在の墳丘裾は崖状の地形となっているために、埋め戻しに備えて幅0.8mほどを土堤状に掘り残している。よって、トレンチは上部と下部に分かれている。調査の結果、前方部第1段テラスと埴輪列を検出した。

土層は、上部トレンチで上から表土(I)、流土(II)が検出された。表土、流土ともに薄く流土の厚さは約0.1mである。その下に墳丘盛土(III)で形成された第1段テラスが存在する。下部トレンチは、表土(I)の下に濠内堆積土(IV)が2層確認されている。上層が薄く、比較的近年のものと考えられる。下層は約0.5mの厚さがあり、遺物や転落したと考えられる葦石が多数含まれていた。これらの出土がなくなった面が地山(V)と判断している。地山の中には様々な大きさの多量の礫が含まれていた。

遺構は、前方部第1段テラスにおいて埴輪列を検出した。幅2mの間に6本を確認した。埴輪の検出レベルは標高22mである。設置状況を調査した結果では、掘方は検出されなかった。設置面は標高21.9m付近であり、基底部から第1段突帯までの10cm程度が埋められた状況にあった。この面を本来のテラス面とすると、埴輪列を検出した他のトレンチの設置状況と比較して浅いものであったことになる。埴輪の中からは、破片が基底部と同じか基底部に近い高さで検出されたことから、設置の際に埴輪内部に土を充填していなかったか、充填した場合でも第1段突帯まで及ばないものであったと判断できる。

遺物は、埴輪列で検出された埴輪のほか、多くの埴輪片が出土した。他の遺物は出土していない。(清喜)



第24図 宇度墓 第7トレンチ平面図・断面図 (1/80)



第25図 宇度墓 第8トレンチ平面図・断面図 (1/80)



第26図 宇度墓 第8トレンチ葺石平面図・立面図 (1/20)

**第7トレンチ**(第24図、図版35) 前方部前面の墳丘主軸よりも南側に設けたトレンチである。前方部前面の第1段斜面を確認するために設定した。トレンチの大きさは2m×2mである。確認された土層はごく薄い表土(I)の下に地山(V)が確認できるのみであった。前方部前面の第1段斜面は大きく崩落していることがうかがえる。(加藤)

**第8トレンチ**(第25・26図、図版34・35) 前方部側の墳丘主軸上に設定した。前方部前面部は濠水の波浪による崩落が著しいために、上部と下部に分けており、上部が長さ4m×2m、下部が長さ6m×幅2mの規模で設定した。上部は葺石と埴輪列の確認のため、最終的に墳丘側に長さ1m×幅1m、濠側に長さ1.4m×幅1mの規模で拡張した。調査の結果、墳丘第1段テラスと墳丘第2段斜面の葺石を確認した。

土層は、上部で表土(I)の下に流土(II)が確認される。II層は緻密な土質であり、葺石を直接覆うとともに、多くの埴輪片、転落した葺石を含んでいる。もっとも厚い箇所では約0.4mを測る。II層を除去すると墳丘盛土(III)により形成された墳丘第1段テラスに至り、緻密な土層(II)から礫交じりの土層(III)に移行する。下部は、表土(I)の下はすべて濠内堆積土(IV)である。3層にわけられるが、上層は比較的近年に形成されたと考えられる。一方で、中層と下層では転落してきた葺石と考えられる大きな石や埴輪片が含まれており、比較的古い時期に堆積した可能性が考えられる。

遺構は、上部トレンチでは、前方部の墳丘第1段テラスと第2段斜面の葺石を検出した。テラスは、葺石の基底石列から濠側に幅4.6mまでを確認した。それより濠側は崖状に崩落しており本来の幅は明らかにできない。葺石は、南北方向に長径30～40cmを測る人頭大の石が直線的に並び、これが基底石列となっている。ここから上方に長径5～20cmほどの石が葺かれている。一部に目地状に並ぶ箇所も認められるが、明確に施工範囲を区画するような目地は調査範囲内では確認されなかった。第2段斜面の傾斜角度は約21°である。

なお、埴輪列は確認されなかった。第1トレンチにおいては葺石の基底石列から約4mの位置で検出されていることもあり、同様の位置関係であれば調査範囲内で確認できるところであるが、墳丘崩落の過程で流失したか、もっと外側に設置されていたのであろうか。

下部トレンチでは、確定的な遺構は確認されなかった。トレンチ西端付近において検出された斜面の傾斜角度は約20°である。これがある程度は本来の墳丘第1段斜面の傾斜を反映している可能性があるものの、この傾斜角度と位置でそのまま復元すると、上部トレンチで推定される埴輪列の位置関係と符合しないとも考えられるため、断定はできない。

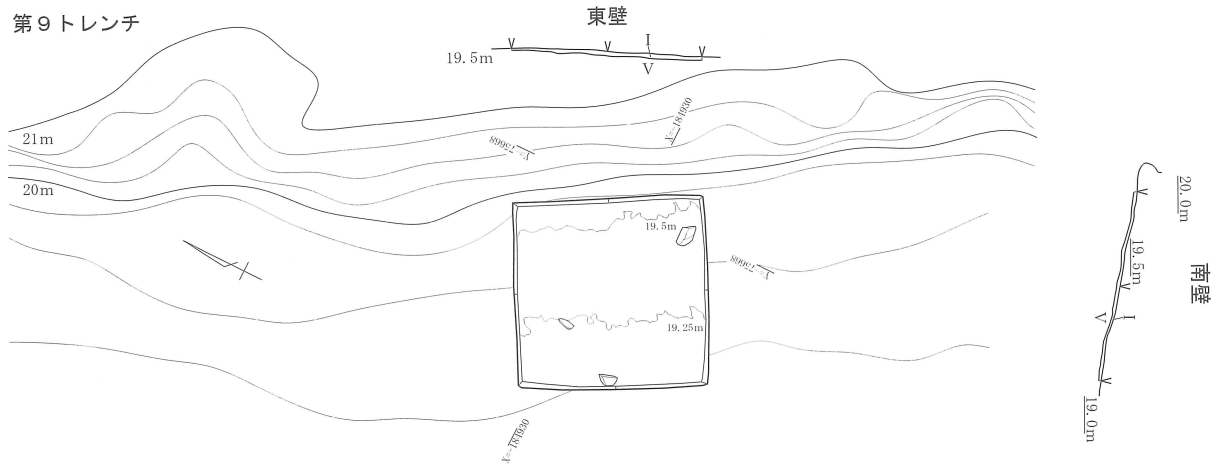
遺物は、表土で瓦片が出土したほかは、すべて埴輪片である。(清喜)

**第9トレンチ**(第27図、図版35) 前方部前面の墳丘主軸よりも北側に設けたトレンチである。前方部前面の第1段斜面を確認するために設定した。トレンチの大きさは2m×2mである。確認された土層はごく薄い表土(I)の下に地山(V)が確認できるのみであった。前方部前面の第1段斜面上部は大きく崩落していることがうかがえる。

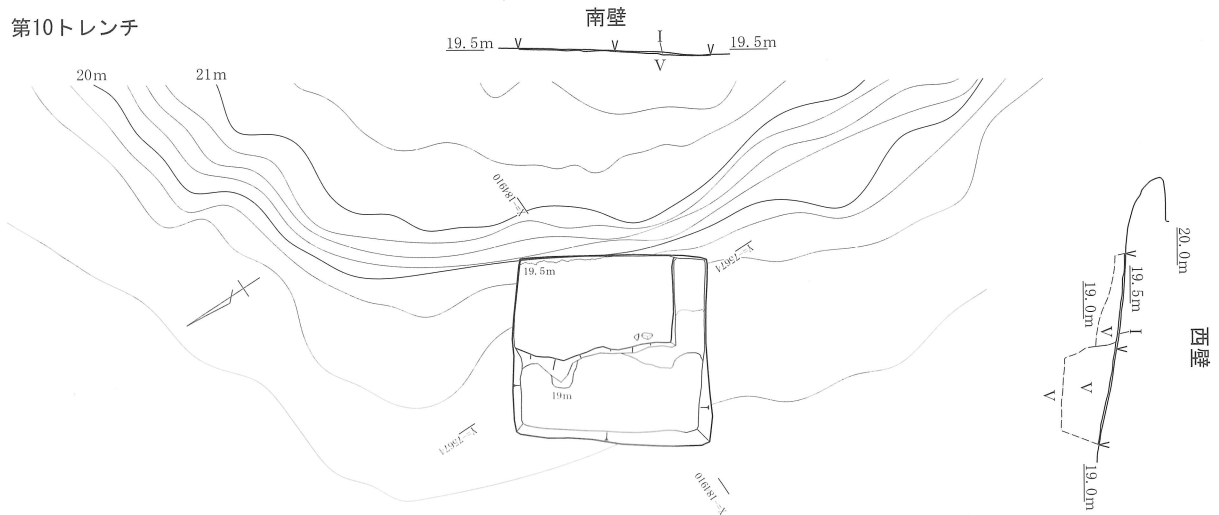
**第10トレンチ**(第27図、図版35) 前方部の北側隅角に設けたトレンチである。前方部の第1段斜面を確認するために設定した。トレンチの大きさは2m×2mである。確認された土層はごく薄い表土(I)の下に地山(V)が確認できるのみであった。前方部の第1段斜面上部は大きく崩落していることがうかがえる。なお、本トレンチの地山は墳丘側と濠側とで大きく異なっている。近隣の淡輪遺跡の調査成果からもうかがえるように、当墓築造以前の自然流路(番川の氾濫原?)が前方部前面付近に存在した可能性も考えられる。

**第11トレンチ**(第27図、図版35) 前方部前面の北側側面に設けたトレンチである。前方部前面の第1段斜面および墳裾を確認するために設定した。トレンチの大きさは2m×5.5mである。確認された土層は表土(I)、濠内堆積土(IV)、地山(V)であった。前方部前面と同様に第1段斜面上部は大きく崩落していることがうかがえるが、現状の汀から外堤側に4.5mほどのところで地山が大きく落ち込む箇所がみられる点が注意される。勾配が急であることから墳丘第1段斜面である可能性は低いと思われる。浚渫などによる削平の痕跡であろうか。(加藤)

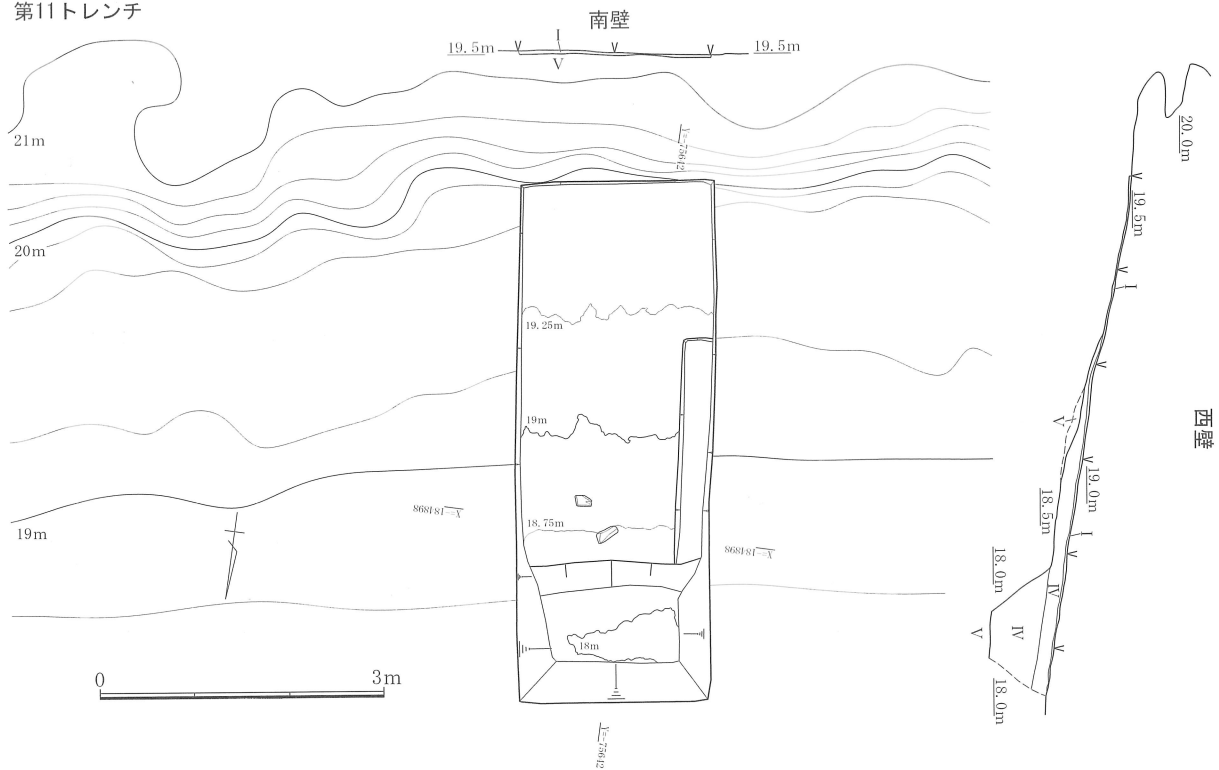
第9トレンチ



第10トレンチ



第11トレンチ



第27図 宇度墓 第9・10・11トレンチ平面図・断面図 (1/80)

### 3 出土遺物

今回の事前調査で出土あるいは採集した遺物は16,700点余りに及ぶ。これに平成24年度の立会調査(本誌第65号〔陵墓篇〕)において後円部から北造出周辺で採集したものを加えると、総数約17,000点となる。

内訳は、ほぼすべてが埴輪片であり、わずかに須恵器片、土師器片、縄紋時代晩期から弥生時代初頭にかけての土器、石器、近世の銭貨、磁器などである。墳丘裾は全面的に改変がなされている可能性が高いものの、第1段テラスより上方の残存状況は良好であり、後世の改変の形跡は認められない。出土傾向は、この状況とよく符合しているといえよう。また、出土遺物の多くは、南造出に設定した第5-1~4トレンチと、北造出に設定した第12-1~3、13トレンチからの出土である。なお、図示した各資料の出土位置・採集位置については番号脇の括弧内に記した。括弧内には基本的にトレンチ番号が記載されているが、例外的にアルファベットで記載されているものがある。これについては、平成24年度に実施された当墓における立会調査時(本誌第65号〔陵墓篇〕参照)に採集されたものであり、その採集位置については第4図のとおりである。

以下に、出土遺物の詳細について述べる。

(清喜)

#### (1) 埴輪(第28~43図、図版11~17)

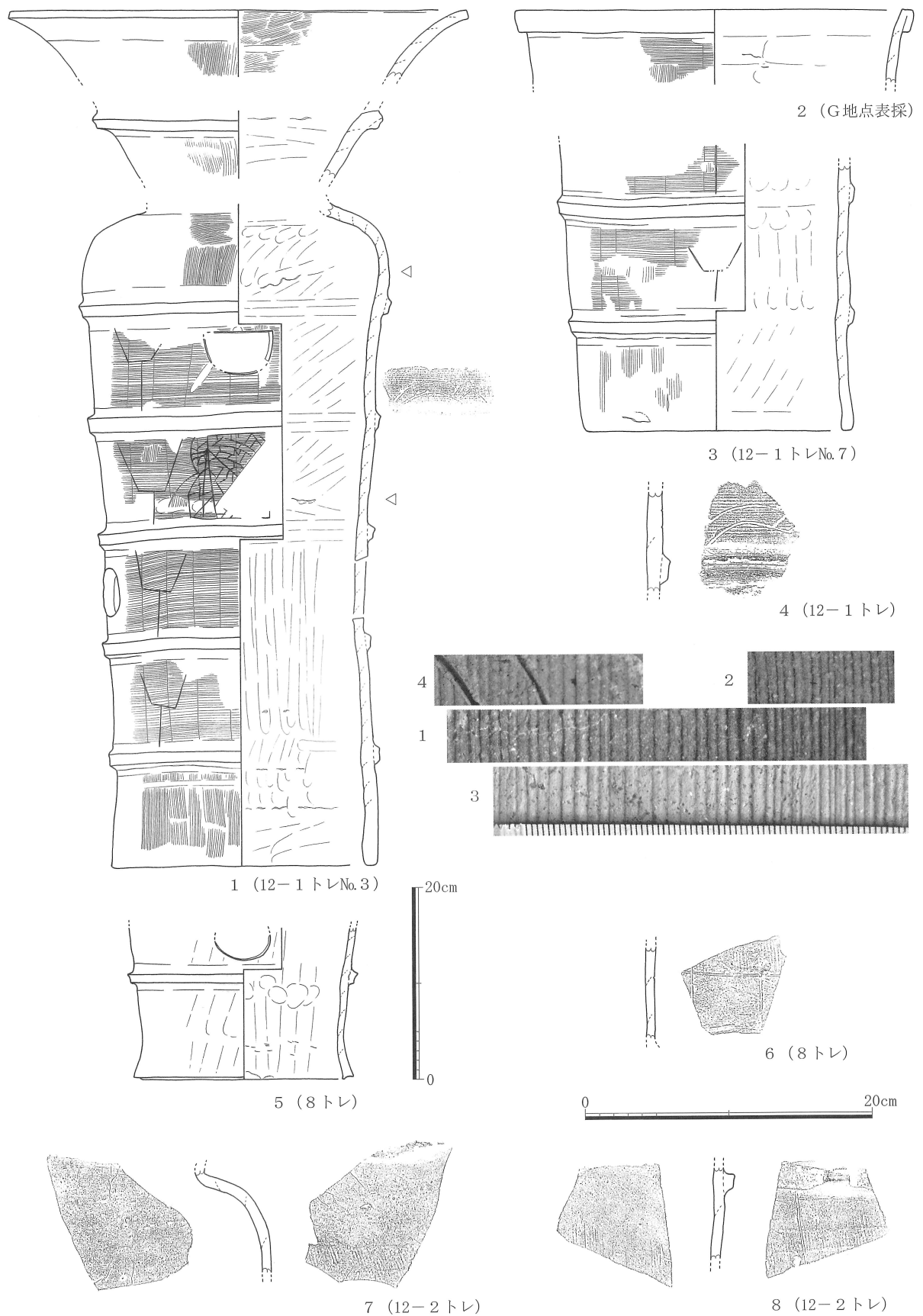
図示した埴輪の大半は円筒埴輪・朝顔形埴輪といった墳丘テラス面や造出において埴輪列を構成していたものであるが、それ以外に造出周辺を中心にして大型円筒埴輪や盾形埴輪・靱形埴輪・甲冑形埴輪(短甲・草摺)・蓋形埴輪・罎形埴輪・家形埴輪などの形象埴輪も確認できる。なお、蓋形埴輪と家形埴輪は南北両方の造出から出土しているものの、盾形埴輪、靱形埴輪、甲冑形埴輪は南造出周辺のみで、罎形埴輪は北造出周辺のみで確認されている。

焼成はいずれの資料にも黒斑がみられないことから、窖窯によるものと判断される。焼成の仕上りは、須恵質といわれるような硬質なものから軟質なものまで多様である。その割合は全体でみれば須恵質のものが2~3割、軟質のものが7~8割といった印象であるが、造出周辺では須恵質のものがやや多くなる印象も受ける。印象としては窖窯焼成導入期の他古墳における様相とそれほど差がないように感じられる。なお、成形・整形に関する技法的な差異と焼成の仕上りとの有意な関連はみだせないものの、形象埴輪については硬質な仕上りとなるものはあるが須恵質にまでなっているものがないことは指摘できる。

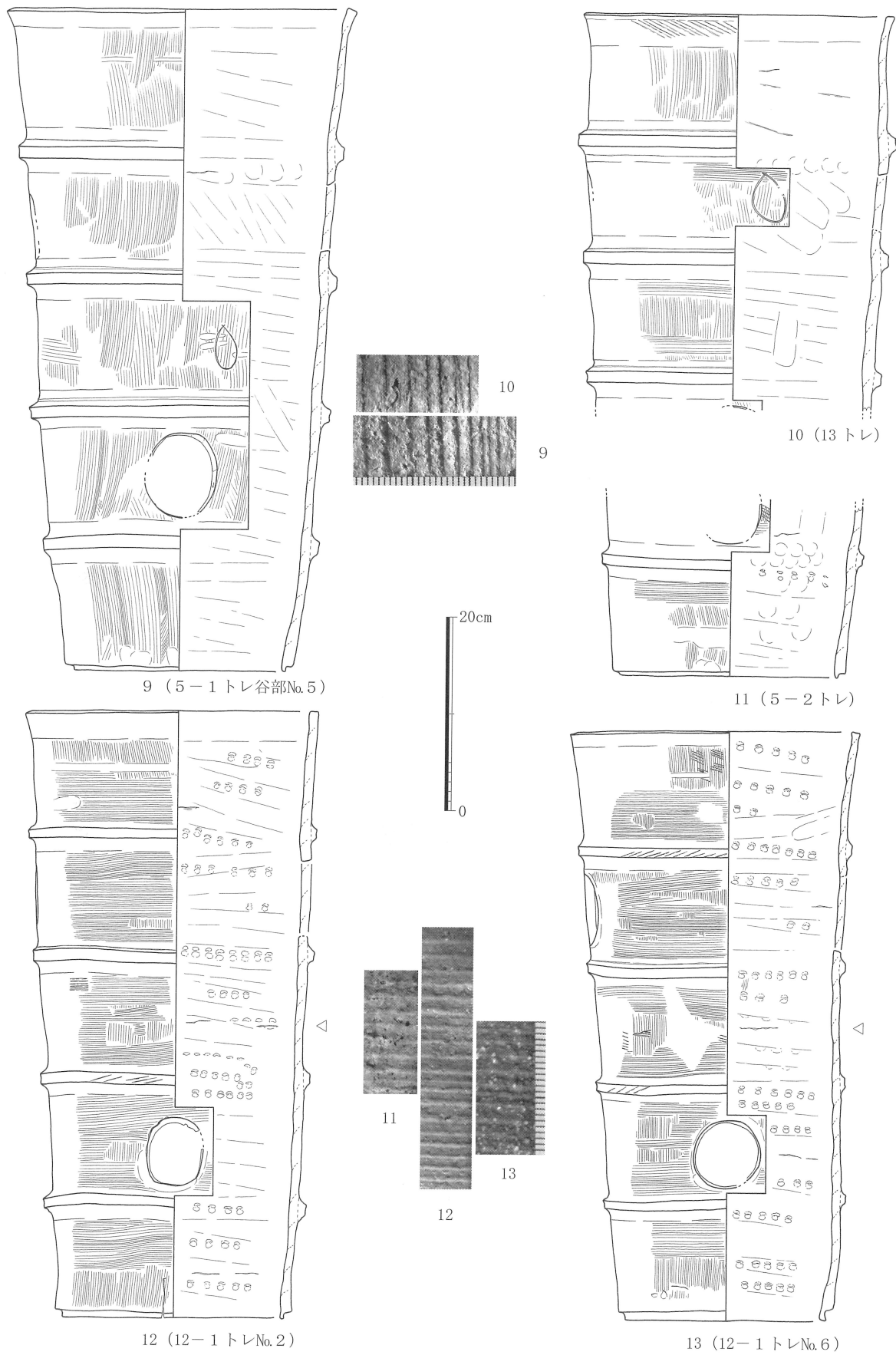
胎土については大別二群に分類可能と考える。一つは砂粒などの混和材を含むもの、もう一つは砂粒などの混和材をほとんど含まないものである。割合としては前者が大半であり、後者は同一製作者によると思われる埴輪(5~8)に限定されるもので、非常に精良な胎土を使用するものである。なお、前者である混和材を含むものについて、その多寡は漸移的であり少な目のものから非常に多く含むものまで多様であり、あえて分類する必要があるとは思えない。実際、同一個体内において使用する粘土が小工程ごとに劇的に異なっているものが散見されるからである。なお、胎土に含まれる混和材としては砂粒(白色粒、砂岩片など)のほかには禾本科植物片(藁スサ)もみられる。

色調は焼成とも関連してくるが、黄橙~黄白色系のものが6~7割、灰色系のものが3~4割といったところであろうか。

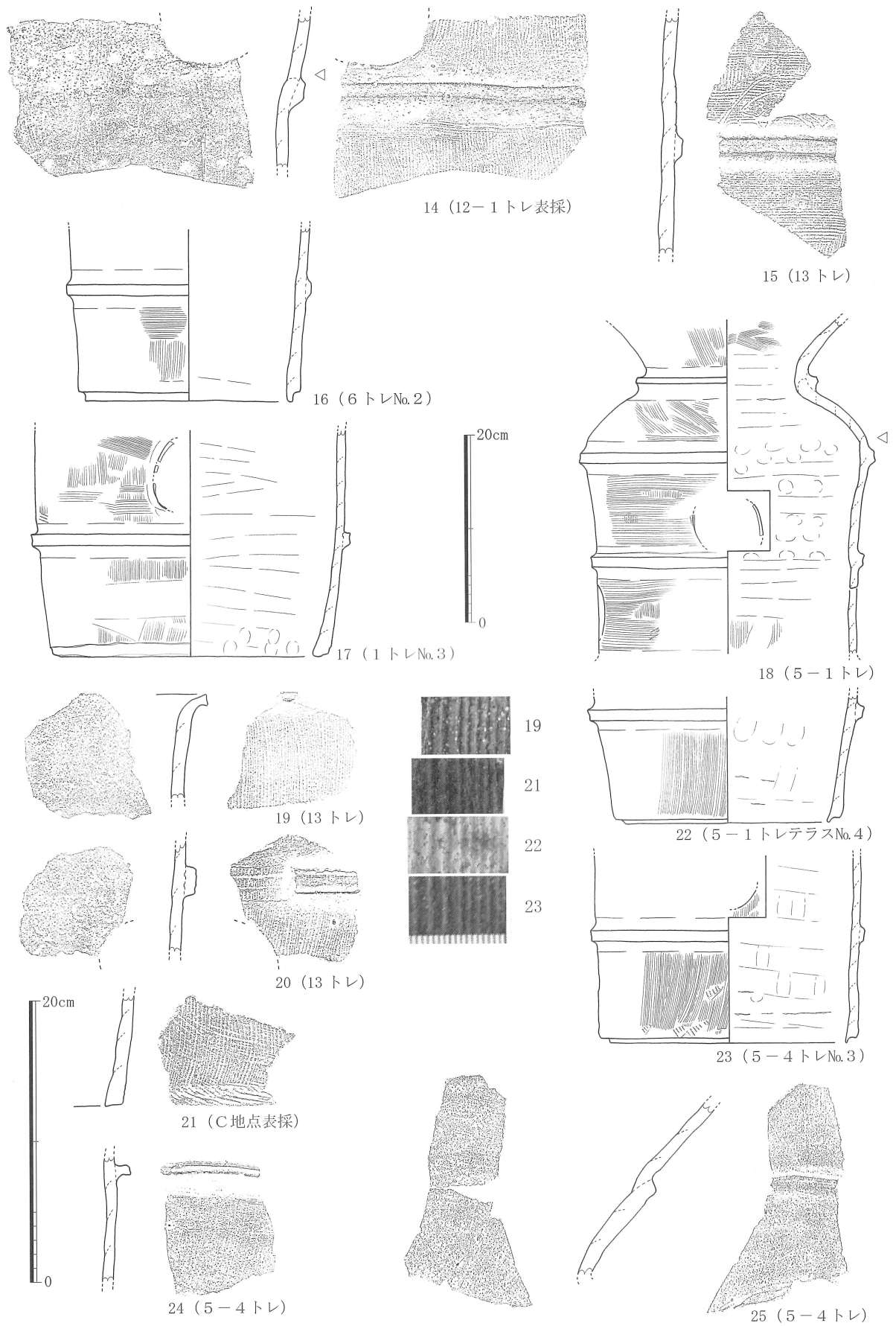
**円筒埴輪・朝顔形埴輪** まず、全体的な傾向について述べておきたい。円筒埴輪・朝顔形埴輪は外面の最終調整によって、①Bc種ヨコハケ(1~4)、②C種ヨコハケ(9~18)、③タテハケ(19~25)、④ナデ(26~31)、⑤ナデだが平行タタキ残る(5~8・32~43)、⑥平行タタキ(44~49)、⑦格子目タタキ(50~62)の七つの類型に分類可能である。このうち①については、現状では一人の製作者しか確認できておらず、輪台技法を使用しないことや同様のヘラ記号が応神天皇陵、百舌鳥陵墓参考地などで確認できることなどから、王権中枢に系譜をもつ埴輪ということが出来る(以下、王陵系と呼称する)。②~⑦については、通常の円筒埴輪にはみられないC種ヨコハケやタタキといった須恵器系譜の技術がみられるものの、すべての個体において輪台技法がみられるわけではなく、何をもって淡輪系埴輪とするかという問題が残る。当墓におけ



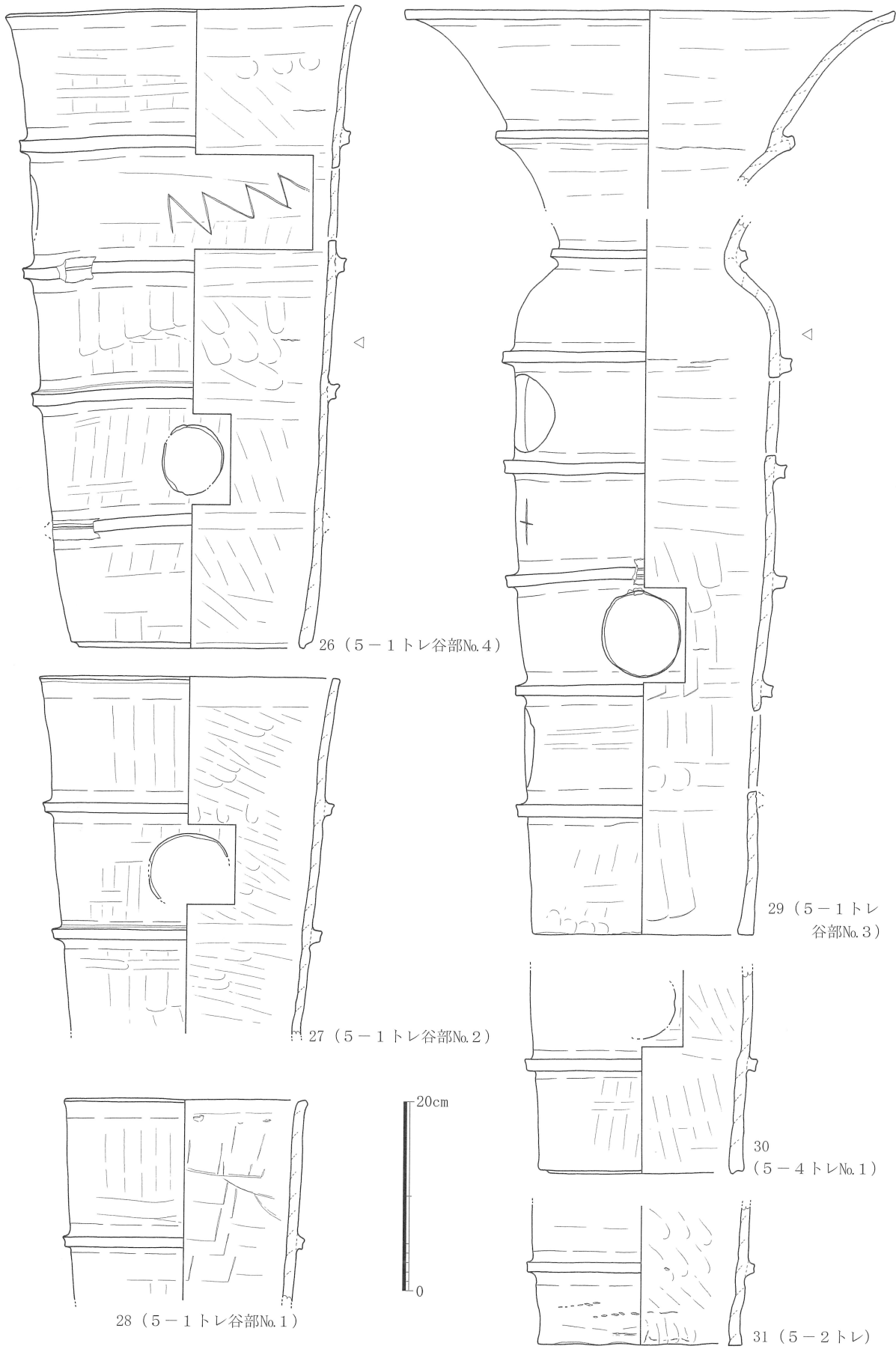
第28図 宇度墓 出土品実測図 (1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (1/4、1/6)



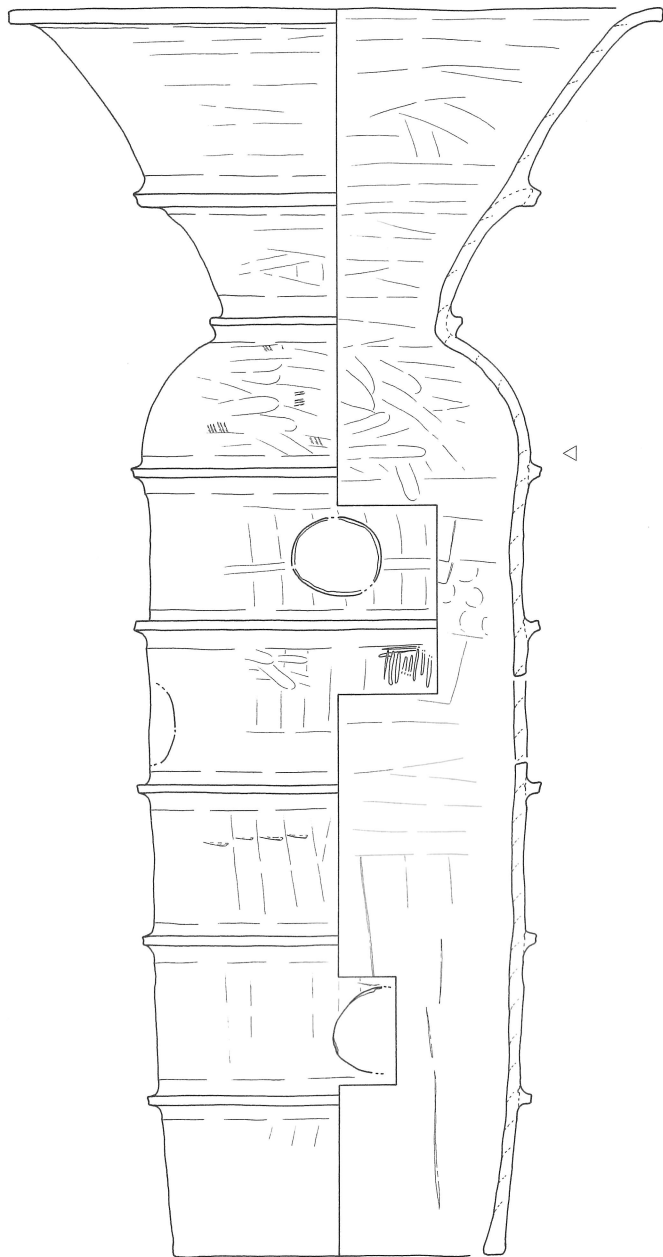
第29図 宇度墓 出土品実測図(2) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1/6)



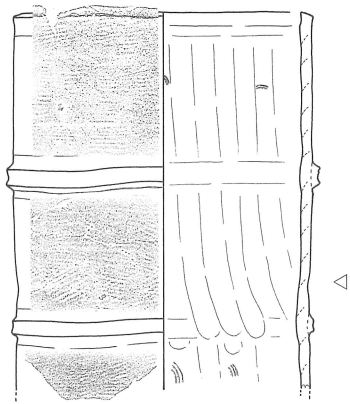
第30図 宇度墓 出土品実測図(3) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1/4、1/6)



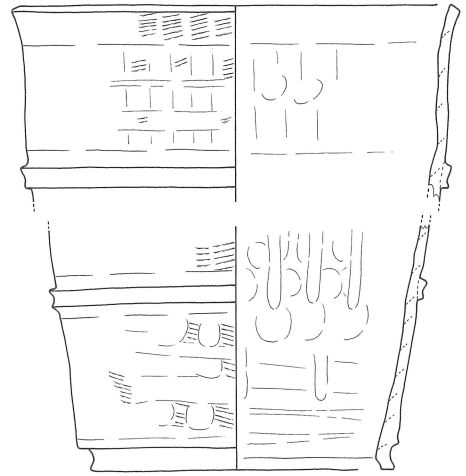
第31図 宇度墓 出土品実測図(4) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1/6)



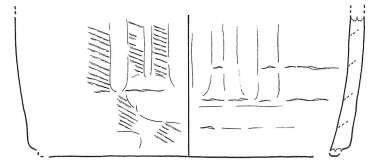
32 (5-1 トレ谷部No.6)



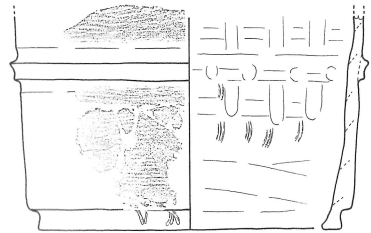
33 (12 トレ)



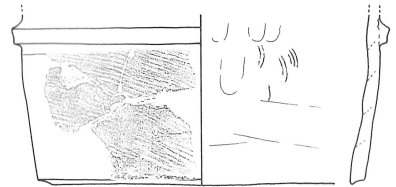
34 (6 トレNo.5)



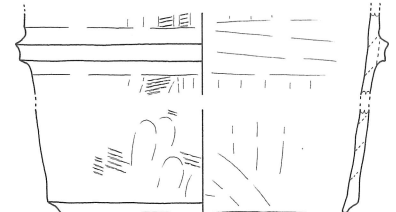
35 (12-1 トレ)



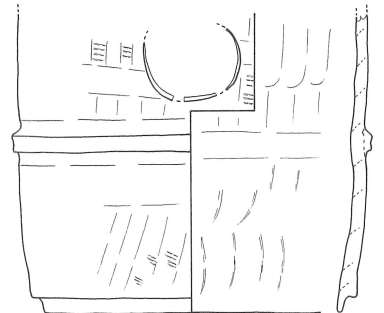
36 (1 トレNo.5)



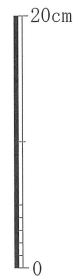
37 (1 トレNo.1)



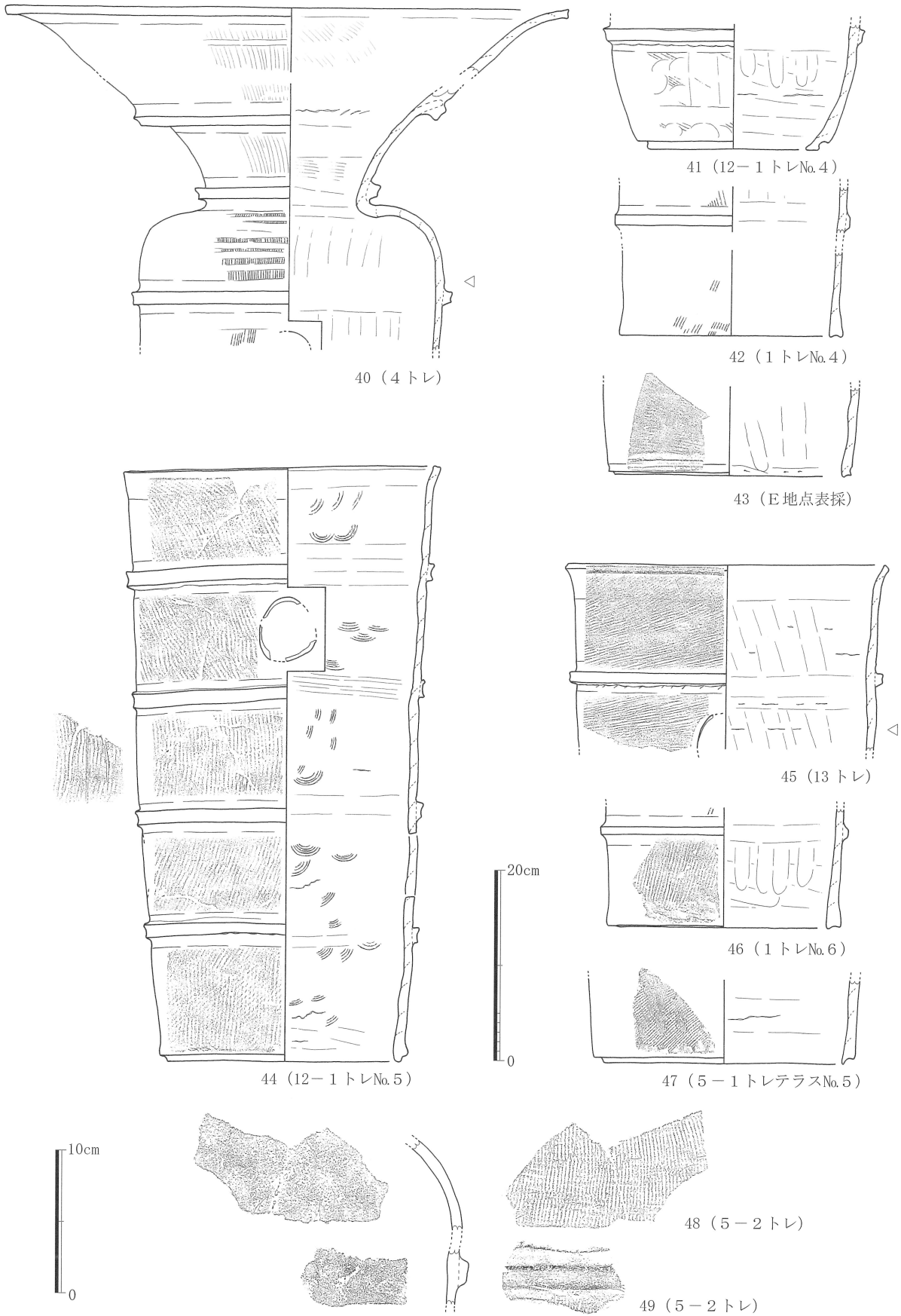
38 (1 トレNo.2)



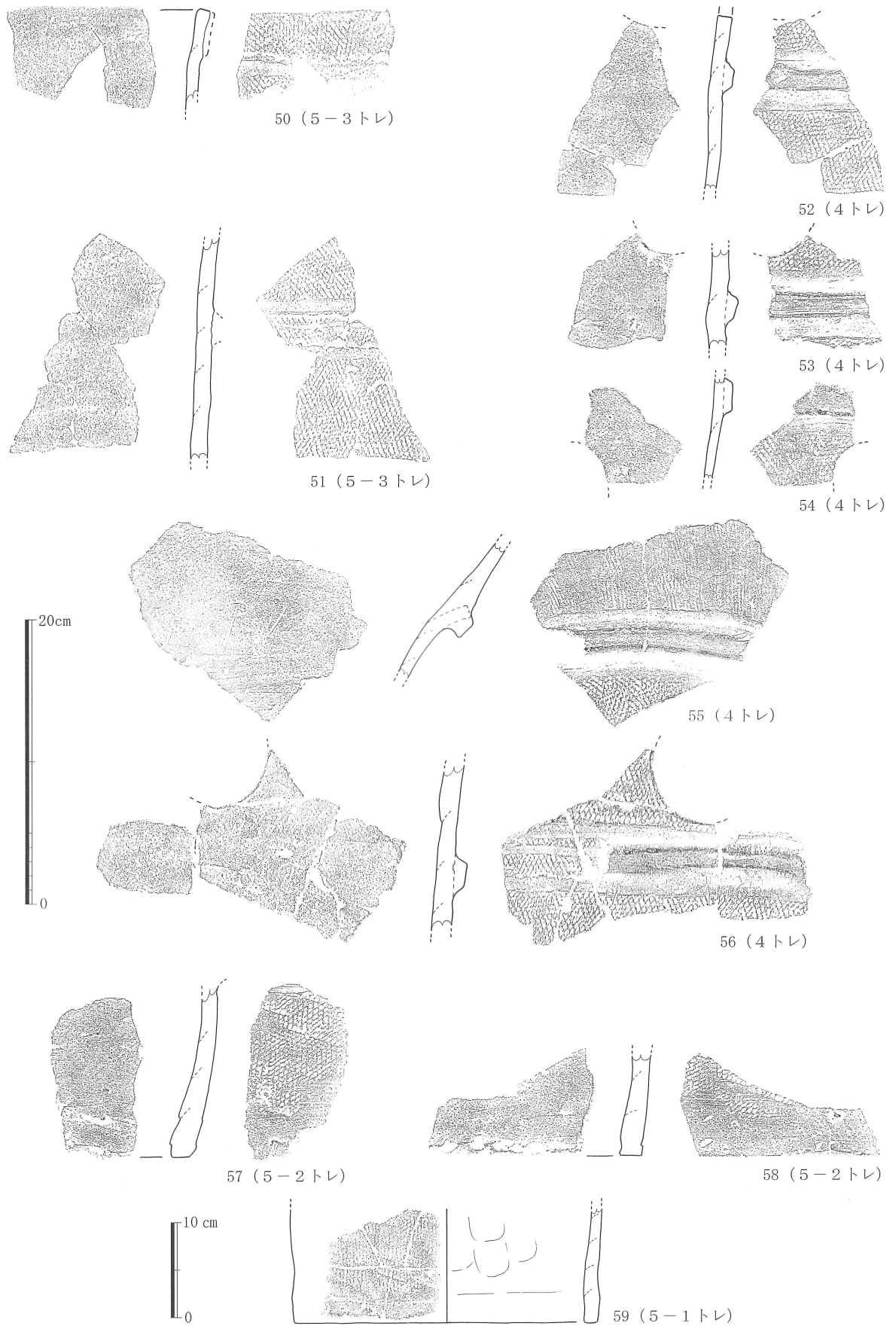
39 (6 トレNo.4)



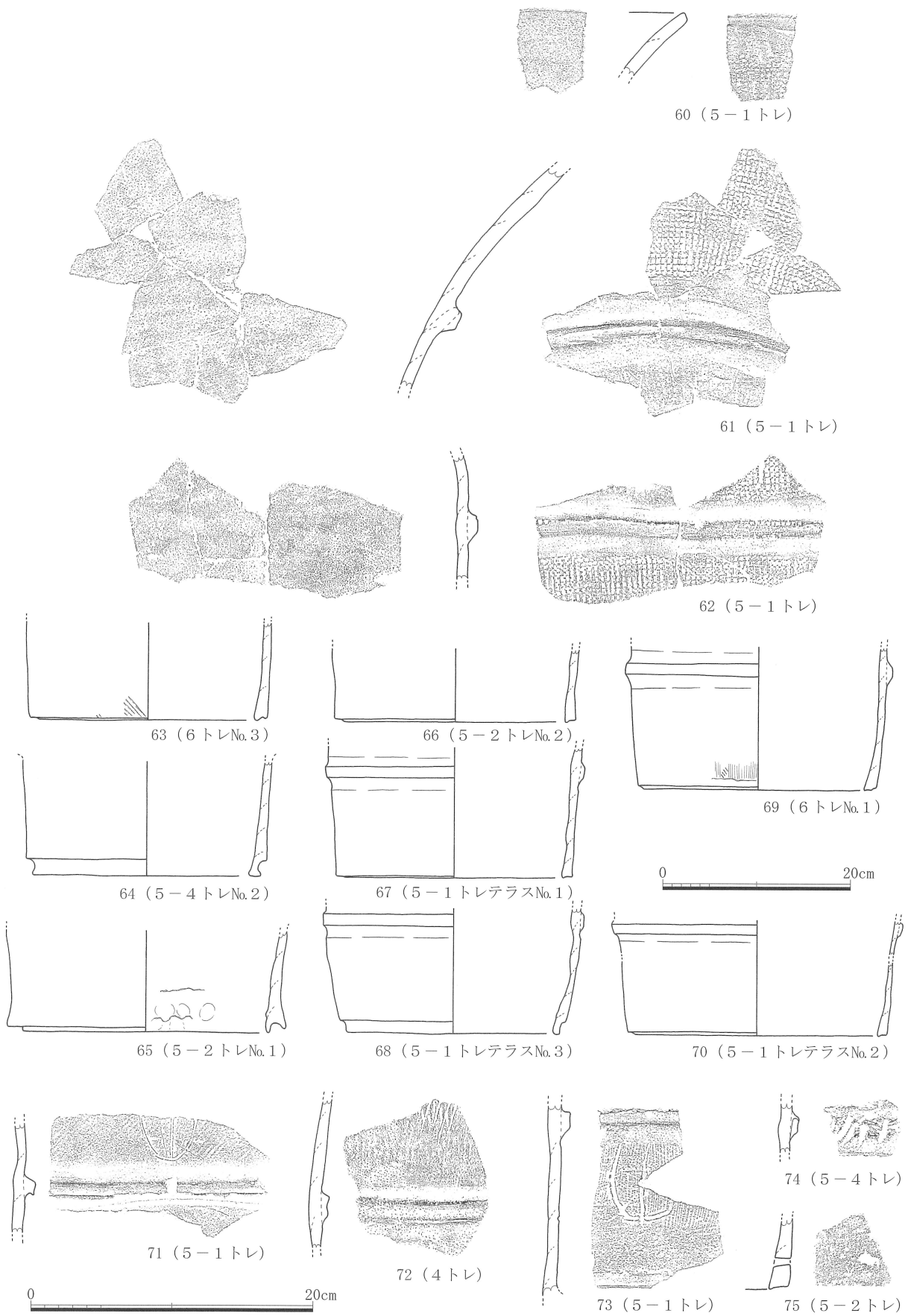
第32図 宇度墓 出土品実測図(5) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1/6)



第33図 宇度墓 出土品実測図 (6) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (1/4、1/6)



第34図 宇度墓 出土品実測図(7) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1/4、1/6)



第35図 宇度墓 出土品実測図(8) 円筒埴輪・朝顔形埴輪(1/4、1/6)

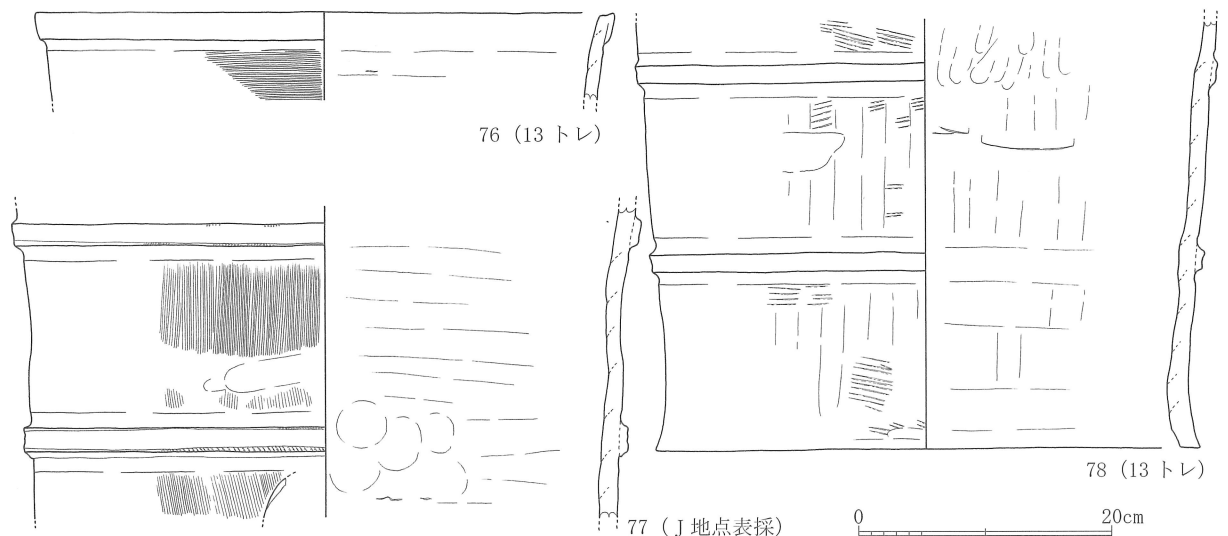
る王陵系以外の円筒埴輪類は須恵器製作者が埴輪生産に取り込まれたというよりは、埴輪製作者が須恵器の製作技術を取り入れてしまった結果という特異な状況を想像しておきたい<sup>(5)</sup>。

今回の調査で出土した第1段テラス上および造出上における円筒埴輪(のちにふれる大型円筒埴輪は除く)は器高63cm前後の4条5段構成となっている。透孔は円筒埴輪では第2・4段に二孔ずつ穿ち、それぞれが直交するように配置することを基本とする。朝顔形埴輪では第3・5段に二孔ずつ穿ち、それぞれが直交するように配置するものが多いが、第2段にも透孔をもつものが存在する。少なくとも、第2段に透孔がないものは朝顔形埴輪とみてよいものと思われる。透孔の形状は基本的に円形であるが、半円形のものもわずかに存在する(1)。第1段高は12~14cmのものも多く、底径は24~27cmのものが多い。突帯間隔は12~13cm程度のものが多い。突帯間隔の設定方法には凹線、二重凹線がみられる。口縁部高は13cm前後のものも多く、おおむね全段が均等になるような割付となっている。口縁部の形状は基本的に直立するものが多いが、外反するものが少数ながら存在する(19)。口径は30~36cmのものが多い。

以下では、大まかではあるが個々の資料の説明をしておく。1~4は同一のハケメをもち、外面の最終調整にB種ヨコハケがほどこされた王陵系の円筒埴輪類である。1は朝顔形埴輪で第2~5段の外面に同様のヘラ記号がほどこされているとともに、第4段ではさらに直弧紋風の線刻や、第5段では別のヘラ記号がみられる。また、第5段には半円形となる透孔のみられる点の特徴である。2は貼付口縁といわれる形状のものであるが、実際には積上げた粘土を折返すことで成形している。のちにとりあげる大型円筒埴輪の口縁部ではあるが、ハケメが同一であることからこの個体はここでとりあげることとした。

5~8は上でも述べたように非常に精良な胎土をもつ一群である。おそらく同工品で、当墓出土埴輪のなかでは最も須恵器的な製作技術をもつ製作者であったものと推測される。なお、5・6と7・8はそれぞれ同一個体の破片と考えられる。

9・10は同一のハケメ、同様のヘラ記号をもつことから同工品と判断される。外面調整はタテハケが基調であるようにもみえるが、最終的にはC種ヨコハケを志向していたようである。11~13は同一のハケメをもつことや内面調整の共通性などから同工品と判断される。外面調整は平行タタキ→タテハケ→C種ヨコハケの順にほどこされたようであり、突帯の貼付に際しても、平行タタキをもちいたことが観察される。12では第1・2条突帯のみが本体とは異なる色調となっており、この二つの突帯のみ異なる粘土がもちいられたようである。14・18は内面調整のハケがみられる点で、当墓出土の円筒埴輪類のなかでは少数派といえる。14では突帯よりも上では砂粒を多く含む胎土がもちいられており、拓本でもその様子がうかがえる。使用する粘土が変わったものと考えられる。

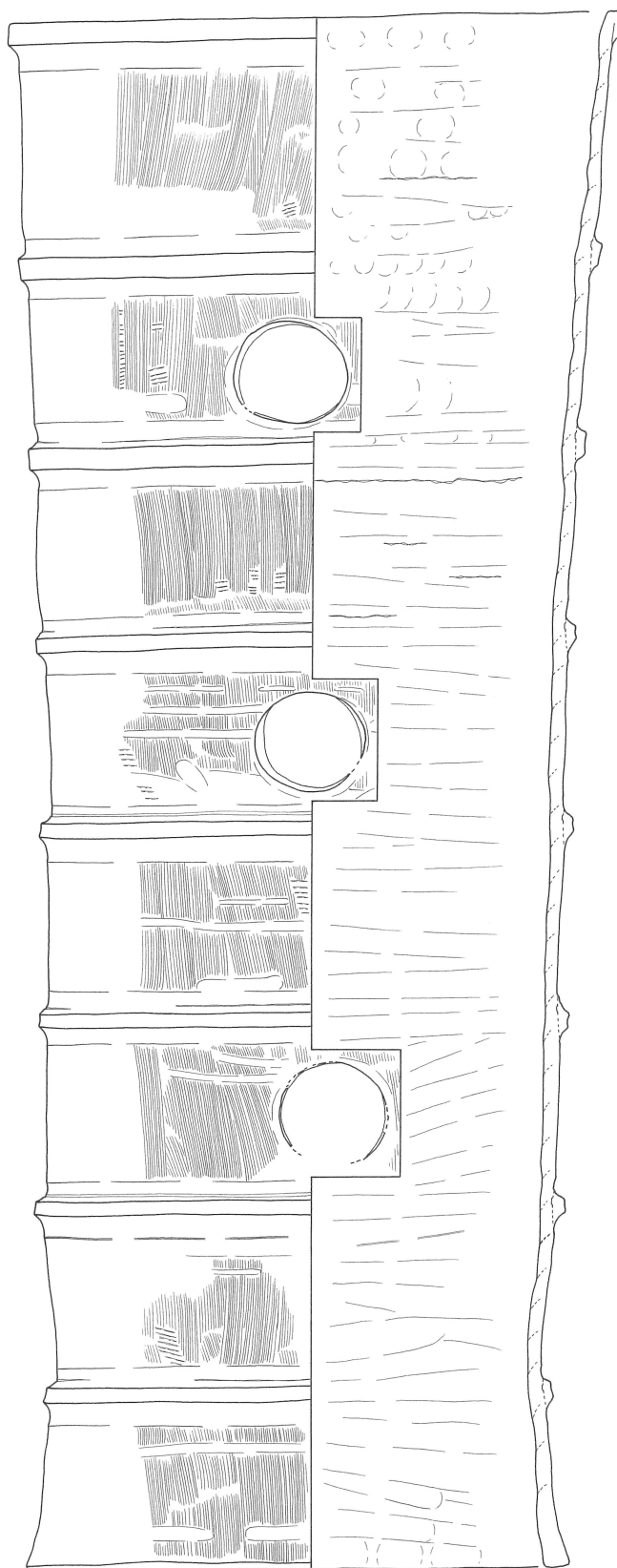


第36図 宇度墓 出土品実測図(9) 大型埴輪(1/6)

19～23は外面の最終調整がタテハケで、同一のハケメをもち、突帯の断面形状も似ることから同工品と判断される。口縁部は外反する形状で(19)、突帯設定には二重凹線がもちいられている(20)。24・25は同一個体と推測され、細く突出した突帯が特徴的である(24)。

26～31は外面の最終調整がナデとなっているものである。いずれの個体も非常に丁寧なナデがほどこされており、最終調整以前の調整は不明である。おそらく平行タタキのほどこされていたものが多いと思われ、その点では上述した七類型の④と⑤は近い関係といえる。26はジグザグ状のヘラ記号が第4段外面にみられる。29は輪台技法をもたない点が特徴である。31は輪台技法がみられずに第1段高が約9cmと低くなっているが、これは当初、輪台技法をもちいて製作していたものの自重で潰れてしまったのを切取ることによって解消したものと思われる。実際に底面では鋭利なもので切取った様子が観察でき、また第1段外面では縄で縛った痕跡もみられる。したがって、この個体の第1段高を当墓の円筒埴輪の指標としてもちいるのは不適當であろう。

32～43は外面の最終調整がナデであるが、その前にほどこされた平行タタキが残存しているものである。32は第4段外面にヘラ記号のようなものがみられ、輪台技法をもたない点が特徴である。また、32では第3条突帯の下方で板押圧によるものと思われる痕跡がみられる。33は第4～5段内面において一連のストロークでナデのほどこされている点と内面に同心円状の当具痕のみられる点が特徴である。同様に内面で同心円状の当具痕がみられる個体としては36・37がある。40は円筒部～肩部にかけて平行タタキがみられるものの、口縁部では粗いハケがほどこされており、最終調整の方法が異なっている。図示していないが、朝顔形埴輪では口縁部も平行タタキのみられるものが確認されており、40でみられるような調整の変更は製作者の交代を示すのかもしれない。43は底部内面および底面をヘラケズリしている点の特徴である。このような倒立調整をおこなっているものがごくわずかに確認できる。



第37図 宇度墓 出土品実測図(10) 大型円筒埴輪(1/6)

44～49は外面の最終調整が平行タタキとなっているものである。44は第3段外面にヘラ記号がみられ、内面には同心円状の当具痕がみられる。外面の平行タタキはそのほどこされる角度が各段によってまちまちな点が注目される。製作者の作業姿勢を反映したものであろうか。45は第4段の途中で色調が変化しており、ここで使用する粘土が変化したものと判断される。また、第4条突帯の下辺では断続ナデ技法A<sup>(6)</sup>が確認できる。なお、断続ナデ技法Aについては45以外の個体でも確認することができる(図版14-2)。47～49は同一個体の破片である可能性がある。平行タタキを直交させて結果的に格子目状となるようにほどこしている点が特徴である。

50～62は外面の最終調整が格子目タタキとなっているものである。いずれの資料も南造出周辺からの出土である点が注意される。50～59は格子目タタキの原体が共通しているようであり、同工品と思われる。50・51は同一個体であり、貼付口縁となることから大型円筒埴輪になるものと推測される。貼付口縁の剥離した箇所でも格子目タタキがみられる。54・55は同一個体の破片で、朝顔形埴輪となるものである。54では突帯を境にして、色調が黄白色から橙色に変化している。使用する粘土が変化したと思われる。55では1次口縁の外面調整が格子目タタキであるのに対して、2次口縁では平行タタキとなっていて、工具が変化している。製作者が交代したのであろうか。57～59は底部を含む破片であるが、いずれにも輪台技法はみられない点が特徴である。60～62は朝顔形埴輪の同一個体となる破片と考えられ、50～59とは異なる格子目タタキがほどこされたものである。62は肩部～円筒部にかけての破片であるが、突帯にまで格子目タタキがおよんでいるのを確認できる。

63～70は摩滅が顕著なため、最終調整の把握が困難な資料である。71～73は外面にヘラ記号がみられる破片である。74は突帯に刻み目のほどこされたものである。75は底面付近に小穿孔がみられる。

**大型円筒埴輪** 全形のわかるものは79の1点のみで、7条8段構成であることがわかる。通常の円筒埴輪の口径が30～36cm程度であるのに対して、口縁部形状が貼付口縁となるものは口径が40cmを超えており、このような資料を大型円筒埴輪とする。また、突帯間隔も15cm超となっており、通常の円筒埴輪よりも広がっている。出土位置はおもに造出周辺であり、造出上面や埴輪列の要所において使用されたものと考えられる。また、蓋形埴輪が近くから出土することも多いことから、蓋形埴輪を載せていた可能性が高い。このような限定的な使用法は小奈辺陵墓参考地においても確認できる(本誌第62号〔陵墓篇〕参照)。似たような使用法が連綿と続いていた可能性が考えられる。ここで紹介する76～79のほかに2、50も大型円筒埴輪となる。外面の最終調整は通常の円筒埴輪と同様に多種多様であり、円筒埴輪生産のなかで製作されたものと推測される。

76は口縁部であるが、貼付口縁は折返すことで成形されていることが断面の観察から明らかである。外面の最終調整はC種ヨコハケであろうか。77は外面の最終調整がタテハケである。突帯上に平行タタキの痕跡が確認できることから、突帯のもととなる粘土紐の圧着を平行タタキによっておこなっていたものと推測される。78は外面の最終調整がナデであるものの平行タタキが一部に残存している。底部に輪台技法はみられない。79は器高129cmである。外面の最終調整はタテハケである。タテハケの前には平行タタキをほどこしていたことが一部で確認できる。また、横方向のナデも確認できるが、これは突帯設定時についてしまったものと判断される。突帯設定は凹線である。

**形象埴輪** 80～130は形象埴輪の破片である。今回の調査において形象埴輪が出土した位置は南北の造出周辺に集中している。形象埴輪はすべて王陵系に属するものと判断される。

80～82は盾形埴輪の破片で、同一個体のもと考えられる。内区には菱形紋が充填され(82)、外区には内向きの鋸歯紋が配されていたようである(81)。いずれも赤色顔料の塗布が顕著であり、焼成前に塗布されたようにもみえる。須恵質ではないものの、非常に硬質な焼成となっている。

83は器種不明である。鱗のようにもみえるが、やや厚手である点や円筒埴輪に鱗の剥離痕が観察できないことを踏まえると当墓に鱗付円筒埴輪が存在していた可能性は低いと思われる。

84～87は靱形埴輪の破片である。背負板部分には直弧紋風の線刻がほどこされている(86・87)。

88・89は甲冑形埴輪(短甲)の破片で、同一個体となる可能性がある。鋳留ではなく革綴表現となっている点の特徴である。90・91は草摺部分の破片で、別個体である。91の草摺の裾部分は粘土紐を積上げた後にさらに外側に粘土を付加して成形していることがわかる。90にみられるハケメは95～97の蓋形埴輪でみられるハケメと同一のようである。このハケメは王陵系の円筒埴輪(1～4)のものとは一致しない。

92～106は蓋形埴輪の破片である。92～98は立飾部の破片である。ほどこされた線刻はいずれもほぼ同種の紋様となっている。同じ製作者によるものがそれぞれの造出上に設置されていたようであり、円筒埴輪の状況を加味すれば墳丘本体の築造から間隔をあけて造出が付加されたとは考えがたい。98は立飾部の軸部分の破片で、99・100は笠部の軸受部分である。101～106は笠部の笠部分の破片である。笠部の大きさは大小二種類存在したようである。105は大型円筒埴輪(79)の上に乗っていたと推測される破片である。笠部分には三本一組の線刻によって笠表現をほどこすことが基本であったようである。

107は北造出からくびれ部にかけて設定された第13トレンチから出土した圀形埴輪である。平面形は約60cm×約45cmの長方形に復元可能であり、鉤状に屈曲する部分は存在しない。上部には三角形の突起が全周していたものと推測される。出入口は長辺側に一箇所確認できる。また、四面ともに裾部の中央付近に半円形の挟りがみられる。突帯は裾廻りに一条、三角形突起の下方に近接した二条を確認できるが、剥落してしまっているものが多い。

108～130は家形埴輪の破片である。108～113は第5-1トレンチから出土した二階建となる大型の家形埴輪である。入母屋造であろうか。108は堅魚木で、屋根には網代表現がみられる。112は一階から二階にかかる部分で、庇が剥離しており、内面では二回の床部分が剥落している。113の裾廻り突帯には特徴的な線刻がみられる。114～118も第5-1トレンチから出土したもので中型の二階建となる家形埴輪である。入母屋造もしくは切妻造であろう。114は破風の破片である。屋根には網代表現がみられ(115)、壁には綾杉紋がみられる(117)。庇部分は断面L字状となっているが(117)、裾廻り突帯は断面台形である(118)。119～121は第12-1トレンチから出土した大型の家形埴輪となる破片である。裾廻り突帯の線刻は113・130などとも共通する(121)。おそらく同工品であろう。122・123は第12-1トレンチから出土した中型の家形埴輪である。裾廻り突帯の下部に粘土を入れて補強している点の特徴である。このような手法は五條猫塚古墳の家形埴輪などでもみられる。124は第12-1トレンチから出土した中型の家形埴輪で、白っぽい色調となるものである。125～128は第12-1トレンチから出土した小型の家形埴輪で、棟上には鱗飾りが伴い(125)、壁には綾杉紋がみられる(127)。129・130は第13トレンチから出土した大型の家形埴輪の破片である。裾廻り突帯にみられる線刻は、113・121と同一である(130)。これらはおそらく同工品であろう。

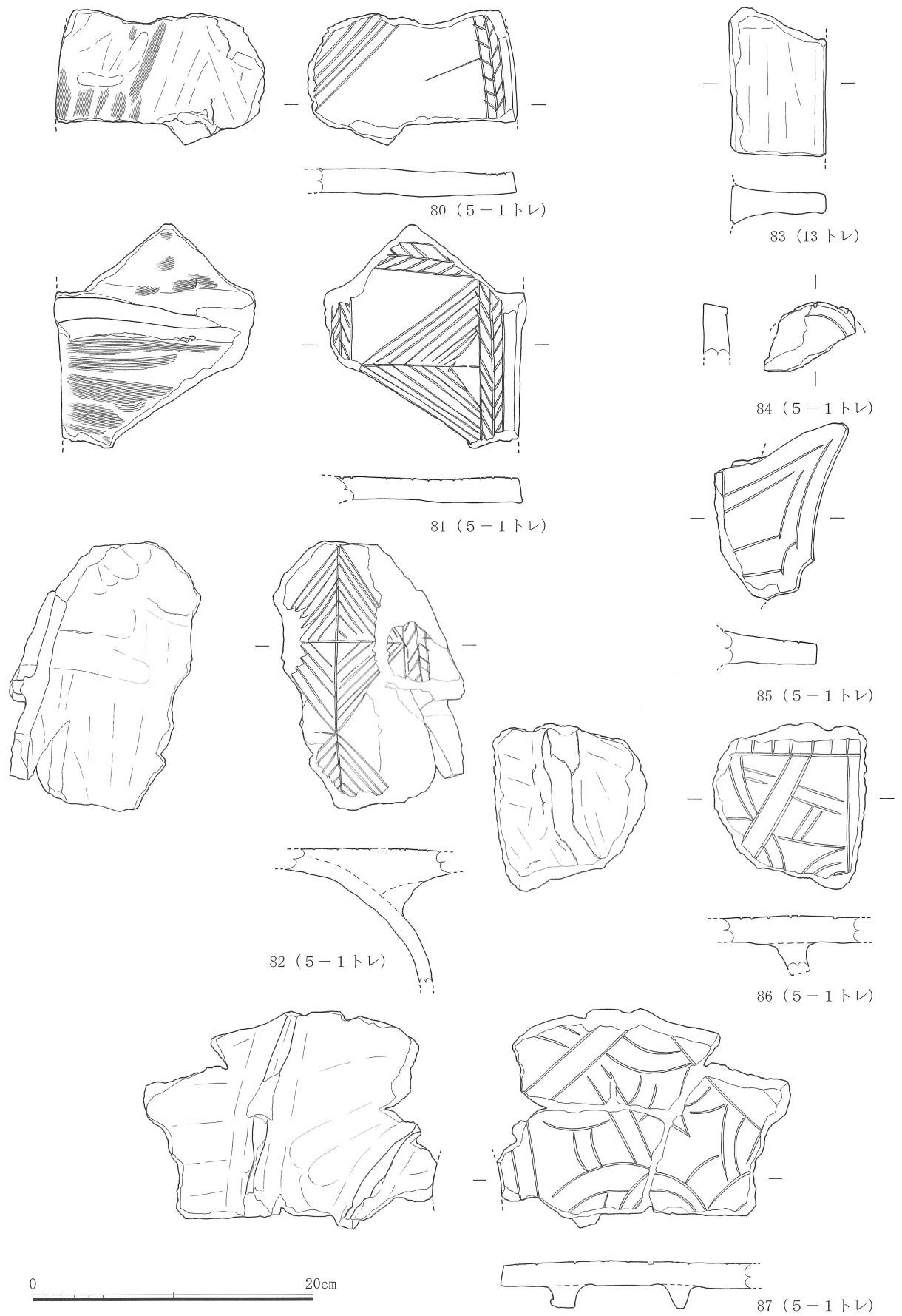
**小結** 紙幅の都合もあり、大まかに当墓出土の埴輪をみてきた。当墓はいわゆる淡輪系埴輪をもつことで著名であるが、その概略は示せたのではないかと思う。すなわち、円筒埴輪にはわずかに王陵系が含まれるものの、それ以外は淡輪系で構成されるようである。また、形象埴輪はすべて王陵系のものといえる。ただし、何らかの形で須恵器系譜の技術がみられるという点で淡輪系とただけであり、輪台技法がすべてにおいて採用されているわけではなく、何をもって淡輪系埴輪とするかという点は検討の余地が残る。上でも述べたように、当墓における王陵系以外の埴輪は須恵器製作者が埴輪生産に取り込まれたというよりは、埴輪製作者が須恵器の製作技術を取り入れてしまった結果という状況を想像したほうがまだ実態になじむように思われる。

なお、当墓の埴輪については王陵系の円筒埴輪から判断して、TK216あるいはON46型式段階頃の所産と考えられる。ただし、王陵系の個体ではないものの、断続ナデ技法Aが一部でみられる点は注意される。

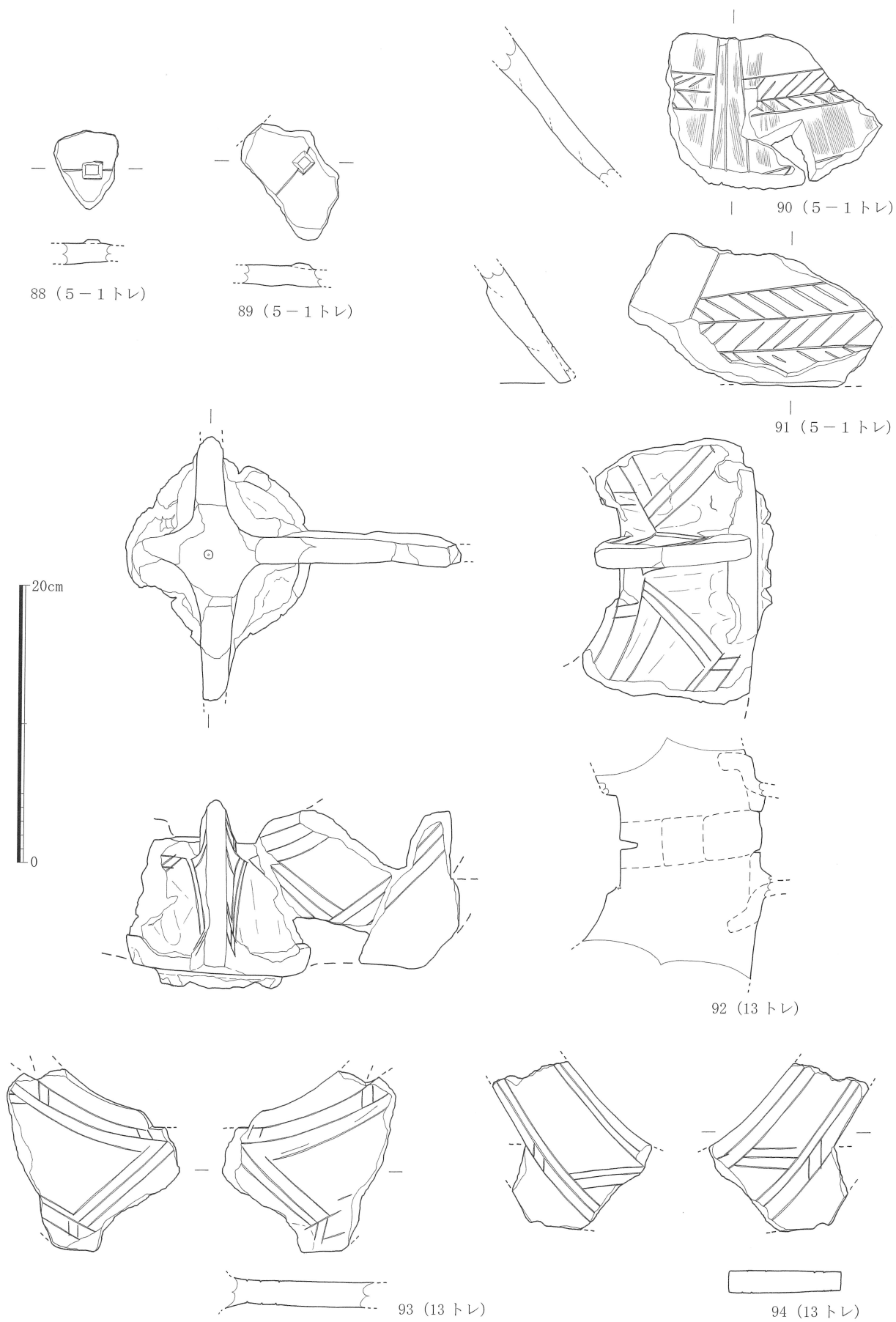
また、調査後、一部で南造出が墳丘築造時には存在しなかった可能性を指摘する向きもあったが、同工品の出土位置のあり方からみれば、左右の造出ともに墳丘本体とともに築造されたものと判断される。(加藤)

## (2) 土師器

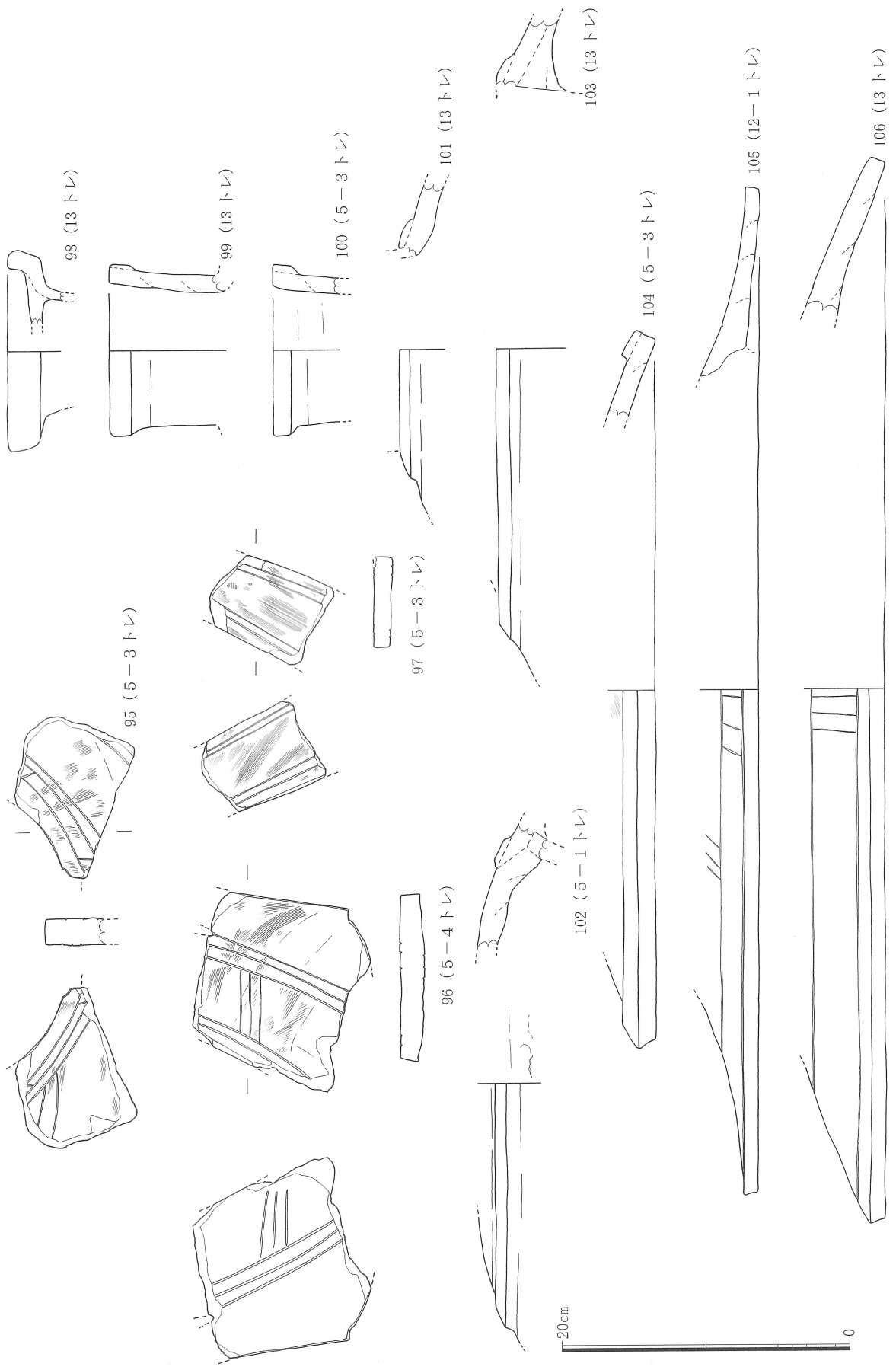
今回の調査では、土師器を含む可能性がある土器片が数十点確認されており、縄文土器等については後に述べるとおりである。一方で、多くの破片はいずれもある程度摩滅した細片であり、明らかな土師器として



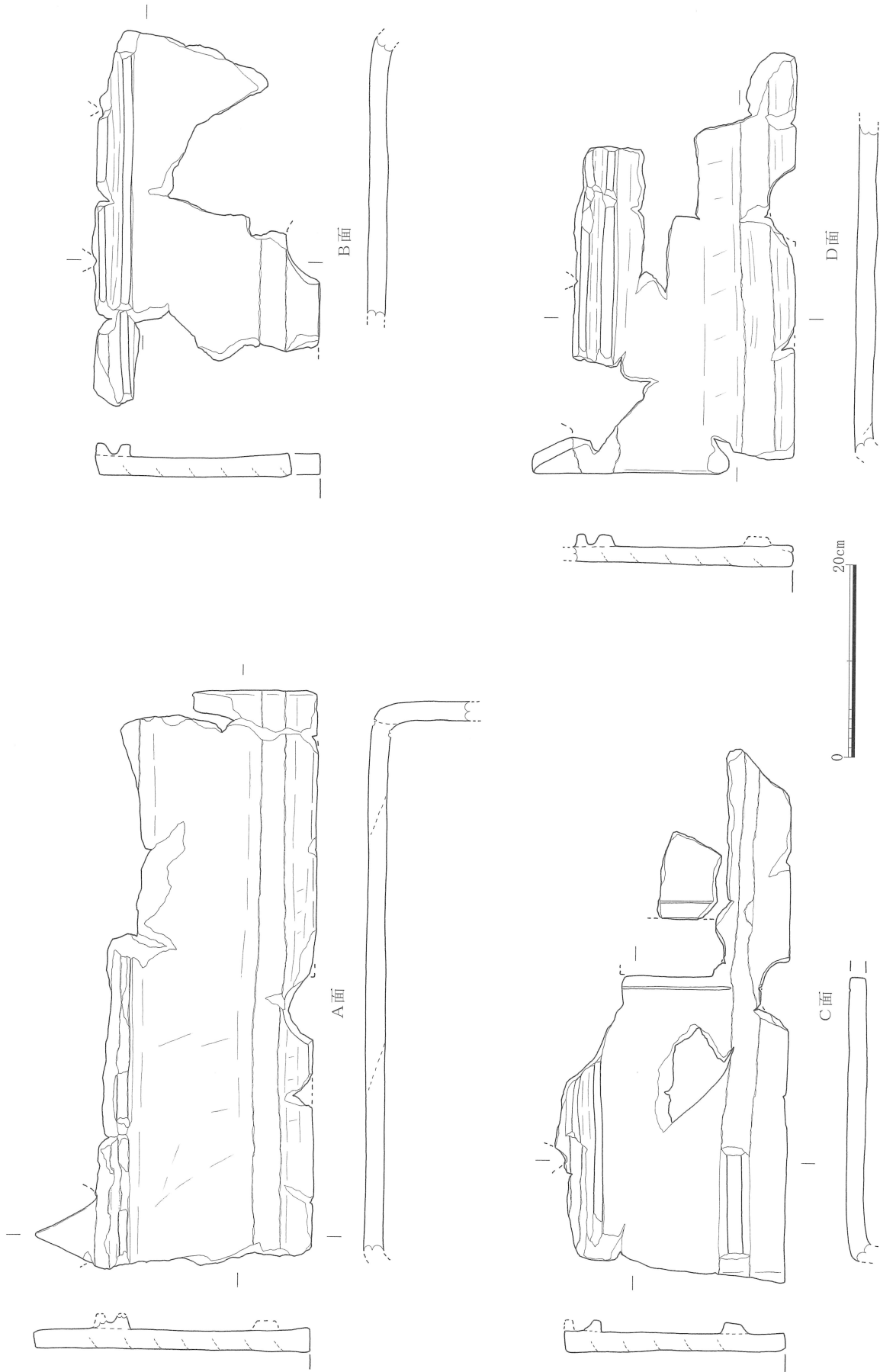
第38図 宇度墓 出土品実測図(11) 盾形埴輪・靱形埴輪・不明形象埴輪(1/4)



第 39 図 宇度墓 出土品実測図 (12) 甲冑形埴輪・蓋形埴輪 (1/4)

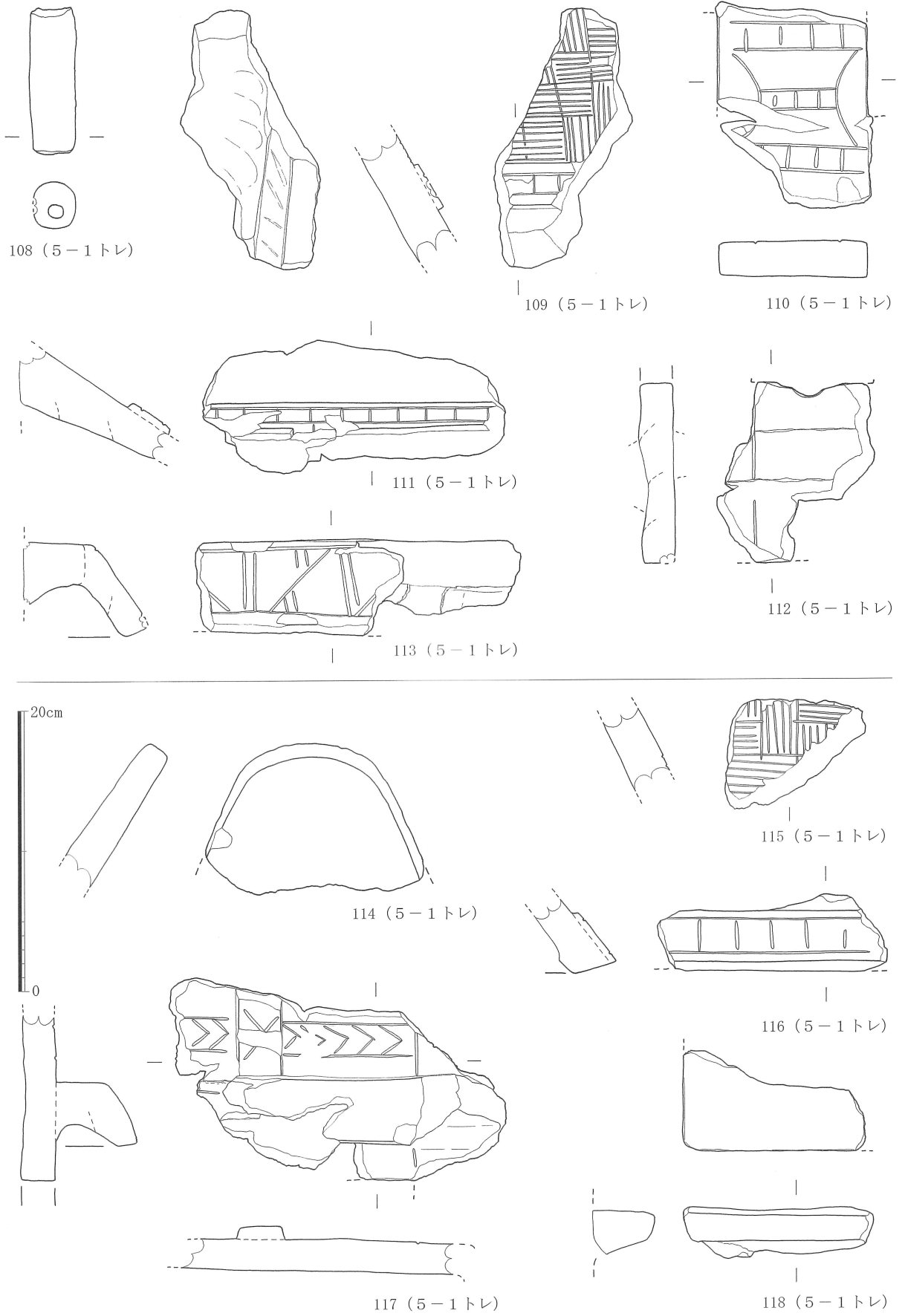


第40図 宇度墓 出土品実測図(13) 蓋形埴輪(1/4)

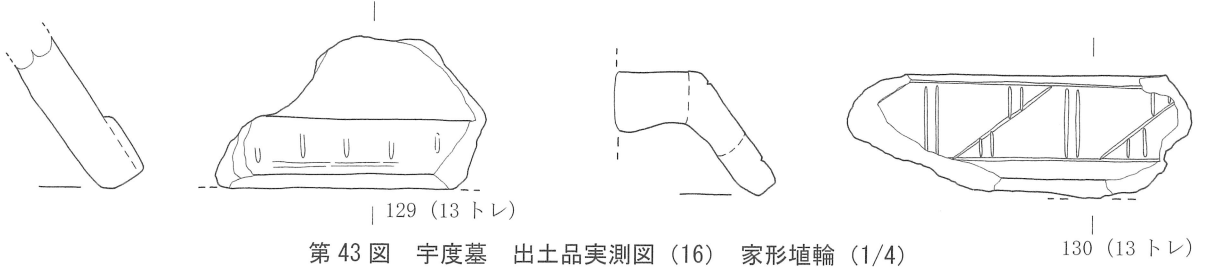
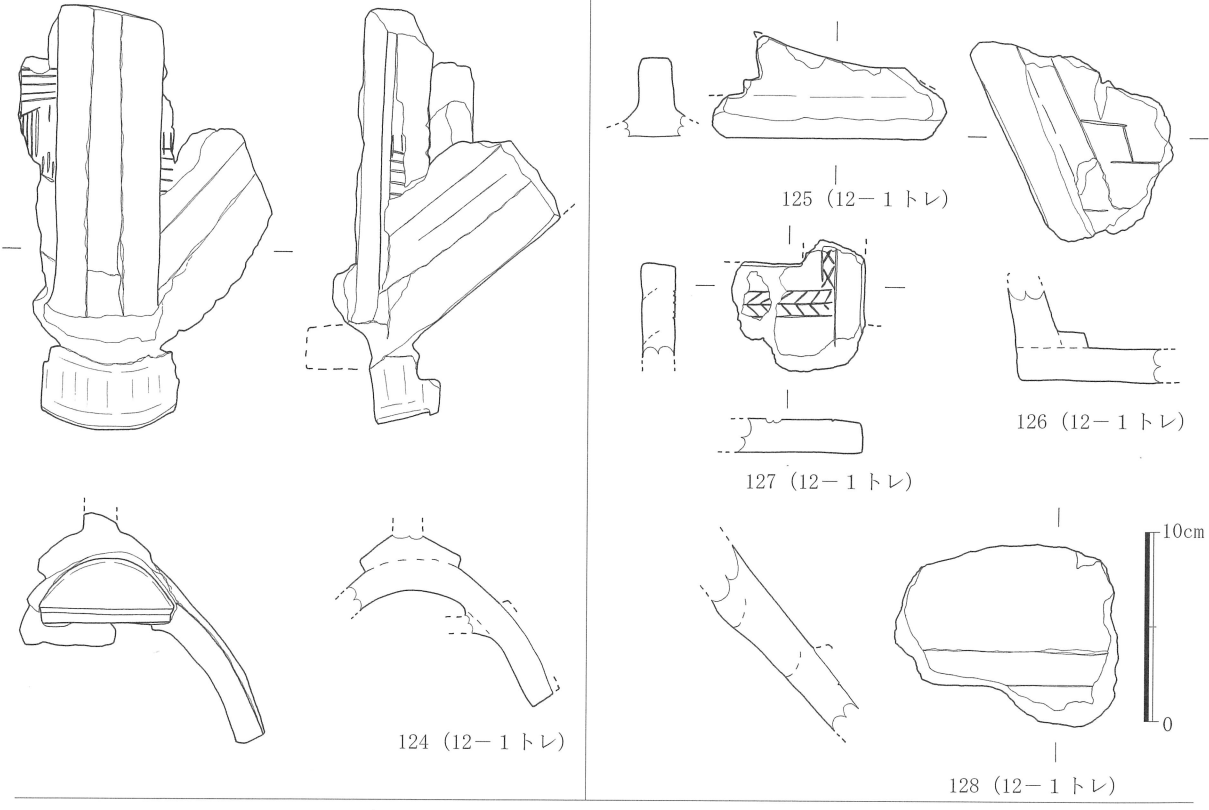
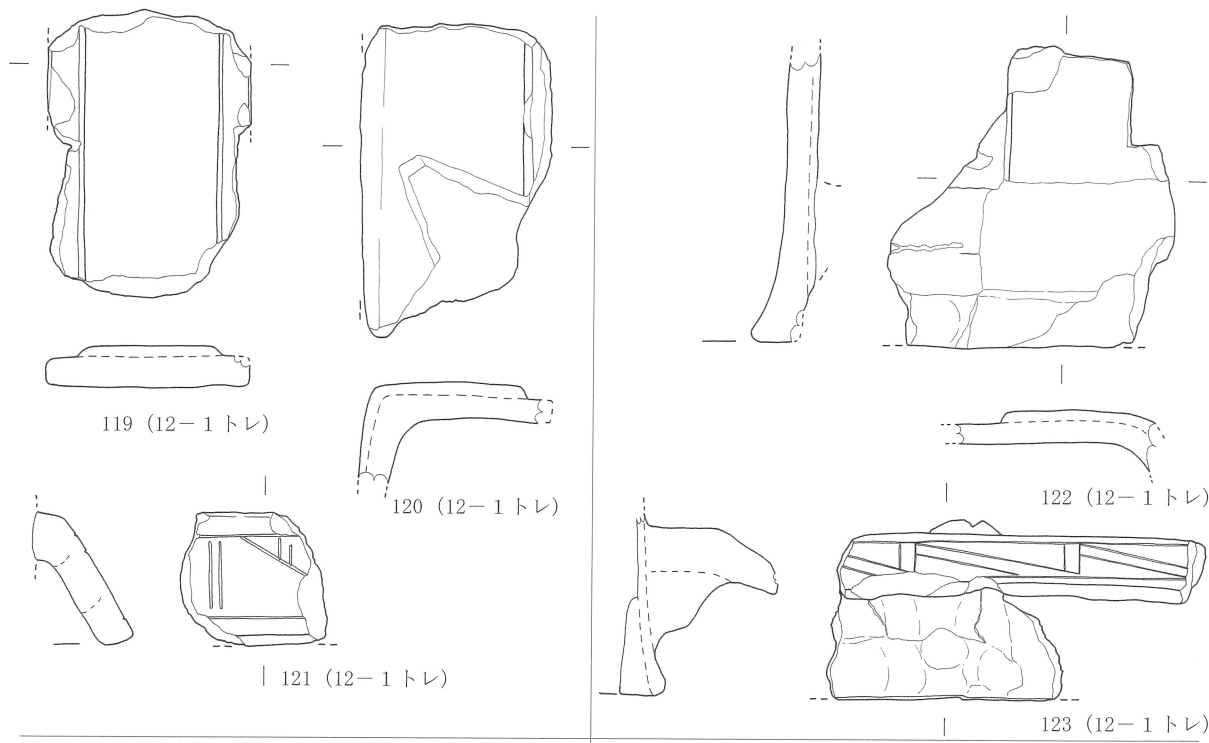


107 (13ト)

第41図 宇度墓 出土品実測図 (14) 冪形埴輪 (1/6)



第 42 図 宇度墓 出土品実測図 (15) 家形埴輪 (1/4)



第43図 宇度墓 出土品実測図 (16) 家形埴輪 (1/4)

抽出するには至らなかった。このように、明確に当墓に伴うと考えられるような土師器は確認されなかった。(清喜)

### (3) 須恵器 (第 44 図、図版 18)

今回の調査で出土した須恵器は 7 点である。その全てが水簸した精良な胎土ではなく、埴輪のように砂粒を多く含んでいる。砂粒のほか、胎土に少量の赤色粒を含む。器種は高坏、器台、甕で、高坏は北くびれ部と北造出、器台は南造出、甕は北くびれ部と墳丘西端中央付近で見つかった。この内、甕については残存状況も良くないため評価が難しいが、高坏が北造出周辺で出土および採集されている点、器台が残存状況の良い南造出で出土している点は、墳丘での須恵器使用法を考える上で重要と思われる。ここでは、高坏、器台、甕の順に出土した須恵器の概要を記す。

**須恵器の概要** 131 は、第 13 トレンチ(北くびれ部)の西側表土より出土した残存高 4.1cm の高坏脚部片である。外面調整には上部に坏部との接合時のナデを施すが、下部は磨滅のため調整が不明である。内面調整にはナデを施す。色調は明黄褐色で、焼成はやや不良である。平成 24 年度に L 地点で採集された 132 と類似する。

132 は、平成 24 年度に北造出の L 地点で採集された残存高 3.5cm の高坏脚部片である。外面調整には上部に坏部との接合時のナデを施し、下部に回転ナデを施す。内面調整にはナデを施す。色調は明黄褐色で、焼成はやや不良である。平成 26 年度に第 13 トレンチの表土より出土した 131 と類似する。

133 は、第 5 - 3 トレンチ(南造出)の斜面流土より出土した残存高 3.7cm の器台口縁部片である。復元径は約 28cm であるが、小片のため数値の信頼度は低い。口縁部下方に 2 条の低い突帯をもつ。外面調整、内面調整は自然釉のため不明である。色調は内外面が黒褐色、断面が赤褐色で、焼成は良好である。

134 は、第 5 - 2 トレンチ(南造出)の頂部流土より出土した残存高 3.5cm の器台受部片である。上方に波状文を施し、下方に 2 条の低い突帯をもつ。外面調整、内面調整は自然釉のため不明である。色調は内外面が黒褐色、断面が赤褐色で、焼成は良好である。

135 は、第 5 - 2 トレンチ(南造出)の斜面流土より出土した残存高 3.7cm の器台受部片である。外面調整には下部に脚部との接合時のナデを施すが、上部および内面の調整は不明である。脚部との接合部には、接合し易いよう同心円状と放射状の切り込みが刻まれている。色調は外面が黒褐色、内面が灰色で、断面の一部は赤褐色になっている。焼成は良好である。

136 は、第 13 トレンチ(北くびれ部)の西側表土より出土した残存高 2.6cm の甕口縁部片である。内外面調整にはナデを施す。色調は灰白色で、焼成はやや不良である。小片のため、甕以外の可能性もある。

137 は、第 8 トレンチ(前方部西端中央)の下部トレンチ表土より出土した残存高 1.6cm の甕口縁部片である。外面調整にはナデを施すが、内面調整は不明である。色調は淡黄褐色で、焼成はやや不良である。小片のため、甕以外の可能性もある。

**須恵器の型式** 宇度墓出土ないし採集の須恵器はどれも小片であるため、型式を判断するのが難しいものの、明らかに年代の隔たる須恵器が混じっておらず、胎土に砂粒が多量に含まれる物がほとんどであることから、ある程度時間的にまとまりのある物と考えて良いだろう。これらの須恵器を田辺昭三の陶邑編年<sup>(7)</sup>

および陶邑出土資料と比較検討することで、およそその帰属型式を考えてみたい。なお、現在は田辺昭三の陶邑編年による最古型式、TK73 型式よりも明らかに古い須恵器の一群が確認されており、ここではそれらを他の研究者と同じく、一群の標識となる窯跡名より TG232 型式と呼んでおく<sup>(8)</sup>。

高坏については、脚部しか残っていないものの、131・132 とともに坏部との接合部から脚部が細くなっており、接合部から下方へのスカシも無いことから、TK208 型式期の資料よりも古く、131・132 とともに脚上部が筒状ではなく、くびれてすぐに広がることから、TG232 型式期の資料よりは新しいと推測可能である。

器台については、133 の口縁端部がやや丸くなっており、上下につまみ上げるような形状でないことから、TK208 型式期の資料よりも古く、133 の口縁部下方の 2 条突帯が低く、その直下に装飾が見られないこと、134 の受部には波状文と 2 条突帯があるが、135 の受部下方から脚部との接合部にかけては装飾が見られな

いことから、装飾の省略がある程度型式の新古に関係していると考えた場合、TK73型式よりは新しいと推測可能である。

甕については、136・137ともに口縁端部を上下につまみ上げるような形状でないことから、TK208型式期の資料よりも古く、口縁端部形状が丸くないことから、TK73型式期の資料よりは新しいと推測可能である。

上記の検討より、宇度墓出土および採集の須恵器型式については、TK73型式より新しくTK208型式より古い、須恵器定型化以前のTK216型式ないしON46段階と考えられる。ただし、小片からの推測であるため、今後より良好な資料が得られた場合には訂正も有り得る。

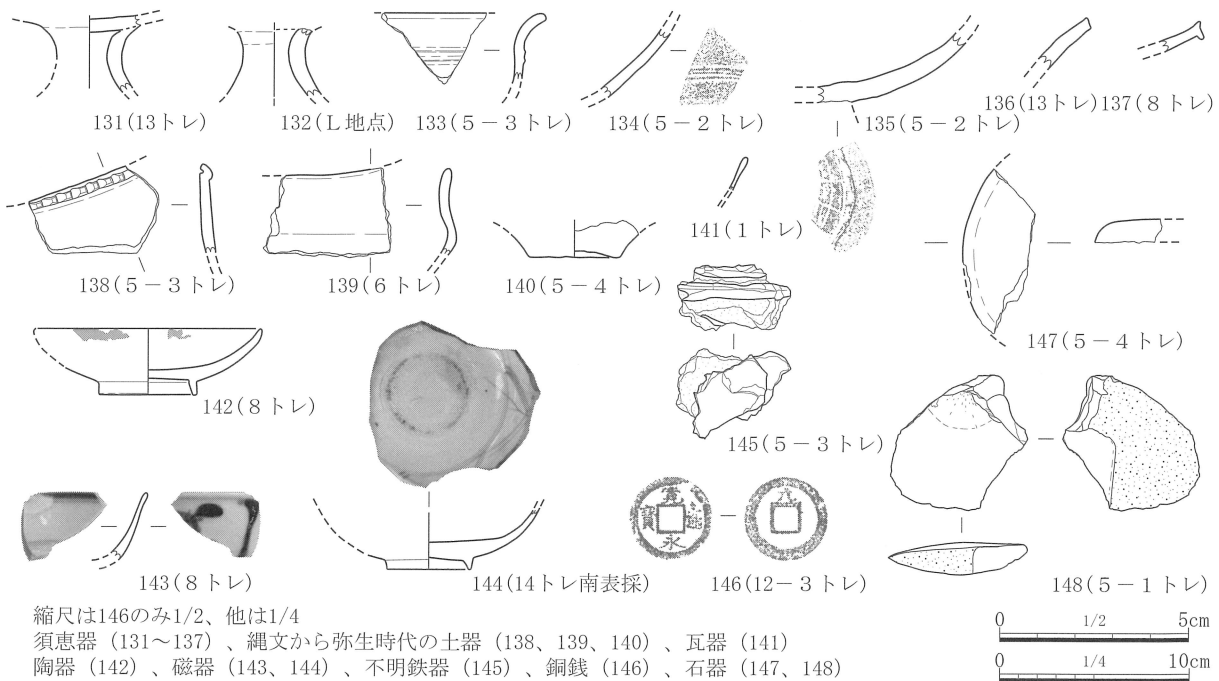
**須恵器の胎土** 宇度墓と同じく、埴輪のように多量の砂粒を含む須恵器を出土した古墳としては、奈良県の宇和奈辺陵墓参考地が有名である。宇和奈辺陵墓参考地の須恵器に認められる顔料塗彩やハケメなどは、宇度墓の須恵器には見られないが、形式的にはほぼ同じ頃のものと考えられる。宇和奈辺陵墓参考地出土須恵器の検討をおこなった植野浩三は、埴輪工人と須恵器工人が共存して埴輪および須恵器生産にかかわった結果、顔料塗彩、ハケメ、多量の砂粒を含む胎土をもつ須恵器が作られたと考えた<sup>(9)</sup>。

宇度墓の須恵器は明らかに砂粒が多く、埴輪と酷似する胎土を持つものがあり、逆に宇度墓の埴輪の中には須恵器のように水簸した精良な胎土をもち、須恵器の技法(タタキ)を用いるものがあることから、宇和奈辺陵墓参考地だけでなく、先の植野や川西宏幸<sup>(10)</sup>も想定した通り、宇度墓においても埴輪工人と須恵器工人が共存し、土や窯を共用していたと考えられる。

宇度墓の須恵器がどこで生産されたのかについては、窯跡等が見つかっていないため明らかでないが、川西によると和歌山県楠見遺跡出土須恵器の胎土に含まれる赤色粒は、楠見遺跡出土土器の他にも紀ノ川北岸の古墳出土埴輪や宇度墓を含む淡輪地域の古墳出土埴輪の胎土にも認められるとのことである<sup>(11)</sup>。宇度墓の須恵器胎土にも赤色粒が含まれている。そのことから、楠見遺跡で生産されたかまでは分からないが、宇度墓の須恵器は少なくとも紀ノ川北岸より淡輪周辺で生産されたと考えて大過ないだろう<sup>(12)</sup>。(横田)

#### (4) その他の遺物 (第44図、図版18)

ここでは、宇度墓に関係する可能性がある遺物、宇度墓築造以前の遺物、宇度墓築造以後の遺物の順に述べる。なお、遺物ではないが、墳丘を構成する一部の可能性がある白色円礫を後円部頂で11個採集した(図



第44図 宇度墓 出土品実測図 (17) 土器・陶磁器・金属器・石器 (1/4、1/2)

版 23)。白色円礫は竖穴系埋葬施設上より出土することが多い。白色円礫の長径は約 2 から 7 cm である。

**宇度墓に關係する可能性のある遺物** 145 は、第 5 - 3 トレンチ(南造出)の斜面流土より出土した残存長 6 cm、残存幅 4.7cm の器種不明鉄器である。現状では鑄と砂礫によって本来の形状を知ることは難しく、元々太かったものが腐食によって薄く分割されたものか、元々複数の破片だったものが鑄で固まったものか判断がつかない。元々太いものであったならば、現状の厚みより鑿のような道具であった可能性があり、元々複数の破片であったならば、薄い板状の鉄片が少なくとも 3 片付着した状態である。詳細については、X 線撮影によって鑄部分を透過してから検討したい。

**宇度墓築造以前の遺物** 宇度墓築造以前の遺物としては、南造出を中心に縄文時代晩期から弥生時代初め頃にかけての土器、石器が出土した<sup>(13)</sup>。上記のほか、縄文土器や弥生土器の小片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかつた。

138 は、第 5 - 3 トレンチ(南造出)の斜面流土より出土した残存高 4.3cm の浅鉢の口縁部片である。口縁部は波状口縁で、口縁端部外面直下に突帯文、口縁端部内面に一条の沈線がある。内外面調整は磨滅のため不明であるが、外面に一部ミガキの痕跡が残る。色調は暗黄褐色で、焼成はやや不良である。

139 は、第 6 トレンチ(前方部南側)の斜面流土より出土した残存高 3.3cm の浅鉢の口縁部片である。口縁部は波状口縁である。外面調整にはナデを施し、内面調整には上部にナデ、屈曲部にミガキを施す。色調は暗黄褐色で、焼成はやや不良である。

140 は、第 5 - 4 トレンチ(南造出)の頂部流土より出土した残存高 2 cm の鉢底部片である。内面調整は破面のため不明であるが、外面調整はナデを施す。底部に草の圧痕が残る。色調は黄褐色で、焼成は良好である。

147 は、第 5 - 4 トレンチ(南造出)の斜面流土より出土した磨製石器片である。元々は円形だったと思われるが、残存部分が少ないため、詳細な形状復元は困難である。残存部分から円形だった場合の直径を復元すると、約 14.6cm である。素材は節理によって水平に割れやすい石材で、破面以外は丁寧に研磨されている。色調は乳白色で、光が当たると粒子に反射して煌めく。小片のため、宇度墓築造以前の遺物か厳密には分からないが、環状磨製石斧の可能性はある。

148 は、第 5 - 1 トレンチ(南造出)の斜面表土より出土したサヌカイト製の打製石器である。バルブとフィッシャーは明瞭だが、リングはやや不明瞭である。その形状から、手でバルブ付近を持ち、何かを削ることや摘み取ることに使用されたものと考えられる。

宇度墓の境界外、周濠西部より南側では、昭和 55・56 年度に大阪府教育委員会が淡輪遺跡の発掘調査をおこなっており、その際に縄文時代後期の遺構を検出した<sup>(14)</sup>。宇度墓と淡輪遺跡の位置関係より、今回の調査で出土した土器と石器は、淡輪遺跡から広がる集落のもので、宇度墓造営時に遺物を含んだ土ごと墳丘盛土として使われたため、墳丘上より出土したものと考えられる。

これまで淡輪遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代初め頃の遺物は出土していなかった<sup>(15)</sup>。今回の調査によって、淡輪遺跡の範囲が従来考えられていたよりも広いことがわかり、その時期についても新たな知見を得ることができた。

**宇度墓築造以後の遺物** 宇度墓築造以後の遺物としては、中世の瓦器碗および近世の陶磁器、瓦、銅銭が出土した。

141 は、第 1 トレンチ(後円部東端中央)の葺石検出時に出土した残存高 1.7cm の瓦器碗口縁部片である。内外面調整はナデを施す。色調は灰色で、焼成は良好である。形状より、和泉型瓦器碗<sup>(16)</sup>の可能性はある。

142 は、第 8 トレンチ(前方部西端中央)の上部トレンチ表土より出土した口縁部径 12cm、高台径 5 cm、器高 3.5cm の陶器皿である。内外面調整は不明であるが、高台は削り出しによるものと考えられる。色調は胎土が褐色で、高台内面を除いて灰白釉と緑釉がかかっている。緑釉は灰白釉の上からかかり、口縁部で確認できる。焼成は良好である。口縁部に煤が付着していることから、灯明皿として使われていたことがわかる。

143 は、第 8 トレンチ(前方部西端中央)の下部トレンチ表土より出土した残存高 3.5cm の磁器碗口縁部片で

ある。内外面には染付の後、透明釉を施す。色調は胎土が灰色で、染付は暗青色である。口縁端部が外反することから、近世末頃のものと考えられる。

144は、第14トレンチ(後円部北側)より南側の墳丘崖面で採集した残存高3.2cmの磁器碗底部片である。内外面には染付の後、透明釉を施す。色調は胎土が灰色で、染付は淡青色である。

146は、第12-3トレンチ(北造出)の表土より出土した直径2.1から2.2cmの寛永通宝である。全体が腐食しており、残存する厚さは1mm以下で、銅に鉄分を含むためか一部がやや赤くなっている。背面に「元」の字があることから、寛保元年(1741年)に高津新地で铸造された、いわゆる高津銭と考えられる。(横田)

## 4 調査の所見

### (1) 墳丘の規模と構造について

新規に作成した墳丘測量図と本調査で得た所見を元に、墳丘の規模と構造について述べ、墳丘本来の形状と規模の復元を試みる(第45図)。なお造出については次の「(2)造出について」で詳細を述べるため、ここでは主に前方部と後円部について記述する。墳丘の主軸については、墳丘測量図より読み取った後円部と前方部の墳丘第3段目中心を結んだラインとする。

**墳丘主軸長** 墳丘の主軸長について、主軸上に設定した第1トレンチと第8トレンチの成果からは、葦石基底石が検出されず、墳丘裾が確定できなかったため、正確な数値は不明である。ただし、第1トレンチの東端付近で緩やかだった地山の傾斜が標高約18.2mで急に上がる箇所は、後円部築造時に地山を整形した痕跡の可能性があるが、第8トレンチの西端付近で緩やかだった地山の傾斜が標高約17.9mで急に上がる箇所は、前方部築造時に地山を整形した痕跡の可能性がある。これらの傾斜変化点を墳丘裾付近と評価した場合、本来の主軸長は現状の約173mよりも大きく、約180mと推定可能である。

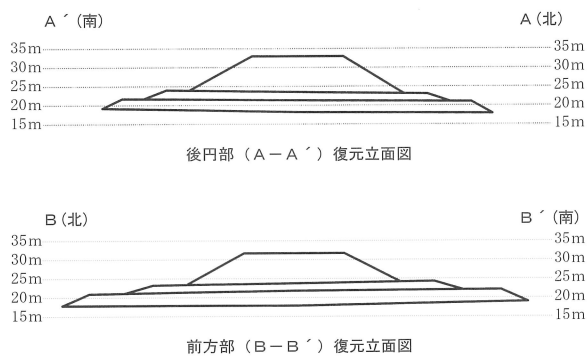
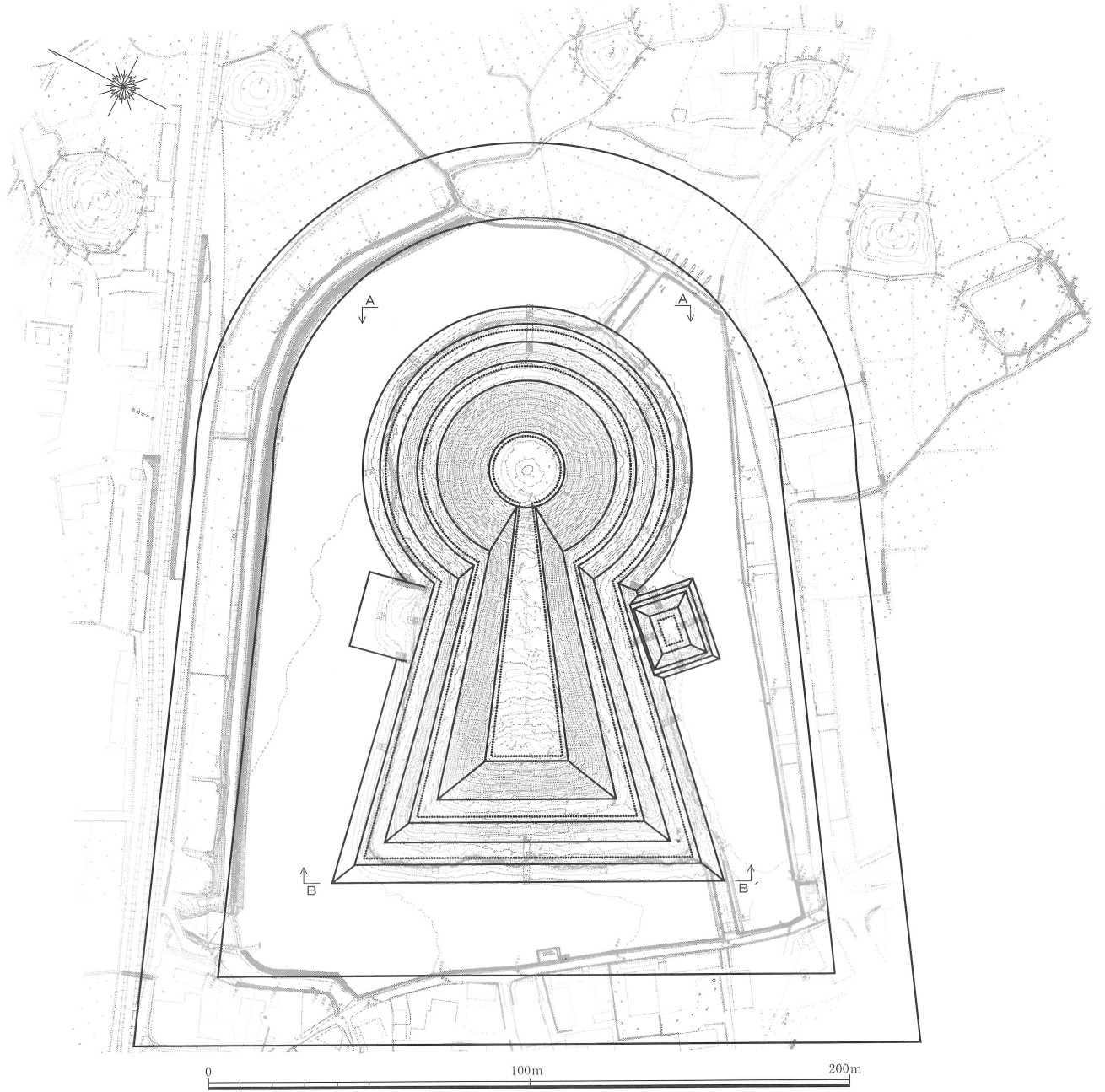
**後円部最大幅** 墳丘主軸と直交する箇所に設定した第3・14トレンチの成果からは、墳丘裾の確定ができなかったため、後円部最大幅の正確な数値は不明である。ただし、くびれ部に設定した第4・13トレンチで検出された後円部裾付近と第1トレンチの地山傾斜変化点の3箇所を通るように、葦石が露出し非常に残存状況が良い後円部第3段目の中心より円を描くと、直径約102mとなることから、本来の後円部最大幅は約102mと推定可能である。

**前方部最大幅** 前方部に設定した第7・9・10・11トレンチでは、表土直下が地山となっており、前方部本来の形状についての手がかりは得られなかった。ただし、前方部南側の第6トレンチでは標高約19mに地山の傾斜変化点が認められ、前方部西側の第8トレンチも標高約17.9mに地山の傾斜変化点が認められる。

また、前方部第1段目テラス上の埴輪列について、第5-1・6トレンチで検出したほか、前方部第1段目テラス南西隅付近でも確認できたことから、3箇所を通過する直線を引くことができ、これが前方部南側の埴輪列復元ラインとなる。多くの古墳例から考えて、前方部の埴輪列復元ラインは、前方部南側の裾とほぼ平行していると考えて大過ないだろう。このことと第6トレンチで検出した地山の傾斜変化点を合わせて考えると、第1段目南側斜面裾の想定復元ラインを描くことが可能である。

さらに、主軸と直交させて第8トレンチの地山傾斜変化点を通過する直線を引くと、これが第1段目西側斜面裾の想定復元ラインとなる。この第1段目西側斜面裾の想定復元ラインと南側斜面裾の想定復元ラインが交わる場所が、前方部の南西角と考えられ、主軸からの距離は約61mである。前方部南西角を主軸より北側へ反転させると、第1段目西側斜面裾は約122mになるが、これにより前方部最大幅は約122mと推定可能である。

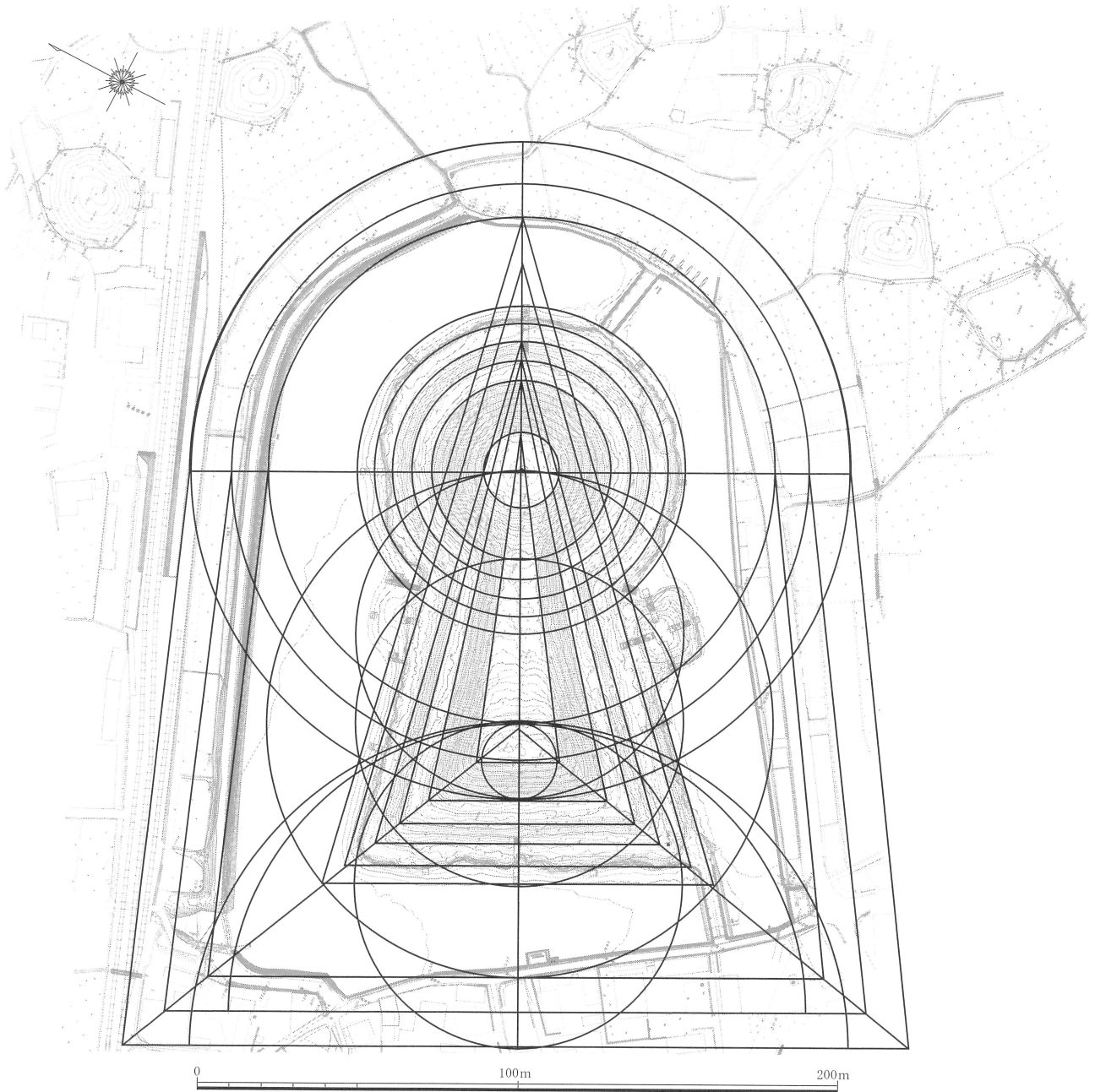
**第1段目** 第1段目については、斜面途中までは地山の削り出しで、その上に盛土をして造られていることが、調査の結果明らかとなった。裾の高さは場所によって大きく異なり、後円部では、第1トレンチの傾斜変化点で標高約18.2m、第4トレンチの葦石裾付近で標高約19.2m、第13トレンチの傾斜変化点で標高約17.9mである。南造出では、第5-2トレンチの傾斜変化点で標高約19.3m、北造出では、第12-2トレン



		復元値(調査後)	読取値(調査前)
第1段目	主軸長(墳丘長)	180	173
	後円部最大幅	102	93
	前方部最大幅	122	111
	高さ	2.5~4	2~2.5(主軸上)
	テラス幅	5.7~7(主軸上)	不明
第2段目	斜面角度	29~35(主軸上)	不明
	主軸長	157	同左
	後円部最大幅	81	同左
	前方部最大幅	89	同左
	高さ	2~2.7	2.25~2.5(主軸上)
第3段目	テラス幅	6.1~7(主軸上)	同左
	斜面角度	21~24(主軸上)	同左
	主軸長	131	同左
	後円部最大幅	56	同左
	前方部最大幅	56	同左
	高さ	4~9(主軸上)	同左
	平坦面幅	12~26	同左
	斜面角度	29~32(主軸上)	同左

単位は斜面角度のみ「°」、他は「m」

第45図 宇度墓 墳丘復元図 (1/2,000)



第46図 宇度墓 墳丘企画復元図 (1/2,000)

チの葺石裾付近で標高約 18m、第 13 トレンチの葺石裾付近で標高約 17.9m である。前方部では、第 6 トレンチの傾斜変化点で標高約 19m、第 8 トレンチの傾斜変化点で標高約 17.9m である。上記の推定も含めた裾部標高より、墳丘南側と比べて北側裾部が 1 m 程度低いということは明らかである。

裾だけでなく、テラス面の高さも場所によって異なっている。後円部では、第 1 トレンチで標高約 21.3m である。南造出では、第 5 - 1 トレンチで現状の標高約 21.8m だが、テラス上の埴輪列は底部しか残っていないことから、本来のテラス面は標高約 22m と考えられる。前方部では、第 6 トレンチで標高約 22.1m、第 8 トレンチで標高約 21.9m である。調査で確認はできていないものの、後円部から前方部にかけての北側については、等高線から見て標高約 21m 前後にテラス面が確認できる。上記の推定も含めたテラス面標高より、墳丘南側と比べて北側テラス面が 1 m 程度低いということは明らかである。また、主軸上では後円部と比べて前方部が約 0.6m 高くなっている。

裾部とテラス面の標高を検討した結果、南側と北側では1 m程度の比高差があることから、第1段目は南から北へ降る傾斜地となっている地形を反映して斜めになっており、第1段目の高さは約2.5から4 mと幅があることが判明した。

テラスの幅については、等高線の粗密と第1・8トレンチで検出した2段目葺石基底石の存在から、後円部で約5.7m、前方部で約7 mと考えられる。

高さで斜面の幅より傾斜角度は、後円部主軸上で約29度、前方部主軸上で約35度と考えられる。

上記より、第1段目は、主軸長約180m、後円部最大幅約102m、前方部最大幅約122m、高さ約2.5から4 m、テラス幅約5.7から7m、斜面角度約29から35度と推定復元可能である。

**第2段目** 第2段目の裾については、第1段目テラス面の検討から標高約21から22.1mで、墳丘南側よりも北側が低くなっている。第2段目テラス部分は調査をおこなっていないため、等高線の粗密よりテラス面の高さを判断すると、後円部主軸上で標高約24m、後円部南側で標高約24m、後円部北側で約23m、前方部主軸上で標高約24.25m、前方部南側で標高約24m、前方部北側で標高約23.25mである。上記の等高線より推定されるテラス面標高からは、第1段目テラスと同じく、墳丘南側と比べて北側テラス面が1 m程度低いということがわかる。また、主軸上でも第1段目テラスと同じく、後円部と比べて前方部が約0.5m高くなっている。

裾部とテラス面の標高を検討した結果、南側と北側では1 m程度の比高差があることから、第2段目も第1段目と同じく北側へ低く斜めになっているが、第2段目の高さは約2から2.7mと第1段目に比べ幅が小さいことが判明した。

テラスの幅については、等高線の粗密から後円部で約6.1m、前方部で約7 mと考えられる。

高さで斜面の幅より傾斜角度は、後円部主軸上で約24度、前方部主軸上で約21度と考えられる。

上記より、第2段目は、主軸長約157m、後円部最大幅約81m、前方部最大幅約89m、高さ約2から2.7 m、テラス幅約6.1から7m、斜面角度約21から24度と推定復元可能である。

**第3段目** 第3段目の裾については、第2段目テラス面の検討から標高約23から24.25mで、第1・2段目と同じく、墳丘南側よりも北側が低くなっている。第3段目テラス部分は調査をおこなっていないため、等高線の粗密より墳頂部平坦面の高さを判断すると、後円部中心で標高約33m、後円部南側で標高約32m、後円部北側で約32m、前方部主軸上で標高約31.75m、前方部南側で標高約31m、前方部北側で標高約31mである。上記の等高線より推定される墳頂部平坦面標高からは、第1・2段目テラスと異なり、墳丘南側と北側とで傾斜がつかず、同じ高さになっていることがわかる。また、主軸上でも第1・2段目テラスと異なり、前方部と比べて後円部が約1.25m高くなっている。

第3段目の高さは、後円部で約8から9 m、前方部の高い部分で約7から7.75m、前方部の低い部分で約4から5 mである。

平坦面の幅については、等高線の粗密から後円部で南北約23.7m、前方部の高い部分で南北約26m、前方部の低い部分で南北約12mと考えられる。

高さで斜面の幅より傾斜角度は、後円部主軸上で約32度、前方部主軸上で約29度と考えられる。

上記より、第3段目は、主軸長約131m、後円部最大幅約56m、前方部最大幅約56m、高さ約4から9 m、平坦面幅約12から26m、斜面角度約29から32度と推定復元可能である。

**築造企画** これまで宇度墓の形状や規模を復元してきたが、それらはどのようにして決められたのだろうか。墳端のデータが少ないため、必ずしも正確ではないかもしれないが、いくつかの気付いた点について述べる。まず、宇度墓の墳丘は、いくつかの同心円による後円部と後円部中心点を通る墳丘主軸を基準に造られたと考えられる。後円部径は、墳丘主軸線上で復元した墳丘各所との接点があり、前方部端も後円部径によって定められたようである。濠や外堤なども後円部径の同心円によって規定されていた可能性がある。濠や外堤でも主軸上に接点が認められるためである。

前方部については、まず第1段目南北の角について、後円部の同心円径により決められた南北端より、前

方部端を決めるための円の中心点にかけて2本の線を引き、二等辺三角形を描くことで定めたようである。次に、前方部各段南北の角から後円部までの角度については、後円部から濠東側までの主軸線上に点を定め、前方部の各段南北端より2本の線を引き、二等辺三角形を描いて定めたようである。前方部第1段目は、濠東側から外堤に二等辺三角形の頂点があるのに対して、前方部第2・3段目は後円部の東半分にて二等辺三角形の頂点があり、後円部第2・3段目と対応している。

上記のようにして、宇度墓が設計されたのではないかと考えたが、このことは他の前方後円墳にも単純に適用できるものではない。例えば、大阪府の履中天皇百舌鳥耳原南陵や応神天皇恵我藻伏岡陵では、前方部南北の角から後円部にかけての角度が宇度墓に比べて鋭く、前方部設計時に描いた二等辺三角形の頂点は、宇度墓の場合よりも後円部から濠外側にあったようである。また、宇度墓よりも新しい型式の須恵器を出土した大阪府の東百舌鳥陵墓参考地や白鳥陵では、前方部南北の角から後円部にかけての角度が宇度墓に比べて鈍く、前方部設計時に描いた二等辺三角形の頂点は、後円部内に収まるようである。概して前方後円墳は新しくなるほど前方部が広がるが、これは前方部設計法の変化によって起こった現象と考えられる。

**小結** これまでの検討から、宇度墓は墳丘復元長約180mの前方後円墳で、第1・2段目に比べ第3段目が著しく高いことが明らかになった。また、墳丘については、第1段目の途中までは地形に沿って南から北へと緩やかに下る地山を削り出し、その上に盛土することで造られていることがわかった。

第1段目から第3段目までの裾部とテラスないし平坦面の標高を検討した結果、第1段目は場所によって高さの差も大きく、テラス面も墳丘南側から北側へと傾斜がついていたが、第2段目ではテラス面に南から北への傾斜はついているものの、場所による高さの差が小さくなり、第3段目墳頂部で南から北への傾斜がなくなり、平坦になったことがわかった。 (横田)

## (2) 造出について

①南造出(第47図) ここでは、南造出に設定した第5トレンチの調査で得られた知見について述べ、南造出の考察をおこなう。

南造出の平面形は、現状で南に張り出した長方形であるが、長年の波浪等で削られており、本来の裾部形状については、調査で詳細な手がかりを得られなかった。南造出の東西現存長は約24m、南北現存長は約20mである。南造出は、標高約20.1から20.5mまで地山で、その上に盛土をして造られている。

**南造出の規模** 南造出は標高約20.8から20.9mに第1段目のテラスがあり、2段築成である。第1段目は残存状況が悪く葺石の有無は不明であるが、第2段目には一部葺石が残っていた。第5-2トレンチの地山が急傾斜となる標高約19.3mを造出裾部付近と仮定した場合、第1段目テラスとの比高差より、第1段目の復元高は約1.5mと推定可能である。第5-2トレンチの東隣にある第4トレンチで検出された後円部第1段目斜面葺石の標高は、低いところで約19.2mであり、このことも造出裾部付近の標高が約19.3mという想定を裏付ける。第2段目の復元高は、現状の第2段目頂部高約22.7から22.8mと第1段目テラスとの比高差より、約2mと考えられる。

第1段目斜面と第1段目テラスの幅は明らかでないが、第5-2トレンチの地山傾斜変化点からの角度とテラス面の高さを直線で交差させた場合、第1段目斜面復元幅は約1.7m、第1段目テラス復元幅は約1.5mとなる。この場合、第1段目斜面の復元角度は約41度である。

第2段目斜面と造出頂部の幅は、第5-1トレンチの葺石傾斜角度と造出頂部の高さを直線で交差させた場合、第2段目斜面復元幅は約3.8m、造出頂部復元幅は東西約12.5m、南北約9.3mとなる。第2段目斜面角度は、第5-1トレンチの葺石基底石より上の残存部分で約28度である。

上記より復元される南造出の規模は、東西約26.7m、南北約21m、高さ約3.5mである。ただし、この復元案では第1段目の復元角度が約41度と急傾斜で、本来これより緩やかな傾斜であった場合は、若干規模が大きくなることも考えられる。

**南造出の遺構** 前方部第1段目と南造出との境界では埴輪列が検出されたが、これが南造出第1段目テラスの埴輪列として南、東、西にも続いていたか否かについては、調査では明らかにできなかった。

造出頂部の埴輪列については、残存状況は良くないものの、第5-2・5-4トレンチで列が検出されたことから、その存在は明らかである。第5-1トレンチの第2段目斜面角度と第5-2トレンチの造出頂部埴輪列の位置より復元すると、埴輪列は東西約8.3m、南北約5.3mの長方形になる。

造出頂部では埴輪列の他に、形象埴輪や須恵器も出土した。ただ、それらが埴輪列の内側に配置されたのか外側に配置されたのかについては、原位置を保った破片が出土しなかったため確実なことは言えないが、他の古墳例より埴輪列内側に配置されたと考えて良いだろう。

南造出頂部の埴輪列は、復元位置からみて頂部端より約2mとかなり内側を廻っており、頂部中央の何かを囲っているかのようである。頂部中央の墳丘上面には形象埴輪と須恵器が置かれ、その下の墳丘中には埋葬施設や副葬品埋納施設が存在する可能性がある。そうした場合、第5-3トレンチの斜面流土中より出土した器種不明鉄器は、副葬品の一部とも考えられる。

現状の北造出の中央付近には、およそ葦石に使われたとは考え難い長さ50cmを超える比較的扁平な石材が10以上見られる。それらは中央付近に集中していることから、元々は埋葬施設や副葬品埋納施設を構成する石材であった可能性がある。南造出も北造出と同様の構造であったとも考えられるが、現状の南造出には証拠が何も無いため、可能性を指摘するに留めておく。

**南造出と前方部** 前方部と南造出との先後関係について、造出裾部が先ほど想定した標高約19.3m、後円部裾が第4トレンチの葦石より標高約19.2m、前方部裾が第6トレンチの傾斜変化点より標高約19mであったとすると、南造出が突出する第5-2トレンチから第5-4トレンチまでの地山が、高いところで標高約20.1から20.5mであることから、前方部の後に南造出が造り付けられたのではなく、前方部と南造出は同時期に地山の整形がおこなわれたことが明らかである。北造出についても、南造出と同様の理由から前方部と同時期に地山の整形がおこなわれたと考えられる。つまり、宇度墓の造出は、南・北ともに前方部と同時に計画的に造られたものである。宇度墓以外では、近年調査がおこなわれた奈良県の小奈辺陵墓参考地、大阪府の百舌鳥陵墓参考地、東百舌鳥陵墓参考地の造出も、地山整形の状況から見て、あとから付け足したのではなく、造出と前方部とが計画的に造られたことが確認できる<sup>(17)</sup>。

**南造出の役割** 宇度墓の例を除き、造出部は通常、墳丘の第1段目テラスと緩やかな斜面でつながり、斜面を下ると平坦になっている。第1段目テラスより造出部平坦面が低くなることから、通常は段築もみられない。宇度墓のように2段築成で、前方部第1段目斜面を下ると造出部との境界の埴輪列があり、そこから今度は高く上がるという造出部の例は、宇度墓以外に確認されていない。

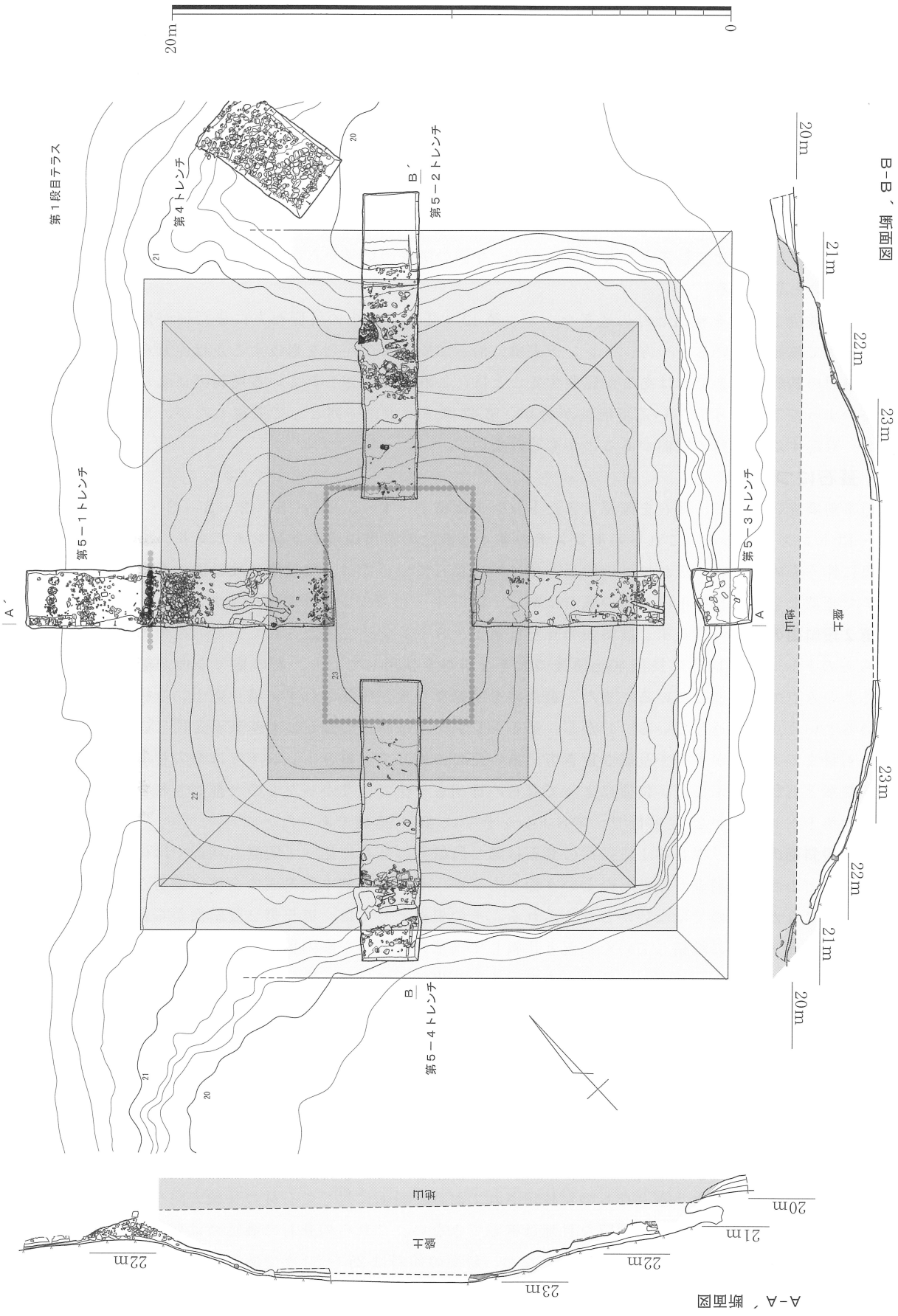
上記のように宇度墓の南造出は、他の例と比べて特異なものである。造出の機能については、一般に祭壇のような役割を想定されることや、例は少ないが埋葬場所として使用されることもある。大型前方後円墳の前方部頂にある壇状施設も、後円部の中心埋葬以外の埋葬場所として使用されたものがあるようである。例えば、履中天皇百舌鳥耳原南陵と応神天皇惠我藻伏崗陵の前方部頂には壇状施設があり、応神天皇惠我藻伏崗陵の壇状施設と仁徳天皇百舌鳥耳原中陵の前方部には埋葬施設の存在が知られている<sup>(18)</sup>。壇状施設全てに人体埋葬を伴ったかは確認されていないが、少なくとも壇状施設がある場合には、そこに埋葬施設や副葬品埋納施設があると考えて大過ないだろう。

宇度墓近傍の西陵古墳は、前方部頂に壇状施設があるが、宇度墓にそれは見られない。可能性の一つとして、宇度墓の南造出は、他の大型前方後円墳で前方部頂にある壇状施設と同様の機能を持っていたとも考えられるが、他に例が無く、詳細は造出頂部全体の調査を実施していないため不明である。(横田)

②北造出(第48図) 今回の調査の結果、墳丘の北側くびれ部にも造出の存在が明確となった。普段は濠水の下に隠れていることから推測すると、長期間にわたる波浪の影響で徐々に削られて、ついには水没するまでに墳丘が流失したのと考えられる。その中で、第12-1・12-2・13の各トレンチでは、葦石や埴輪列などの遺構が確認されたことから、造出の様相を多少なりとも垣間見ることができた。ここでは、それらの成果についてまとめておきたい。

**北造出の規模と構造** 今回の調査で、第12-2トレンチと第13トレンチで葦石基底面(墳丘裾)が把握さ

第47図 宇度墓 南造出復元図 (1/200)



れた。第47図に推定される裾のラインを破線で示したが、北造出の幅はおおむね25mと考えられる。

また、同時に墳丘裾の葺石基底面の高さが標高約18mであることが判明した。合わせて、第12-1トレンチでの埴輪列検出面が北造出の上面と考えられ、標高19.8mであることから、北造出の高さは約1.8mあると考えられる。

一方、北造出の長さであるが、調査範囲が及ばないこともあって不明である。造出上面の規模についても正確な北造出斜面の傾斜角度が不明なため、推定値についても控えざるを得ない。また、巡っていたであろう埴輪列による区画の規模についても、不明である。

なお、南造出との比較から、本来は方墳状であった可能性も否定はできないが、濠水の波浪の影響とはいえ高まりをすべて崩落させてしまうとも考えにくく、今回の調査の結果からは通有の造出の構造をもつと判断して大過ないと思われる。

**埴輪列** 埴輪列も一部を検出したに過ぎないが、第12-1トレンチの外側西方にまだ列が伸びていることは表面観察で確認している。一方、トレンチ東壁に沿ってNo.5～7が列を形成する点は注意を要する。墳丘第1段斜面の基底石列までではあるが屈曲することは、これまでも知られている埴輪列による区画の出入口か通路のようなものを示している可能性があり、第47図では仮に一例として表現したが、東側へは数本分空いて、対応する埴輪列の屈曲があるのかもしれない。(清喜)

### (3) 葺石について

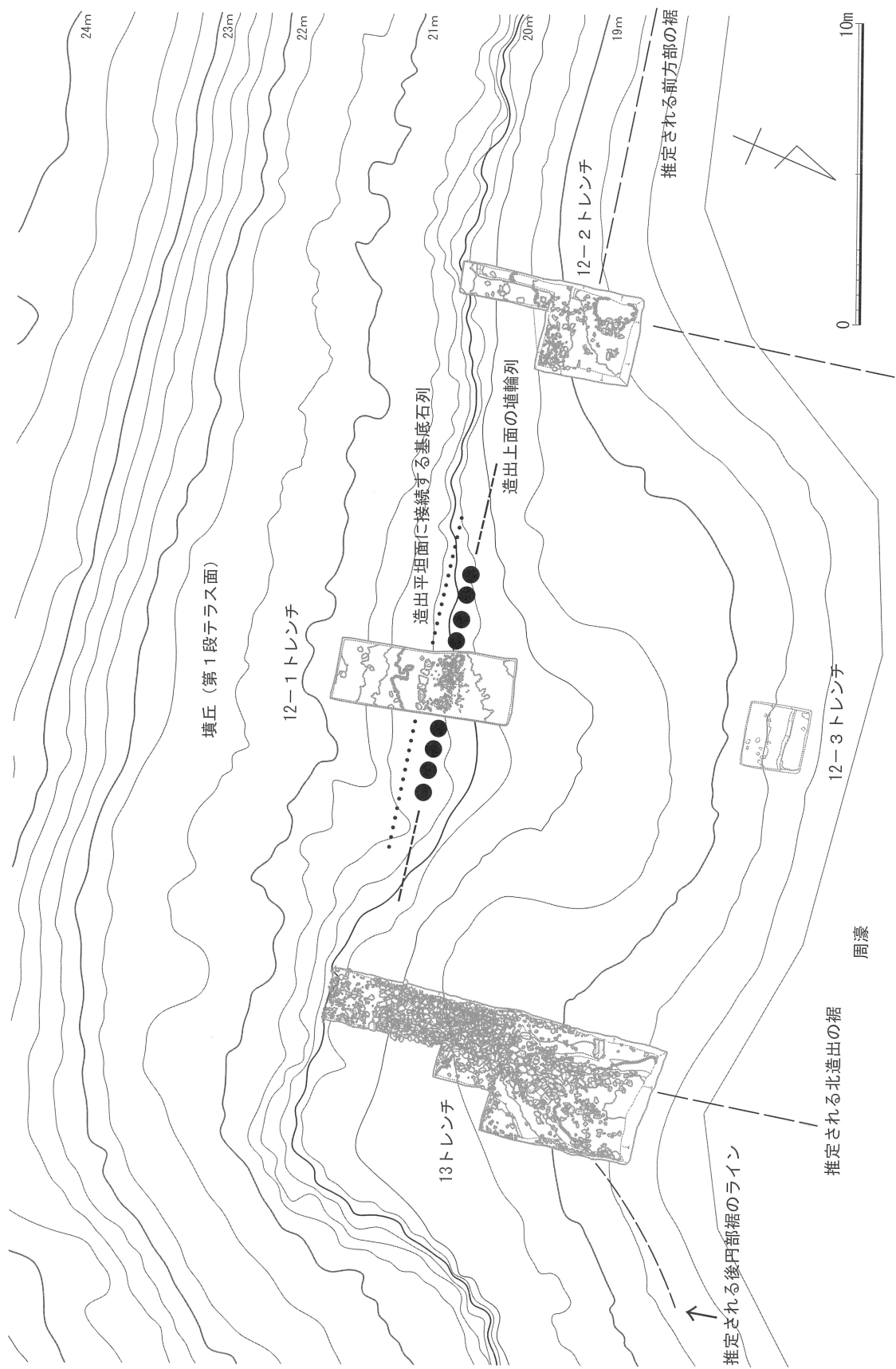
今回の事前調査において、葺石を確認できたトレンチは第1・4・5-1・5-2・5-3・5-4・8・12-1・13トレンチである。これらのトレンチの多くは南北の造出周辺のトレンチであり、検出された葺石は造出に伴うものが多い。それ以外の墳丘本体に伴う葺石については、墳丘第2段斜面の葺石は第1・8トレンチで確認でき、墳丘第1段斜面の葺石は第4・12-1・13トレンチで確認できた。

**墳丘第2段斜面の葺石** 墳丘第2段斜面の葺石は第1・8トレンチで確認されているのみである。基底石にはどちらのトレンチも同様に長径40cm前後の大きな石材を使用しており、石の扁平な面が濠側を向くように置くという点でも共通している。また、裏込めや明瞭な目地が確認されず、墳丘盛土に直接葺石をおこなっているという点も共通している。しかし、第1トレンチでは斜面の葺石にも基底石と同じような石材から拳大の石材まで大きさが多様で乱雑な置き方であったのに対して、第8トレンチでは拳大程度のものが多く比較的整然と石材が並ぶなど、位置によって葺石の様相も一律ではなかったものと推測される。なお、斜面の傾斜は第1トレンチが25度前後で、第8トレンチでは20～25度であった。

**墳丘第1段斜面の葺石** 墳丘第1段斜面の葺石は第2段斜面の葺石に比べて明瞭な状況では確認できていない。湧水などのために調査が難航したという面もあるが、そもそも第1段斜面の全体に葺石がほどこされていたわけではなかったのではないかと考えられる。その根拠としては、墳丘第2段斜面から転落した相当量の石材が第1段テラスに堆積していた状況と比較して当墓の汀周辺や濠内掘削時に石材がほとんど確認されなかった点があげられる。ただし、その一方で南北の造出付近では第1段斜面の葺石や多くの転落した石材が確認されている。これらのことを踏まえると、墳丘第1段斜面の葺石は全周にほどこされていたわけではなく、造出周辺などの部分的なものであった可能性が考えられる。

**造出における葺石** 南北の造出の斜面には葺石がほどこされていたことが確認できる。部分的にしか確認できなかった箇所も多いが、第5-1トレンチでは南造出の斜面の葺石を良好な状態で検出することができた。南造出北側斜面の葺石は墳丘本体の第2段斜面ほどの大きな基底石は使用しておらず、長径30cm前後の石材を二つほぼ垂直に積上げたのちに斜面への葺石をほどこしていることが確認できた。斜面における葺石の石材は基底石に比べると小振りなものが使用されており、斜面に対して石材の長軸方向を突き刺すように置いた意図が感じられるものの、明瞭な目地は確認できない。これらの葺石に裏込めは存在せず、南造出を形成する墳丘盛土の上に直接置かれていた。なお、斜面の傾斜は25～30度であり、墳丘斜面の傾斜よりも勾配がやや急な印象を受けた。

**小結** 墳丘各所における葺石の状況のみてきたが、その様相は一律ではないといえる。特に、南造出につ



推定される北造出の裾

第48図 宇度墓 北造出遺構検出状況図 (1/200)

いては墳丘本体の築造時に伴うものではなく後出するものではないかとの意見もあったが、それについては埴輪の検討から同時性が保障されており、否定される。したがって、今回の調査において確認された葺石の多様なあり方は同一古墳築造時における変異の幅のなかで理解すべき問題といえる。また、当墓の墳丘第1段斜面の葺石については造出周辺などの部分的なものであった可能性が指摘できる。これについては墳丘第1段の多くの部分が地山を削り出すことによって形成されており、その地山に礫が比較的多く含まれていることも関係している可能性がある。すなわち、地山に含まれる礫を葺石と見立てていたのかもしれない。なお、第2段斜面および第3段斜面については、第1・8トレンチの状況や現状の表面観察から判断して、葺石が全周していたものと推測される。ただし、裏込めや明瞭な目地をもたず墳丘盛土に直接置くような簡易な方法であったために、転落しやすい状況であったようである。(加藤)

## まとめ

### (1) 調査

これまでの陵墓地形図及び今回新たに作成した測量図から読み取れる墳丘の状況と調査結果から、裾回りが削られたこと以外に、後世に大きな改変は行われていないと判断できる。これは、今回の出土遺物が当墓に伴う埴輪を中心とするものでほぼ占められていることと矛盾しない。

また、トレンチを設定しての調査により、葺石や埴輪列が確認された。葺石は近隣で産出する砂岩が使用されていた。確認された範囲は墳丘第2段斜面のほか、墳丘裾としては両造出周辺の地形として奥まった箇所でのみ確認されている。他のトレンチでは確認されていないため、裾回りの改変により失われている可能性が高いと考えるべきであろうか。

埴輪は「淡輪型」とされる特徴をもつ埴輪が多く出土している。一方でその特徴によらないものも一定程度存在していることも確認された。

造出については、これまで陵墓地形図から読み取れていた南造出の方墳状の高まりが、本来のものであることが確認された。頂部における形象埴輪の使用、前方部との境が谷状となり区画の埴輪列が設置されていたことなど、ある程度の構造が確認された。北造出は、濠水の波浪により大半が流失して、判然としていなかったが、幅については数値の上で一定の情報が得られた。埴輪列や葺石なども確認され、こちらもある程度の構造を推定することができた。特に南北の造出に、明確な構造の違いがあり、墳丘本体との微妙な位置関係にも違いが推定できた。これは、両くびれ部に造出が存在する場合に、規模や構造が異なる場合があり、それが何かしらの機能の違いによるものである可能性が考えられよう。当庁の過去の調査でも、小奈辺陵墓参考地において東西の造出の規模と構造が異なることが確認されている(本誌第62号)。

### (2) 工事

今回の事前調査の結果を踏まえて、墳丘裾護岸については捨石工法を採用することで検討している。また、北造出については、濠水が満水時の水際に埴輪列等の遺構が存在しているため、これらを保護することと、北造出の存在が満水時においても、ある程度視覚的にも把握できるようにするために、調査で得られた北造出の幅で数mほど濠側に護岸ラインを前出しして設定する方向で検討中である。この範囲については、布団籠を用いる予定である。

最終的な工法と施工図については、次号以降に掲載予定である。

(清喜・加藤・横田)

## 註

(1) 藤永正明・岸本道昭『淡輪遺跡発掘調査概要』Ⅳ、大阪府教育委員会、1982年。

(2) 宮内公文書館所蔵の公文書『明治34年諸陵寮出張所工事録2』(識別番号:2568-2)の23号。

(3) 註(1)に同じ。

(4) 註(1)に同じ。

(5) 5～8だけは須恵器系の製作者による埴輪の可能性もあるかもしれない。これらは器壁も薄く、胎土も精良である。た

だし、今回の事前調査において確認された当墓出土の須恵器はここまで精良な胎土ではない。

- (6) 中島和彦・鐘方正樹「埴輪の生産と供給」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1991』奈良市教育委員会、1992年。
- (7) 田辺昭三『須恵器大成』、角川書店、1981年。
- (8) 植野浩三「最古の須恵器型式設定の手続き」『文化財学報』第13集、奈良大学文学部文化財学科、1995年。  
岡戸哲紀「T G 232号窯の初期須恵器」『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅳ、大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会、1995年。
- (9) 植野浩三「埴輪生産と須恵器工人」『文化財学報』第11集、奈良大学文学部文化財学科、1993年。
- (10) 川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第2巻第4号、財団法人大阪文化財センター、1977年。
- (11) 註(10)に同じ。
- (12) 宇度墓の須恵器について、その産地推定のほか胎土等の特徴で類似するものが無いか確認するため、和歌山県教育委員会と和歌山市教育委員会、関西大学考古学研究室が所管する楠見遺跡出土須恵器と公益財団法人和歌山県文化財センターが所管する平井Ⅱ遺跡出土須恵器を実見させて頂いた。その結果、器形や赤色粒を含む点等で類似する物はあったが、宇度墓のように砂粒を多く含む須恵器は、両遺跡出土資料には皆無であった。ただし、それは宇度墓の須恵器が両遺跡の周辺で生産されていたことを否定するものではない。宇度墓専用の須恵器や埴輪を生産するため、須恵器工人と埴輪工人が一時的に共同して作業した結果、埴輪のように砂粒を多く含む須恵器が作られたと考えた場合、それを生産した窯近辺以外には、特徴的な胎土の須恵器が出土することはほとんど無いと考えられるからである。  
宇度墓出土須恵器関連の資料調査では、和歌山県教育委員会、公益財団法人和歌山県文化財センター、和歌山市教育委員会、関西大学考古学研究室にお世話になった。記して感謝申し上げます。
- (13) 宇度墓築造以前の遺物の一部については、国立歴史民俗博物館の藤尾慎一郎氏よりご教示頂いた。記して感謝申し上げます。  
なお、記載内容の責任については筆者にある。
- (14) 渡辺昌宏・藤永正明『淡輪遺跡発掘調査概要』Ⅲ、1981年。
- (15) 註(14)文献のP 33に載る1の無文壺口縁部は、器形より縄文時代晩期から弥生時代初め頃の土器のようにも見えるが、実見していないため、詳細は不明である。
- (16) 森島康雄「6. 瓦器碗 (2)分類」『概説 中世の土器・陶磁器』、真陽社、1995年。
- (17) 徳田誠志・清喜裕二・加藤一郎「百舌鳥陵墓参考地 墳丘裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第61号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2010年。  
内本勝彦・土井和幸・十河良和・三辻利一・徳田誠志・清喜裕二・加藤一郎・奥田尚・パリノサーヴェイ株式会社『百舌鳥古墳群の調査』5、堺市教育委員会、2011年。  
清喜裕二・有馬伸・加藤一郎「小奈辺陵墓参考地 墳塋裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第62号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2011年。  
徳田誠志・清喜裕二・加藤一郎・横田真吾・土屋隆史「東百舌鳥陵墓参考地整備工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第65号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2014年。
- (18) 梅原末治「応神・仁徳・履中三天皇陵の規模と营造」『書陵部紀要』第5号、宮内庁書陵部、1955年。  
和田軍一「応神天皇陵」『日本考古学辞典』、東京堂出版、1962年。



宇度墓 遠景①(南東から 紀淡海峡から淡路島を臨む)



1 宇度墓 遠景②(南から 淡路島から明石海峡、六甲山を臨む)



2 宇度墓 遠景③(北から 愛宕山から臨む)



1 第1トレンチ 第2段斜面葺石(南東から)



2 第1トレンチ 上部全景(東から)



3 第1トレンチ 第2段斜面葺石(東から)



4 第1トレンチ 第2段斜面葺石(南から)



5 第1トレンチ 下部全景(南東から)



1 第4トレンチ 全景(南西から)



2 第4トレンチ 全景(北から)



3 第4トレンチ 第1段斜面葺石(南から)



4 第4トレンチ 東壁(西から)



5 第4トレンチ 西壁(東から)



1 第5-1トレンチ 全景(北から)



2 第5-1トレンチ 谷部埴輪列(北から)



1 第5-1トレンチ 南造出形象埴輪片(北から)



2 第5-1トレンチ 谷部埴輪列および南造出北斜面葺石(北東から)



1 第5-1トレンチ 谷部掘削時埴輪検出初期状況(北から)



3 第5-1トレンチ 谷部埴輪列No.3(北から)



2 第5-1トレンチ 谷部埴輪列断割(北から)



4 第5-1トレンチ 南造出西壁(東から)



5 第5-1トレンチ 南造出断割(東から)



6 第5-1トレンチ 境部西壁(東から)



7 第5-1トレンチ 第1段テラス断割(東から)



1 第5-2トレンチ 全景(東から)



2 第5-2トレンチ 南造出埴輪列検出状況(東から)



3 第5-2トレンチ 南造出埴輪列(東から)



4 第5-2トレンチ 下部南壁(北から)



5 第5-2トレンチ 上部南壁(北東から)



6 第5-2トレンチ 葺石(南から)



7 第5-2トレンチ 掘削前(東から)



1 第5-3トレンチ 全景(南から)



2 第5-3トレンチ 葺石(南から)



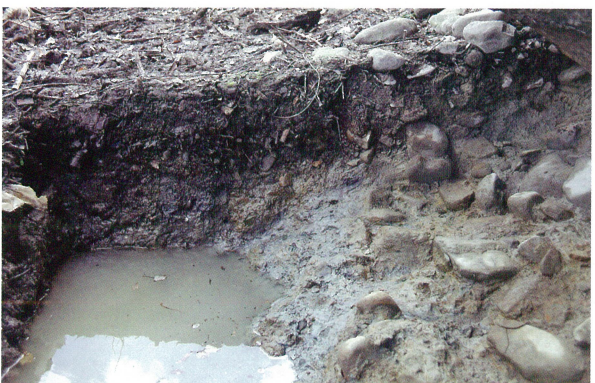
3 第5-3トレンチ 葺石(東から)



4 第5-3トレンチ 上部西壁(南東から)



5 第5-3トレンチ 上部西壁(南東から)



6 第5-3トレンチ 下部西壁(東から)



7 第5-3トレンチ 掘削前(南から)



1 第5-4トレンチ 全景(西から)



2 第5-4トレンチ 南造出埴輪列(西から)



3 第5-4トレンチ 南造出埴輪列No.2(南から)



4 第5-4トレンチ 上部南壁(北西から)



5 第5-4トレンチ 下部南壁(西から)



6 第5-4トレンチ 葺石(西から)



7 第5-4トレンチ 掘削前(西から)



1 朝顔形埴輪(1)



2 円筒埴輪(12)



3 円筒埴輪(13)



4 円筒埴輪(26)



1 朝顔形埴輪(29)



2 円筒埴輪(44)



3 円筒埴輪(31)



1 格子目タタキをもつ円筒埴輪



2 格子目タタキをもつ朝顔形埴輪(61)



1 断続ナデ技法Aがみられる円筒埴輪(45)



2 断続ナデ技法Aがみられる円筒埴輪



1 盾形埴輪



2 靱形埴輪



1 甲冑形埴輪(短甲・草摺)



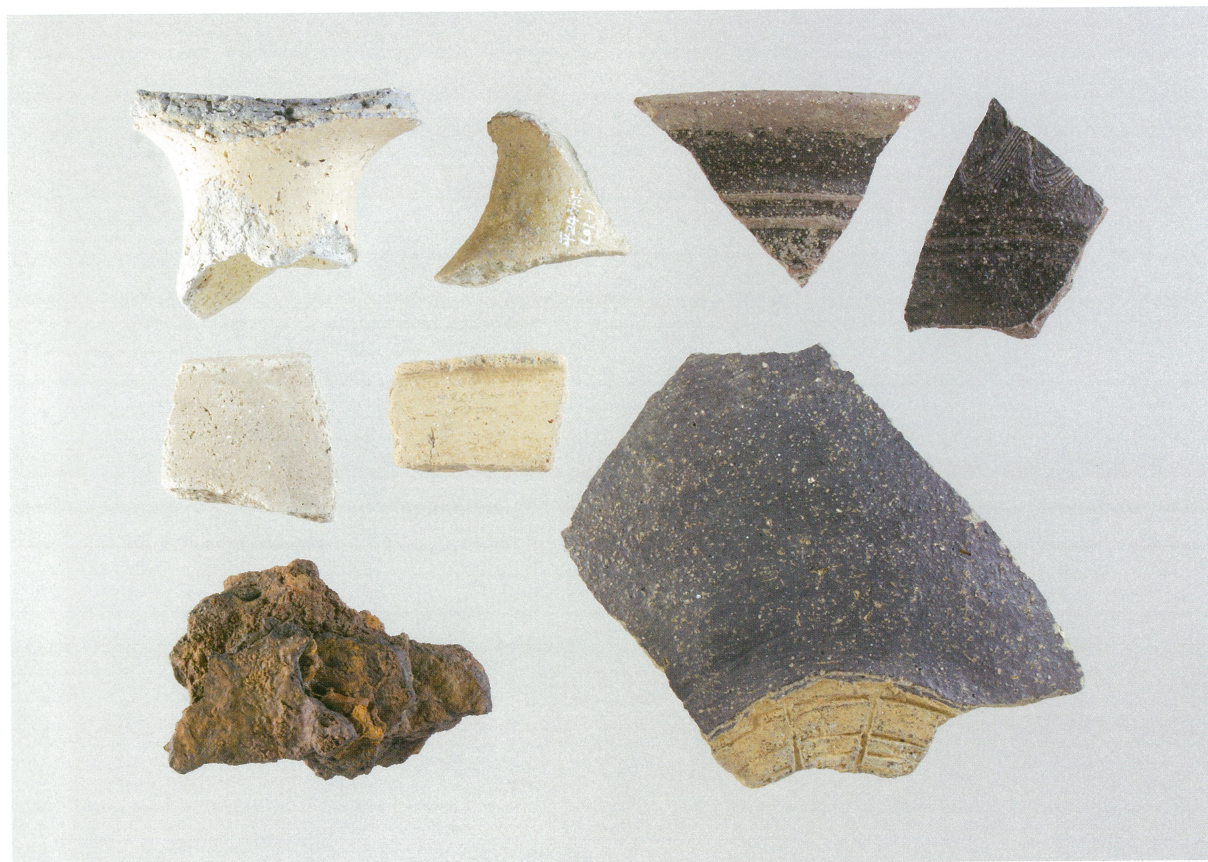
2 蓋形埴輪



1 囿形埴輪(117のA面)



2 冢形埴輪



1 須恵器・鉄器



2 土器・陶磁器・金属器・石器



1 宇度墓 遠景(南から)



2 番川の河原①(宇度墓西側)



3 番川の河原②(宇度墓南側上流)



4 番川の河原③(宇度墓南側上流)



5 宇度墓 近景①(北西から 後円部～北造出)



6 宇度墓 近景②(北から 北側くびれ部付近)



7 宇度墓 近景③(北造出)



8 宇度墓 北造出(南から)



1 南造出(東から)



2 南造出(北東から)



1 後円部頂 立石 1 (南西から)



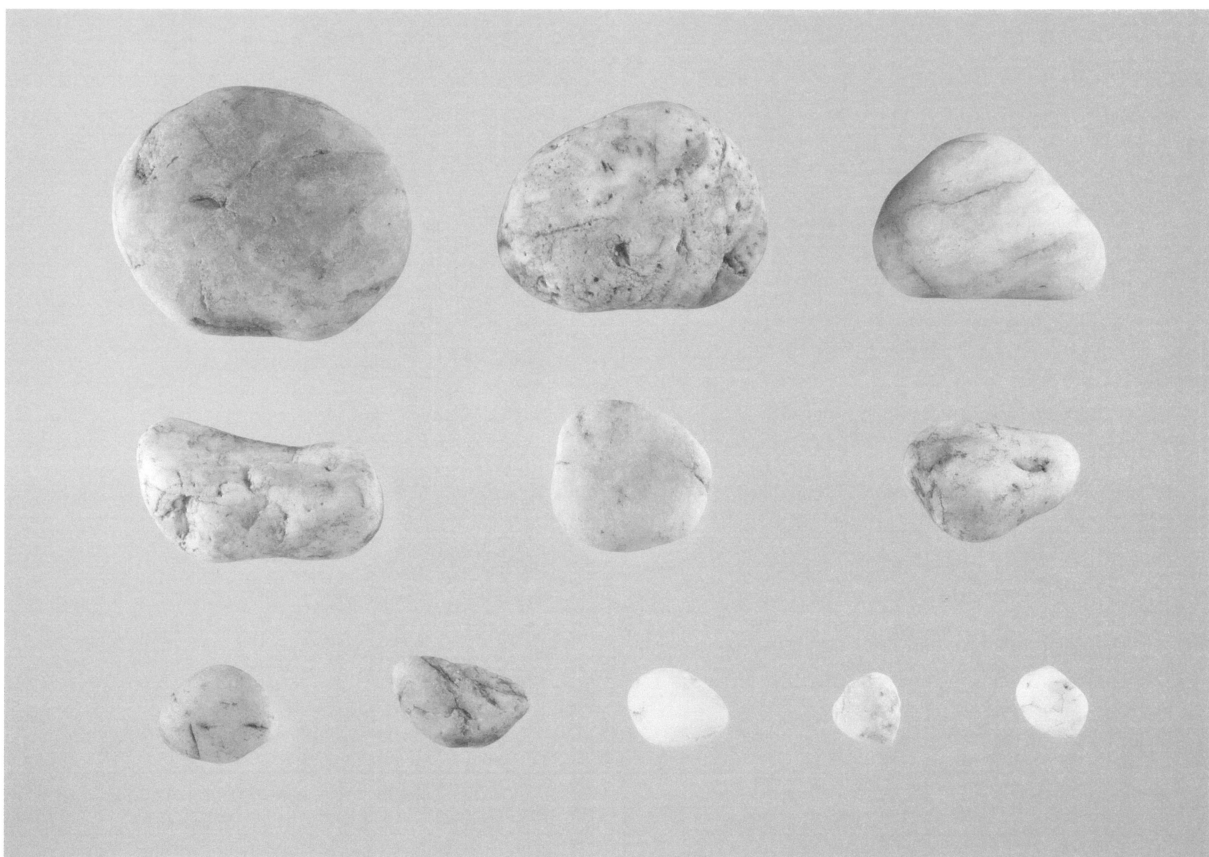
2 後円部頂 立石 2 (南から)



3 後円部頂 立石 3 (南から)



4 前方部 立石 4 (北東から)



5 白色円礫(後円部頂にて採集)



1 第1トレンチ 埴輪列①(東から)



2 第1トレンチ 埴輪列②(南東から)



3 第1トレンチ 埴輪列③(南から)



4 第1トレンチ 埴輪列断割①(東から)



5 第1トレンチ 埴輪列断割②(南東から)



6 第1トレンチ 埴輪列断割③(東から No.1、2)



7 第1トレンチ 埴輪列断割④(東から No.3、4)



8 第1トレンチ 埴輪列断割⑤(東から No.5、6)



1 第2トレンチ 全景(南西から)



2 第3トレンチ 全景(南西から)



1 第14トレンチ 全景(東から)



2 第15トレンチ 全景(東から)



1 第13トレンチ 掘り下げ途中経過①(北から)



2 第13トレンチ 掘り下げ途中経過②(東から)



3 第13トレンチ 掘り下げ途中経過③(西から)



4 第13トレンチ 中央畦西面(西から)



5 第13トレンチ 全景(北から)



1 第13トレンチ 全景(西から)



2 第13トレンチ 南壁(北から)



3 第13トレンチ 北壁(南西から)



4 第13トレンチ 東壁(西から)



5 第13トレンチ 西壁(南東から)



6 第13トレンチ 拡張区(西から)



7 第13トレンチ 拡張区円形埴輪出土状況(西から)



8 第13トレンチ 円形埴輪付近断割(北から)



1 第12-1トレンチ 埴輪群①(東から)



2 第12-1トレンチ 埴輪群②(北西から)



3 第12-1トレンチ 埴輪群③(西から)



4 第12-1トレンチ 埴輪群④(東から)



5 第12-1トレンチ 埴輪列(西から)



6 第12-1トレンチ 埴輪列と葺石(東から)



7 第12-1トレンチ 全景(北西から)



1 第12-1トレンチ 埴輪列断割①(北から)



3 第12-1トレンチ 埴輪列断割③(西から)



2 第12-1トレンチ 埴輪列断割②No.3~5(北から)



4 第12-1トレンチ 埴輪列断割④No.1~3  
(北西から)



5 第12-1トレンチ 埴輪列半裁(北から)



6 第12-1トレンチ 埴輪列断割⑤No.5~7  
(北西から)



7 第12-1トレンチ 埴輪列半裁No.5(北から)



1 第12-2トレンチ 全景(北から)



2 第12-2トレンチ 西壁①(北東から)



3 第12-2トレンチ 西壁②(東から)



4 第12-3トレンチ 全景①(北から)



5 第12-3トレンチ 全景②(東から)



1 第6トレンチ 全景(南から)



2 第6トレンチ 掘削前(南から)



3 第6トレンチ 上部北壁(南から)



4 第6トレンチ 上部西壁①(東から)



5 第6トレンチ 上部西壁②(東から)



6 第6トレンチ 下部全景(東から)



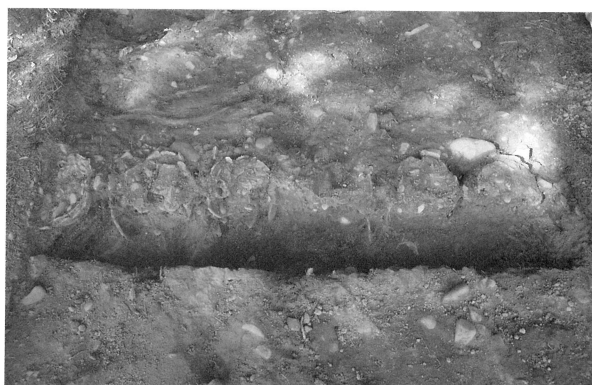
7 第6トレンチ 上部埴輪列(東から)



1 第6トレンチ 上部埴輪列(南から)



2 第6トレンチ 上部埴輪列断割(南から)



3 第6トレンチ 上部埴輪列半裁(南から)



4 第6トレンチ 上部埴輪列No.1、2断割(南から)



5 第6トレンチ 上部埴輪列No.1、2半裁(南から)



1 第8トレンチ 上部テラス面と葺石(南西から)



2 第8トレンチ 上部葺石(西から)



1 第8トレンチ 上部テラス面(南から)



3 第8トレンチ 下部全景(西から)



2 第8トレンチ 下部北壁(南から)



4 第7トレンチ 全景(南西から)



5 第9トレンチ 全景(西から)



6 第10トレンチ 全景(北から)



7 第11トレンチ 全景(北東から)